校舎改築落成
創立33周年
記念誌

33

福島県立
南会津高等学校

目　次

口　　絵……1
ごあいさつ……8
目で見る母校の変遷……6
思い出の学び舎：分校……7
歴代学校長……14
歴代P.T.A会長、湧雲会長、同窓会長……15
歴代生徒会長……16
歴代学校長からの思い出の便り……17
南会津高校33年のあゆみ……28
回　想　記……37
同窓生のたより……59
資 料 編
・学校施設の概要……90
・生徒会部活動アラカルト……96
・年次別卒業者数……99
・現職員一覧表……100
・旧職員一覧表……101
編集後記……107

校歌

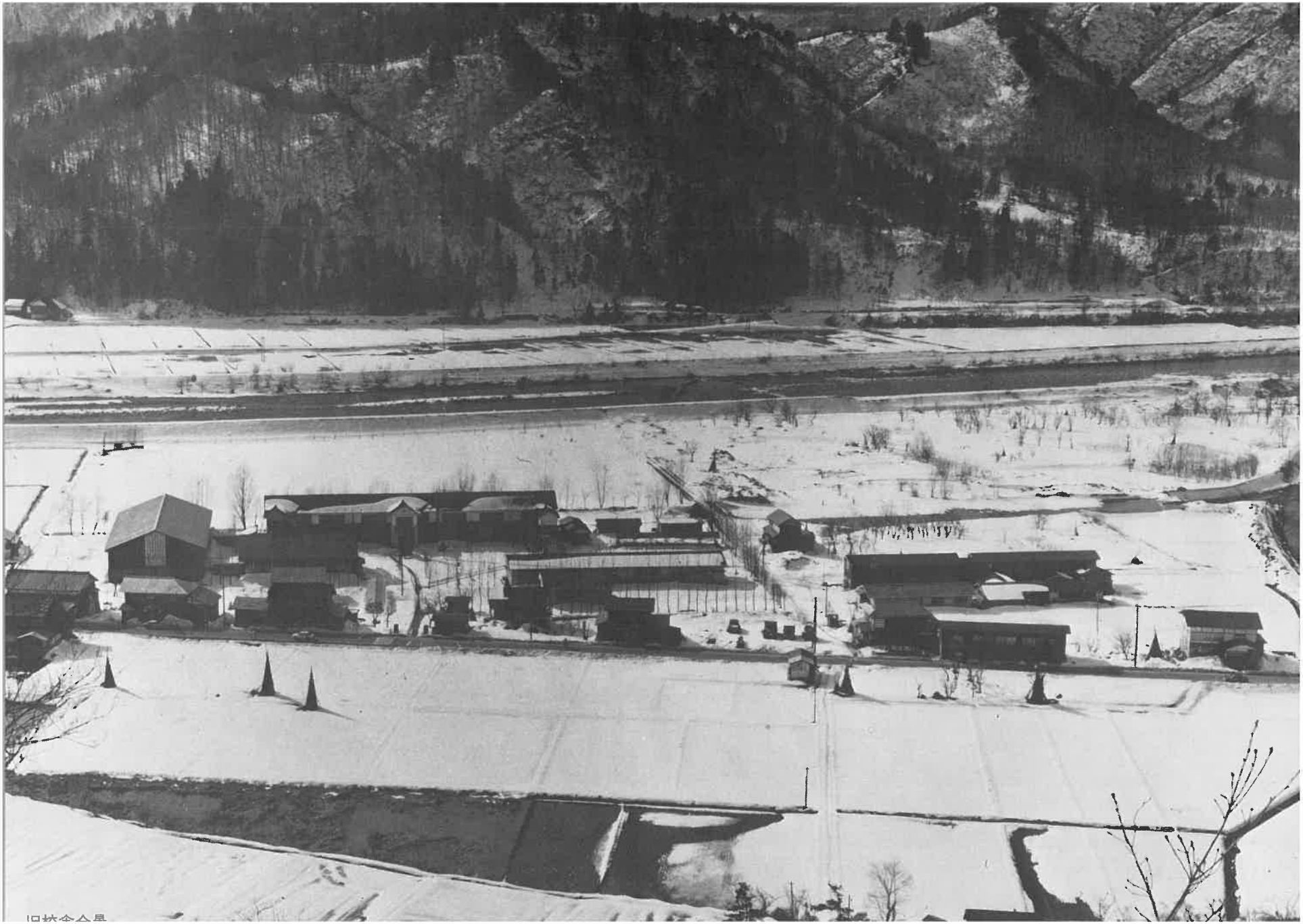
作詞 梁取三義
作曲 古関裕而

一、山脈の肌清く 晴れゆく朝
伊南のせらぎ 水澄むふるさと
展けゆく郷 新たな文化
南南 南会津高等学校

二、幸多き大自然 尾瀬の高原
燧嶽に湧き出ずる雲
かがげる理想 花咲く文化
南南 南会津高等学校

三、春の花若き歌 希望あふれて
錦繡の秋 しるべの子
正しき法を 貫く文化
南南 南会津高等学校

新校舎全景



新校舎・前庭

新校舎・正面玄関

武道館・体育館

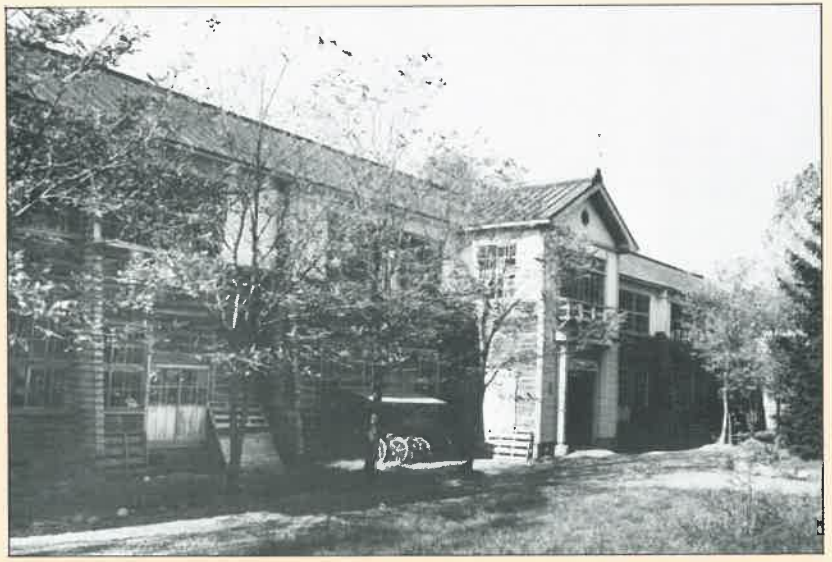
校歌碑

ヒメサユリ

目で見る母校の変遷

1 南会西部高校誕生の地
焼失前の富田中学校（昭和23年）

2 雪にうずもれた南会西部高校（昭和29年）



3 改築前の南会津高校（昭和48年）

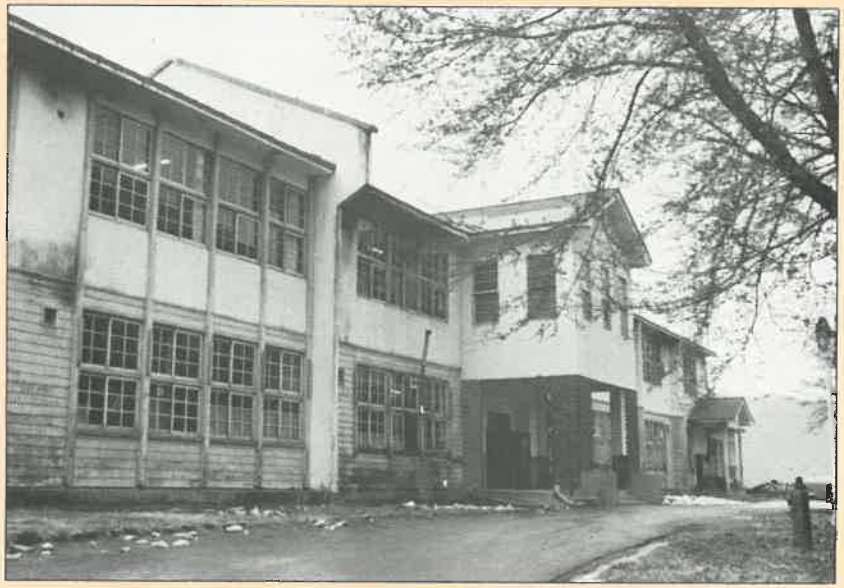
4 新装なった南会津高校（現在）

思い出の学び舎・分校

伊南分校(現伊南村立伊南中学校)

明和分校，つつじヶ丘分校(現在廃校)

朝日分校(旧朝日村立朝日小学校)



只見分校，只見校舎(改築前の只見高校)

発刊にあたり

校長　星野俊一

このたび校舎改築落成、創立33周年を迎えるにあたり、記念誌を発刊することができますことはまことに喜びにたえないところであります。

本校は昭和23年７月31日、旧富田村立富田中学校内に南会西部高等学校として呱呱の声をあげてから幾多の変遷を経てまいりました。校史をひもとけば、伊南、舘岩、朝日、伊北の各村に分校が併置され、また季節分校、分室の開設、短期農業科、同家庭科の設置や募集停止など、全日制普通科として定着するまで「生み」の苦しみと「育成」の悩みを如実に物語るうつりかわりが随所にあり、さらに相つぐ台風や集中豪雨などの水害を克服して今日に至ったのであります。

昭和43年、創立20周年記念誌が橋本秀夫校長時代に発刊されてから年を重ねること十三、校舎も偉容を誇る近代建築として完成し、多年の念願であった第二体育館も当局の特段のおはからいにより完成も間近かであります。卒業生も総数三千七百有余の多きを数え、それぞれ有為の指導的、または社会の中堅として地域社会に貢献しているのみならず全国的に活躍しているところであります。

今日に至るまでの先人の苦難の跡をしのび、本校に学ぶ生徒、職をともにする教職員、心を一つにして、ともすれば物質偏重に傾く弊風を打破して創立時の質実剛健の原点に思いをいたし、心身の調和のとれた人間を育成し、さらに伝統に輝きを加えるべく努力せねばなりません。

編集にあたり、地域社会の方々、旧職員、同窓生から原稿や貴重な資料をいただき、また編集委員のみなさまには特別のお骨折りをいただきましたことを、ありがたく厚く御礼申しあげ発刊のことばといたします。

ごあいさつ

校舎改築落成等記念行事実行委員長
P・T・A会長　渡部 次郎

昔、といっても数年前までは、冬期間南会高の玄関に入るのには転げ落ちるか、すべり落ちるかしたものでした。今、新校舎の玄関を昇りながら校舎を見上げ庭を見下すとき、感無量なものがあります。

当初県の設計書は前庭にH型のものでしたが、豪雪の関係から現在の鹿水川河川敷を希望し細かい点まで申し上げましたが、心よく設計変更され、我々の希望以上、想像以上の設計となり、星組の施工するところとなりました。星組では県から表彰を受けるという立派な工事で、見事に完成しました。

顧みますと改築期成同盟を作ってから10年、前会長の五十嵐氏初め歴代校長、教頭の諸先生、地元星村長、飯塚、河原田両県議の御努力、県に陳情に行った馬場文男さん初めＰＴＡ役員、会員の皆さん、県におられた前の教頭の佐々木先生外、地域の皆さん方に厚く御礼申し上げます。

工事が始まってからは佐川前校長と辺見事務局長が中心となり、環境、内容の整備充実に御骨折をいただきました。

今第二体育館が建設中ですが、これは新校舎建築中でＰＴＡとしては一寸遠慮して、県には一度も陳情しませんでした。寝耳に水の如く決って、初めは信じられませんでした。

これは先に県の教育関係の方々が大勢視察に来られたとき、南会高生徒の行儀の良さ、挨拶の良さが気に入られ、各運動クラブの猛練習、そして県下での優秀な成績が全員一致で南会高第二体育館建設と決定したと聞いております。全く生徒諸君のおかげです。

改築された校舎はみかけだけでなく、設備も充実したものです。これを十分に活用し、教育の効果が益々上るものと期待してやみません。

最後に本会の運営に当られたＰＴＡ、同窓会、職員の皆様に対し敬意を表し、厚く御礼を申し上げ私の挨拶といたします。

お祝いのことば

南郷村長　星　　正

輝かしい三十有余年の歩みを綴る「南会津高等学校創立33周年記念誌」の発刊に際して、地元の村長として一言お祝いのことばを申し上げます。

昭和23年７月、福島県立南会西部高等学校（定時制）として富田村立富田中学校（現南郷村和泉田）に併設され、昭和25年12月、現在の地に校舎を新築されてより幾多の変遷を経て、今ここに近代的な４階建の新校舎が完成いたしましたことはまことに喜びに堪えないところであります。

全国でも村に県立の高等学校が設置されているところは少ないとのことであり、設立以来歴代の校長先生はじめ先輩諸君が後輩のため、昭和26年４月、全日制普通科の設置を実現され、地域唯一の高等学校普通科教育の場としての殿堂が築かれたのでありますが、再度にわたる水害による校舎等の流失、損傷により、一時はその存続もあやぶまれたのであります。しかし地域の方々を初め県当局、同窓会及びＰＴＡをあげての意欲的な高校教育に対する熱意と努力によって立派に復旧し、現在の名実共に実力ある南会津高等学校に育てあげられ、幾多有為の人材を社会に輩出され、地域振興の原動力となったことは今更言をまたないところでございます。

今後も南会津高等学校発展のためには、村としても微力をつくしてまいりたいと存じております。過去33年の歴史を振り返り幾多の試練と困難を踏越えて、成長を遂げた南会津高等学校を、さらに大きく飛躍して県下に冠たる高校として発展するよう努力することを皆様とともに誓い合うことに、本誌発刊の意義があるものと存じます。

教育の道はこれをきわめたということはなく遠く無限であるかも知れませんが、一人一人が毎日毎日の努力の積み重ねによって人間として完成の彼岸に到達するものであると確信いたしております。

地域唯一の県立高校であり、地元子弟教育の殿堂として既に三千余名の有為な人材を世に送り出し、全国に活躍しておられますが、さらに永久にこれが続けられる偉大な殿堂が完成された意義はまことに大きなものがあります。三十有余年にわたり献身的努力を積み重ねてこられました先輩諸兄のご労苦に重ねて謝意を述べ、今後の限りない本校のご発展を心より念願いたしましてお祝いのことばといたします。

ごあいさつ

湧雲会長　斎藤 良三

南会津高等学校の近代的永久校舎が完成致しました。長い間夢にえがき切実な思いで待ち望んでおりました学校が遂に実現致しました。予期しておりましたものより遙かに立派な校舎が、極めて順調に出来ましたことは私共の何物にもかえ難い喜びでございます。

我が湧雲会は南会津高等学校後援会を改称して継承したものです。昭和30年に辺見文助氏（故人）の発議により、高校後援会を作り協力体制を備えようという事になりました。ちょうど戦後のベビーブームに基く高等学校入学希望者が急増した対策の一環として、地元有志による後援会を作り校舎の増築を県当局に要望し、その促進運動を行うとともに良き教育環境の整備に努力することを期したのであります。

その間、辺見文助氏の熱意と努力は大変なものでした。数次にわたった発起会は必ずしも順調でなく、異論として県立高校に対し地元で経済的な負担まで考慮する必要があるか、との疑問的意見も出ました。

しかし顧みれば本校創立以来地元村当局を初め地域社会の人達の物心両面の協力は容易ならぬものがありました。例えば旧校舎の提供、敷地の調達などで、それは戦前よりの既設の高校では到底考えられないものでした。その先人達の意向を体しそれを組織し継承すべきであるとの結論に達して、「南会津高等学校後援会」が設立されました。以来その趣旨に基づき地域の人達の協力を得て努力を続けてきました。本校創立20周年記念式典の挙行には主として後援会がその任にあたりました。その後設備の充実や運動部活動等に側面より協力して来ました。

本校校舎が度々の水害によって損傷が目立つようになり、かつ旧校舎は新築当初よりその規範に不備がありましたので地域各村及びＰＴＡとともに要望いたしました。当初、県では校舎は建ててやるが内部備品やその他地元でも相応の協力が必要であるという話で、後援会は極力それに応ずる覚悟でおりました。

文部省の文教政策の前進と県当局の理解と努力によって、昭和52年に新校舎建築が決定し、校舎の建築は勿論、諸設備は全部国費及び県費にて施工されることに決定。遂に誠に見事な近代的新校舎が完成致しました。

私達はじめ地域社会の皆様の喜びは筆舌に尽くせぬ思いです。衷心より〝万才〟を叫びたい思いです。53年に「後援会」を「湧雲会」と改称。湧雲会は前記後援会設立の主旨をそのまま継承し、地域社会の高校に対する協力精神は少しも変らないものです。

顧みると、昭和23年に新制高校の出現にみな驚き 民主社会の到来に目を見張りました。校舎建築、分校の統合とようやく整備されたと思ったのに数回にわたる災害は高校の位置移転の問題を生み、また小規模高校の統廃合の風説に悩まされて、何となく不安定の思いでした。

今度の永久校舎の完成によってこれらすべての問題が一挙に解決致しました。私はこの機会に湧雲会の趣旨を述べて、皆様の御理解を得たいと思って申し上げました。立派な校舎が出来ました、この上は一層の教育の向上を念願致したいと思います。

記念誌によせて ―空になっていた弁当箱―

同窓会長　平野修治

母校、南会津高校が校舎改築並びに創立33周年を迎え、名実共に南会西部の最高学府にふさわしく成長したことは、私達同窓生としてもこのうえない喜びであり、誠に慶賀に堪えません。

このたびの校舎改築に際しましては、校長先生をはじめ学校当局はもとより、関係者の多面的な御努力、御援助に対し、同窓会としても深く感謝の意を表したいと思います。

幸か不幸か、私が小学校に入学したのが1945年で、終戦の年であった。そのため物資の不足は大変なものだったが、敗戦により日本の夜明けが始まり、今日までの日本の歴史の中で最も民主的な教育を受けることのできる時代であったと思っている。

私が母校、南会西部高校（当時）に学んだのは1954年から３年間であったが、今考えてみると、人生の中で最も楽しい時期であり、もう一度高校生活をしてみたい気持ちになる。

私のクラスは43人であった。当時は高校進学もそれほど多くなく、おかげで受験地獄もなく入学できた。しかし、伊南中から朝日中までの優秀な同級生ばかりで、小学校の時から常に迷わず「しんがり」を努めてきた私は大変苦労をした。高校での「しんがり」は中学校までのそれとは違い、理科や数学の苦手な私は及第点がとれず、夏休みで誰もいない学校で追試験を受けたもので、やっとこさっとこ卒業させてもらったのである。

高校時代はむしょうに腹がへるものであった。皆大きな弁当を持っていったが、とりわけ私は遠かったので２食弁当をもっていったが、それでも腹がへった。

ある時、３時間目の授業が体育か何かで教室をあけることがあった。我々悪党は２～３人授業をさぼり教室に残って、菊地利春君の弁当を平らげてしまった。何食わぬ顔をして４時間目の授業が終わり、楽しみにしていた弁当を開いて利春君は驚いた。「あれー　俺が弁当カラだー　誰か食ったべー」と大騒ぎ。もちろん犯人はわからずじまい。

こんなことだから、オカズのなくなることは日常茶飯事で、オカズぬき弁当を食う風景はよく見られた。オカズは今のように買ったものを持って行く人はなく、すべて自家製のもので、玉子焼、みそづけ、油みそ、油いり等々であったが、最高のオカズは玉子焼で、それを持って来る人はよくねらわれた。私の弁当は量はあったが質が悪かったので、あまりやられなくてすんだ。もっぱら人の弁当を黙っていただいた方である。米が余って生産調整をする80年代は想像もできない時代であった。

創立三十三周年に臨んで

生徒会長　五十嵐 公士

私の父はここの第１回の卒業生だから、私の父がちょうど私ぐらいの年令のときにこの学校は創立されたことになる。そして、今私達は立派に完成されたこの新しい校舎で机に向かって勉強している。

このように考えてみれば33年間という時の流れがどれほど大きなものかが想像される。そして今日、我が南会津高校は創立当時には想像もつかないほどの発展を遂げた。私が入学してから３年がたとうとしているが、その間においてもそれはすばらしい発展だった。

私が入学した当時はまだ第一期工事が終わったばかりであった。しかし今は全面完成し、最新の放送、音楽などの視聴覚設備を完備した県内でも有数の立派な校舎に生まれ変わった。そして今なお新しい体育館が建設中である。このような恵まれた環境の中で学習できることに対して、我々は本当に誇りとすべきであり、感謝すべきである。また、今我々はもう一度過去を見つめなおす時期に立っているのではないかと思う。交通あるいは通学の不便という点から始まったバイク通学を例にとるならば、ここ数年来事故の増加、スピードオーバーなどの交通違反者の増加などは、その昔、他のバイク通学を実施している高校の模範であった我が高校にとっては、本当に残念なことだと思う。

それと同時に、今我々は新しく生まれ変わった校舎と同じようにこれからの新しい歴史をつくり、未来に向けて今まで以上の発展を続けなければならないのも確かである。それには生徒間においても、また教師と生徒との間においても一致団結してこれから新たな目標に向かって前進することだと思う。そして広い心と長い目で未来を見つめていくことだと思う。

今、創立33周年という年にあたり、その歴史と33年間に築かれた伝統を守らなければならない責任の重さを感じ、また新たな歴史を築き上げていかなければならない使命を感じる。南会津高校が生まれて33年、人間にたとえるならば今が働き盛りの壮年期であり円熟期なのだ。

最後にこれまで南会津高校を暖かく見守ってきて下さった諸先輩方、また色々御協力下さった地域の皆様方に心から感謝申し上げてペンを置きます。

歴代学校長

初代　玉川春雄
（昭和23.7.31
〃 28.3.31）

2代　西間木正己
（昭和28.4.1
〃 31.3.31）

3代　後藤次郎
（昭和31.4.1
〃 33.3.31）

4代　近藤金弥
（昭和33.4.1
〃 36.3.31）

5代　目黒嘉祐
（昭和36.4.1
〃 38.3.31）

6代　角田祥治
（昭和38.4.1
〃 42.3.31）

7代　橋本秀夫
（昭和42.4.1
〃 44.3.31）

8代　橋本年雄
（昭和44.4.1
〃 47.3.31）

9代　船田元喜
（昭和47.4.1
〃 50.3.31）

10代　太田　宏
（昭和50.4.1
〃 52.3.31）

11代　佐川　昇
（昭和52.4.1
〃 55.3.31）

12代　星野俊一
（昭和55.4.1
～現在）

歴代湧雲会長

(昭53．後援会を湧雲会と改称)

初代　辺見文助

2代　斎藤良三

歴代同窓会長

初代　山内太郎
(昭和27.4～30.7
〃　32.8～37.7)
農業科第1回卒

2代　山内久男
(昭和30.8～32.7)
農業科第3回卒

3代　斎藤　脩
(昭和37.8～52.7)
普通科第1回卒

4代　平野修治
(昭和52.8～現在)
普通科第4回卒

歴代PTA会長

初代　渡部安彦
(昭和25年～27年)

2代　近藤正智
(昭和28年～34年
昭和37年～39年)

3代　星　博
(昭和35年～36年)

4代　山内正司
(昭和40年～44年)

5代　五十嵐友彰
(昭和45年～47年)

6代　渡部次郎
(昭和48年～現在)

歴代生徒会長

昭和23年度	初代	大桃　博	（伊南）
〃 24 〃	2代	大桃　博	（伊南）
〃 25 〃	3代	横山五郎	（朝日）
〃 26 〃	4代	赤塚育三	（伊南）
〃 27 〃	5代	酒井　淳	（本校）
〃 〃	〃	羽染健一	（伊南）
〃 〃	〃	山崎啓伍	（朝日）
〃 28 〃	6代	斎藤　修	（自治会長）
〃 〃	〃	酒井　淳	（本校・定）
〃 〃	〃	佐野　正	（伊南）
〃 〃	〃	馬場瑤史	（明和）
〃 〃	〃	横山勝夫	（朝日）
〃 29 〃	7代	五十嵐時雄	（本校・普）
〃 〃	〃	羽染文規	（本校・定）
〃 〃	〃	五十嵐源一郎	（只見）
〃 30 〃	8代	山内久子	（本村・普）
〃 〃	〃	羽染文規	（本校・定）
〃 〃	〃	吉津直人	（朝日）
〃 〃	〃	目黒彰一	（只見）
〃 31 〃	9代	馬場　俊	
〃 32 〃	10代	斎藤英二	
〃 33 〃	11代	三瓶恒雄	
昭和34年度	12代	平野哲哉	
〃 35 〃	13代	森　健樹	
〃 36 〃	14代	五十嵐清美	
〃 37 〃	15代	斎藤英三	
〃 38 〃	16代	斎藤芳通	
〃 39 〃	17代	馬場俊三	
〃 40 〃	18代	関　博之	
〃 41 〃	19代	菊地春一	
〃 42 〃	20代	渡部克行	
〃 43 〃	21代	五十嵐正樹	
〃 44 〃	22代	菅家　新	
〃 45 〃	23代	河原田友之	
〃 46 〃	24代	小椋秀人	
〃 47 〃	25代	羽染盛夫	
〃 48 〃	26代	馬場　達	
〃 49 〃	27代	小山正充	
〃 50 〃	28代	山崎郁生	
〃 51 〃	29代	馬場宗一	
〃 52 〃	30代	坂内史彦	
〃 53 〃	31代	河原田信弘	
〃 54 〃	32代	三瓶敦史	
〃 55 〃	33代	五十嵐公士	

歴代学校長からの思い出のたより

初代校長 ● 玉 川 春 雄

県立南会津高校開設の事情

昭和23年７月31日、県立南会西部高校が富田校舎を本校舎として開設された。それまでの経緯について述べてみたい。

終戦間もない昭和22年３月、新学制が公布施行された。所謂６．３．３制である。小学校尋常科６年、高等科２年の旧制度から、小学校６年、中学校３年の義務教育になり、さらに３年の高等学校が誕生することになった。当時中国北京より下郷町の実家に引き揚げておった私もこの新学制発足とともに、江川中学校に再就職し、新生日本の復興は教育からの意欲を燃やし、新制中学の教育に取り組むことになった。

新制高校については、教育の機会均等の理念から従来の旧制中学は全日制高校となり、地域的に高校教育の恩恵に浴さない地区に定時制高校を設立する方策が出され、県内各方部に高校が開設される運びとなった。会津方部では、南会西部、川口、山都、猪苗代がこのような事情の中で開設されたのである。

その準備の布石として私が昭和23年４月１日付で富田村立富田中学校長として発令され、７月開校をめどにその準備にとりかかった。当時の富田村長は星博氏であったが、同氏の積極的な誘致運動と開設に尽力された功績は忘れられない。

校舎は富田中学校の一室をあて、後に体操場との境に三教室増築して一応の教室構想ができあがった。と同時に舘岩、伊南、大宮、明和、朝日、只見の分校も逐次形を整備し、生徒募集、教員配置等幾多の困難な事情もあったが、待望の県立南会西部高校ができたのである。時に昭和23年７月31日である。

初代校長として富田中学校長より私が転補発令された。当初、課程は農、畜、家の三科であった。教員採用、教材教具の整備も不充分ですべて無からの出発であった。しかし関係町村長、議会、地域民、県当局の御指導、御協力によって何とかこれらの困難を克服して高校をスタートさせることができたことは今でも忘れることができない。第一回入学生以来、本分校ともこれらの悪条件にめげずに熱心に努力された生徒諸君の情熱には頭のさがる思いであった。

私は昭和28年３月までまる５年間の在職であったが、あれから33年、呱呱の声をあげた僻地の無名高校が小なりと雖も県立南会津高校として発展し、名実とも立派な教育実績をたかめ高校関係者の注目を集めるまでに至ったことは関係者の大きな努力の蓄積の結果ではあるが地域の各位からの暖い御援助、御指導を忘れてはなるまい。西部に蒔いた一粒の種が今や芽を出し花を咲かせ、西部の子弟の心情を潤し、地域開発の担い手となって生生発展している姿を見るとき、転た感無量のものがある。今までの関係者に深い敬意を捧げたい。

最後に、校医として、いろいろの面で御援助下された渡部次郎夫妻に特に御礼を申し上げ、本校の発展充実を願って筆を止どめたい。

二代校長 ● 西間木 正 巳

思　い　出

御校創立33周年と校舎改築落成に当り心からお祝いを申し上げます。

さて私は昭和28年４月から31年３月まで、第二代の校長として勤務させて戴きました。もはや四半世紀を過ぎましたが、当時を偲び筆を執りました。

当時、校名は南会西部高校でした。現在の南会津高校が本校であり、只見分校(現只見高校)、朝日分校、明和分校(後のつつじヶ丘分校)、伊南分校がありました。また館岩と桧枝岐に女子の季節分校もありました。本校が全日制普通科に移った外は定時制農業科、家庭科の学校として、西部一帯の高校教育を受持っていたのであります。

各校を廻ってその要望を要約すると、長い間苦労した子弟教育が地元で受けられる事の喜びと、それに対する熱烈な期待でありました。まず難点はありましたが、進学希望者は全部本校の普通科に入ることにしました。先生方の適切な指導と地道な努力が実って、年を追って国立大学を初め希望校への進学が良くなってきたことは何にもましてうれしい事でありました。

施設や設備には地元の負担を必要としましたが、その援助を受けて仕事をしました。特に、ピアノを入れた時には学校全体に活気が溢れたように感じました。又、校舎のつなぎ工事で図書室と家庭科室を設けたり、部落が簡易水道を引く際には生徒の奉仕協力で校内にも引き入れ、更には消火栓を設けた事なども思い出となっています。

高校間の体育や教科、クラブ等の大会には地域の事情もありまして参加でき兼ねておりましたが、投擲の伎倆をもつ女生徒を会津の高校大会に出場させ良い成績を収めたことが、広く他校生との交流を望む契機となりました。本校から他の地域に出にくいと同様、他校の先生や生徒達が来られる機会にも恵まれないわけですから、本校の存在を知ってもらう事は困難でありました。

県教育長栗村虎雄先生がおいでの節は、地元の関係者はこぞって陳情されたし、私は教員の充実と滑らかな転任についてお願いした事を覚えております。又学校評価の時には、他の多くの高校からベテランの先生が委員として、２日間学校管理、事務管理、教科指導、生徒会活動等すべてに亙って評価して戴きました。この事によって私達ばかりでなく評価委員の方達にも学校の実態を知って戴くほか、所謂僻地校勤務の先生の並々ならぬ御苦労の程も理解して戴けた事は、誠によい機会であったと思われます。

全校の運動会や野球試合等は、その都度明和分校に集ったものでした。しかしすべての行事は本校で開きたいという望みは強く、運動場の事では関係の方々と話合ったものでした。ＰＴＡの方が河川敷ではどうかと言ってくださいましたが、隣接地が将来ともに最善であると思い、地主や耕作者の理解を深める事が第一と、機会を持つことにしました。

又かつてスキー連盟の役員をされた英語講師の太田原芳治先生にスキーの基本から指導して戴くため、全校生のスキー教室を開いた事もありました。本校の先生方の多くは大学を出たての独身者でしたから、課外活動の指導を依頼し、活気溢れるものがありました。

しかし当地域には先生達の要望に応ずる文化的施設もなく、又一寸休憩してレコード鑑賞やコーヒーを賞味する店も本屋もない状態でした。このような中で何くれとなく先生達の力となってくださったのが校医の渡部次郎先生であり、本当に有難いことと感謝した次第でありました。

雪の駒止峠越えは得難い体験をしました。３年目の冬には、雪上車が始めて峠で試運転するのに出会いました。又只見地方は電源開発の真盛りであり、いろいろな話題と共に西部にも明るいきざしが感知されておりました。

在任３年間、分校所在地をできるだけ廻りながら、特に本校の充実のためと考えました。しかし微力のためにできなかった事を思い出し、恐縮している次第です。しかしこの間に地域の各界の方々やＰＴＡの方々、職員各位より賜わりました御厚情に対し深く感謝申し上げ、御校の御発展を祈念して擱筆いたします。

三代校長 ● 後藤 次郎

「うたかた」の記

私は三代目、南会西部高校は何処に在るのかも知らなかった。

桜花爛漫の浜通りから雪国南会に、その変化の甚だしいのにただ呆然。だがそこに生きる人々の濃やかな人情と、素朴で純真な少年達に接してホッとした。

新設校だからいろいろ期待することは無理と、その点には失望も落胆もしなかった。むしろ教育の原点がそこにあるようにも思われて、「やるぞ」と決意を新にしたくらいである。

在任２年、当時を顧みて果して何をしたのか、慚愧に堪えない今日である。もし何かがあったとすれば、それは地域の方々や先生方の協力と努力によるもので、私たちの語り得るものではない。ただ感謝あるのみである。

赴任早々、雪についてだいぶ嚇かされたが、住んでみてそれが初めて納得できた。山紫水明の土地と人は言い、只見、大川ラインの紅葉に感嘆する。しかし実際にそこに住んでみては、緑の山脈には「ノイローゼ」気味になったし、明日の雪を思い煩っては紅葉を愛でる心の余裕等はなかった。苛酷な自然と生活の厳しさは想像を絶した。あたかも戦場にある兵士が、疲労と困苦にさいなまれて、年の割に「老い」の翳りが見られるようなものである。

「過去はみな風になりけり」で、茫として記憶も薄れ、次第に風化して行くのは止むを得ない。だから想い出も断片的にならざるを得ない。

まず学校の「シンボル」の校門。設計は県の施設課、標札は会津工高、

工事は若松の工務店。

校歌は梁取三義氏の作詩、古関裕而氏の作曲。いい校歌だと思った。近藤会長の労を煩し、謝礼等は何もしなかったと思う。

寄宿舎「時習寮」の新築。その頃の寄宿舎と称したものは製材工場とかの廃屋で、とても人間の住める環境ではなかった。まして雪による倒潰の心配すらあったので、修理を要求して認められ、その実施のための実態調査を受けた。結果は「修理不可能」。そこで新築に決定。これは予定通りの筋書であった。だが困ったことは、費用の半額地元負担の原則があったことである。

地元負担が又一つある。グラウンドの拡張である。450坪を目標に交渉して来たのである。河原田県議長、芳賀村長、辺見村会議長、近藤会長各位の並々ならぬ骨折りで、二つとも成功したのである。

グラウンドの整地にはブルも使ったが、無数の石の始末は全村民が手弁当で奉仕されたことを今でも忘れない。

本校の学級増、地域の要望、志願者の増加等と作文とが功を奏し、すんなり実現できた。思えば古き良き時代でもあった。

本校と分校は常に一体であった。只見分校は独立を前提として、普通科、自動車整備科を設けようと思った。しかし全国のこの種の学校から資料を集めて検討したが、具体化までには至らず、「試案」に終ったのは心残りであった。

朝日、明和両分校の統合による「つつじヶ丘分校」の実現がある。今は定時制は夜間を除きほとんどなくなったが、全日制入学が90何パーセントになると止むを得ない趨勢と言うものの、それはそれなりに定時制の教育はあの時代の教育の責を果し、地域に貢献したことは否めないと信じている。

五代校長 ● 目 黒 嘉 祐

今では二十年の昔

南会津高校勤務の辞令を手にして、はて、知らぬ土地の学校での勤務か。事務長の渡部貞夫さんは幸い知人だし、福島師範での先輩同輩が二人ばかり小中学校に勤めておられるし、会中での教え子が二人ばかり居るし、行ってみれば心配したものでもあるまいと思いながらも、未曾有の伊南川の水害のあと、存続か移転かなど騒がれ、6億の金で堤防工事を進められて現状を保っている高校とか耳にしているので、行ってみぬ事にはやるべき仕事の計画もたてられぬ。

よし、行ってその土地の人々のお話も承り、学校の実態をみてからやろうと、有難い事に村役場がまわして下さったジープに乗って易々と駒止越え。雪の多いのなど問題でない。途中の山の樹木がどんな姿かが関心事。豊かな山であったら嬉しいがと思いながら峠を下る。

学校に着き、挨拶回りをしていた時、和泉田の小中学校が火災。モーニング姿で現場に行き、体操場に掛けてあった柱時計を運び出しはしたが、あとは近寄れず、危なげの和泉田の仮吊橋のたもとで火の手を眺めながら、困った事になったものだと思った事がまだ鮮かに記憶に浮かぶ。

校舎は他の高校のように20坪の教室でなく小さい。特別教室は名のみ。そんな教室に生徒の机がぎっしり並べてある。大勢の生徒がここで必死に勉学しているのかと思い、施設設備が他高校のようでなくとも、真剣に取組んでいる生徒をどう指導してグングン伸ばしてやるかが第一の仕事だ、情熱の触れあいで教育して行く、それが一番の動力だと思った。

始業式にせよ卒業式にせよ三回やらなくてはならぬ。南郷の本校、つ

つじケ丘分校と只見校舎の三つを別々に実施。黒谷分校は閉校にはなったがまだ管理下だし、この他に山口、館岩、桧枝岐に季節分校があり、各校舎と分校とに顔を出すだけでも忙しい。忙しいのを苦にしていては思う事が実現できない。脚を頼りに歩け歩けと自分に言いかけた。

南郷の本校を盛り立てようと地域の人々は一生懸命であった。村長の芳賀百一さん、助役の五十嵐惣助さんはお金を準備して下さる。それで水害以後色々の業者に迷惑をかけていたのもきれいさっぱりできたし、ささやかでも生徒の活動にも回せた。

ＰＴＡ会長の星博さんも元気な姿でよく学校に来て下さり、女房役満点の五十嵐友彰さんは細かい所まで気を配って下さった。

永年校医として尽力して下さった渡部次郎医師も自分の学校のように思われてか、体をこわしておられるのに胴巻姿でよく学校に見えられた。今では元気になられ、全般的に学校のために精出しておられると聞く。

体育祭など実施すると、ＰＴＡ以外の方々も御祝儀をもって観覧に来て下さる。こんな事は他高校にはそう例のない事だろうと思うにつけ、地域の方々が自分等で盛り立てなくてはならぬ高校だと思っておられる事がひしひしと感じられる。

教員組織は平均27才と何ヶ月だった。ということは殆んどが大学新卒か、新卒後１、２年の方々だけのわけ。その先生方に「今後１、２年で他高校に転任されるだろうが、その時これが南会高校の勤務者かと笑われる事のないよう現職教育に励むことが肝要だ。」と言うと、「その通りだ」とうなづかれ、情熱を燃やされたものだ。開校後13、４年過ぎていたのか、南郷の校舎はどっしりとしたものを持っていたから、生徒も旧朝日村の小川からも入学し、それこそ一生懸命努力していた。

当時の県教育長の大槻さんが私に「学校として何が一番ほしいか。」と言われたので、「南郷の本校では特別教室と体育館で、只見校舎では体育館と職員住宅に、生徒の冬期間の寄宿舎です。」とお願いしたら、ちゃんと予算に計上して下さった。南郷本校の体育館建築については失敗やら苦労があったが、それも昔の物語となった。

土地の人々から「今の校舎の建っている所は柳の木が茂っていた沼地のような所であったが、伊南川洪水のため校舎の周囲は河原の姿で、まだよく復旧しない。校舎の上の方にあった体育館も流されたままだ。」と聞いたものだ。校舎一階の腰板には濁水のにじんだ跡がはっきりと残っており、床下には川砂が溜って根元まで届きそうになっていた校舎も、すっかり新しい姿になったと聞いている。

校舎の周囲には樹木が太々とがっしり茂り、芝生や草花のある生徒憩いの場が広がっているようなたたずまいにできればよいだろうが、樹木こそは学校の年輪を示すようなものだからすぐにはできまい。当時の卒業生も子供が小学校何年かになって、ＰＴＡで活躍する不惑の歳になろうとしている。

学校の発展、生徒の活躍と御多幸を祈ること切である。

六代校長 ● 角 田 祥 治

十二年後も純情に泣く

5月の日曜日の朝、鹿水川に沿って上流の山に入った。途中で手拭を落したことに気付いたが、そのまま登った。山つつじだかさゆりだったかの密生地にはいり込んで恍惚となったり、昭和村まで行ってわらびの群生に出会ったりして夕暮時に帰った。

鹿水川が南会津街道に交わる 200メートルばかり手前、農道の右側に積み重ねてある薪の上から、真白な手拭が一本広げられて下っていた。私はびっくりした。「郡山女子高校」とはっきり染めぬかれているところから、今朝落した私のものに間違いないからである。このあたりは田植準備の季節で、この農道を通行した人は相当あったはずである。それを朝から夕方までこうして下っているとは、実に奇跡である。落した物がみつかったためしのない地方に住んでいた私にとっては、本当に奇跡だった。

このような善良淳朴な環境に育てられた生徒たちが純情なのは当然なはずだが、これも大きな驚きだった。週一回の朝会で面白くもない説教を30分も聞かされて、一人も声を出す者がない。たまに冗談を言ってみても吹き出す者がないばかりか、表情を緩めさえもしない。厳粛そのものなのである。卒業式の式場をいかにして騒乱場にされないかに苦心に苦心を重ねている多数高校のある時に、この子らは実に神様であり、南会はこの世の天国である。私も生徒の純粋さにおされて、冗談は言わないようになった。真面目な態度で真剣に取り組む努力をするようになった。

ところが私は今、これにも増した次の奇跡に泣いているのである。それは南会の純情が、生徒の純情が、南会に住んだことのある多数教師を純化し、教化したことである。私の在任時代の先生方の集まりに「祥門会」という会がある。毎年のように集っては南会の純情を偲び、飲んで歌って泣くのである。その会の度に、次郎先生と私が招待される。南会を去って12年、同じ顔、同じ心が集まるのである。

12年後の今は先生方と校医さんという関係ではない。先生方と校長という関係でもない。裸の人と人との結びつきである。水害の河原を一緒に駆けまわったというだけの、白一色の河原にポツネンとした木造校舎の中で一緒に薪ストーブにあたったというだけの人と人とが、今は北に南にちりぢりに散らばった各職場、各家庭のそれぞれの事情を克服して、沢山の時間と経費をかけて、何等の利害関係をも伴なわないこの会に集まって来るのである。

しかも純粋の南会ものは3名（文泰先生、周作先生、利徳君）だけで、大多数は南会にとってヨソモノである。ヨソモノが純情によって教化された偉大なる奇跡に相違ないのである。

私は年一回のこの会に招かれるのを最大の楽しみとして、そして南会の純情にもどる貴重な契機として待ち続けるのである。そしてそれによって純化された私の日常は、伊南川の石を庭一面に並べての晴耕雨碁(雨読ではない）である。南瓜を玄関前に山と積んでは役員会の帰りに持帰ってもらい(町内会長時代)、さつまいもを車（祥門会のメンバーの手ほどきで取った運転免許)に積んでは会員全員に配給してまわっている(老人クラブ会長として)。

七代校長 ● 橋本秀夫

南郷の空

南会津高等学校が年々充実発展してゆくことを聞くと、とても嬉しくなる。一生懸命頑張っている同校の先生方と同校のために協力しておられる地域の人々に深く敬意を表する。生徒諸君の活躍も眼に見える。

学校創立33周年を迎え、校舎改築も立派に完成したとのこと、本当にめでたいことである。今後益々隆昌の一途あることを心からお祈りしている。

私は昭和42年４月から満２年間、短い年月であったが躍進途上の同校に勤務させて頂いた。活力に満ちた若い職員と眼のきれいな生徒達と一緒に生活したこと、そして多くの人情豊かな南郷の人々の中で暮したことは、私の長い教職生活の内で最も楽しい時期であった。公私両面にわたって多くの人々にお世話になったこと、若い先生方とスポーツに汗を流したこと、思い出はつきない。

着任直後約10日間、私は界の渡部雅夫さん宅にお世話になって、同宿の若い２人の先生と一緒に通勤していた。夕食後は毎夜のように南会津郡の地理、伝説、産業等について有意義なお話をきいた。老人の方から、戦前のこの地の生活状況等も興味深く語って頂いた。４月中旬に学校近くの職員住宅に移った後も、同家からは四季を通じて親身の御厚意を頂いた。有難い思い出である。

学校諸設備お願いの件で、私は何度も村役場に出頭した。星村長さんはいつも好意をもって面接して下さった。用件が終れば御多用の中、南郷村政のこと、土地の文化、教育等について種々話してくれた。助役さん、教育長さんとも何度か懇談の機会を頂いた。

郡内西部の各小中学校長さん方も度々学校に訪ねて来て下された。公私の親交が懐しい思い出である。各方部別父兄会、富山、和泉田、明和方部の婦人会に招かれての教育座談会と、そのあとのなごやかな歌をまじえての茶話会など、心暖かな思い出である。

校医の渡部次郎さん、ＰＴＡ、同窓会、学校後援会の役員の方々とは、学校運営上の相談等で何度お会いしたことか数知れない。いつも和気あいあいの中、熱心な懇談を頂いた。ＰＴＡ会長山内正司さんに案内されて、館岩、桧枝岐の両村と尾瀬の一部を見学した。初めて見る尾瀬の大自然の印象は実に大きかった。校医渡部次郎さんは職員と生徒から「次郎医者」と親しまれ、非常に尊敬されていた。「次郎医者」は経済を度外視して生徒を世話して下さった。スポーツ行事で生徒の行くところ、次郎医者の姿は必ず見えた。私は同氏の愛車に同乗しては、何度も小旅行をした。

後援会副会長五十嵐友彰さんとはよく教育、宗教等について語った。静かに、謙虚に話す同氏の面影は超脱の人のようであった。同窓会の育成、発展について談合した斎藤脩さんは熱心、真面目な人柄の好青年だった。生徒会、剣道クラブは酒井良平さんのおかげで強くなった。我が本業の時間を割いても生徒の面倒を見て下さった。温容、親切の人であった。微醺のあとの静かな歌声が懐しい。

昭和42年９月、南会津高校創立20周年式典及び諸行事が好天のもと盛大に行われた。同年10月には校内駅伝競争が華々しく実施された。両方ともＰＴＡ、同窓会、婦人会、関係各町村当局から厚い援助を頂いた。当時の職員、生徒にとっては、長く忘れられぬ思い出であろう。

若い教員各位は皆個性があり、競うように勉強し活動した。今は方々で大活躍であろう。五十嵐文泰事務長は徹頭徹尾南会津高校を愛してい

た。誠心誠意の人であった。１日の仕事が終わると、よく語り合った。人生問題、世界の歴史談など、つきる所がなかった。

秋のある日、次郎医者がやって来た。３人の鼎談は、スポーツ談から旅行談。夕闇が来ても限りなかった。やがて一緒に玄関を出ると、星が見事であった。仰いで見ると、美しい南郷の空が無限に大きかった。

九代校長 ● 船 田 元 喜

南会津の思い出

昭和47年４月１日付で南会津高校長を拝命すると同時に、幼少の頃から聞いていた「イナ」、「イホ」、「オクライリ」、「ヒノエマタ」……の名を現実的に新鮮な気分で思い出し、再び会うことが出来ないと思っていた昔の知人の顔が、昨日会った人のように浮んできた。

赴任する直前に会津中学校時代の同級生で会高ＰＴＡ会長をしていた松本忠四郎氏宅で例の如く色々に話合っているうちに、あの南郷地区をはじめ伊南川流域は顔立の良い美男美女が非常に多いという一言があった。その時私は不思議に思いながら、彼にあの地域は昔から交通、地域性の関係で人の交流は少いし、結婚も法的には整っていても実質的にはグルグル回りで近親関係に近くなっており、植物で例えればトマトやジャガイモの連作のようになっているのではないかという意味のことを話した。

赴任して段々と日を経過するうちに、彼の言ったことが全く事実であったこと、その上に頭の素質の良い者が多いことが分った。感心したり不思議に思ったりして夏休みになった時、若松市内の友人である医師の二人に、それぞれ日を別にして私の感じたことを卒直に述べながら色々質問しあったが、納得する答は得られなかった。以来今まで、会津は勿論県内、東京方面においても、これはと思う人に説明し質問しているが、なるほどと思うような答は得られないでいる。

一方、学校としてのあらゆる施設条件が他と比較して非常に低いので、生徒が気の毒だという思いが連日連夜頭から離れなく、苦悩の連続だっ

た。他から色々に話も聞いていたが、人間として教師として節操を棄ててまで関係機関に依頼するようなことはでき得なかった。

当時も今も変わらないが、国全体が能率、スピード、デラックス、新製品、物、金が優先で、何か虚像のようなものに浮かされていた感があった。広告は勿論、新聞・雑誌まで自然開発優先を唱え、派手さを売りものにして大量消費をあおり、「勤倹貯蓄」、「節約」といった自制心、道徳的宗教的な規範は弱められ無視されて、経済成長、消費の増大のみが人類の進歩であるかのような錯覚に陥った感もあった。

県の生徒指導主事をしていた時、昭和38年10月悲嘆に暮れて宣言したことであったが、その通り先年の県当局の一部とは言え、あの汚職問題の陰には長年数えきれないほどの正直者が、知らず知らず犠牲を払ったものと思う。

若松との往復百余回、その間一方においてあの自然界から受けた感銘があった。太陽が西山に傾き始め、容を茜色に染めあげたような落日の輝き、或る時は華麗な夕陽がその光を弱め、樹々の中に低く射込んでいる美しさに心が打たれ、ふと、「人影も見えぬ静かな山の中、何処からか人の話し声が響いてくる。夕日が深林に射込んで更に青い苔の上を照らしている。」という意味を表現したと思われる、唐の王維の詩「空山不見人、但聞人語響、返景入深林、復照青苔上」を思い出した。又或る時は全山燃えるような紅葉の美に打たれながら、唐時代の大陸の風景のそれを歌った杜牧の詩「遠上寒山石経斜、白雲生處有人家、停車坐愛楓林晩、霜葉紅於二月花」を思い出すことができた。

更に徒然草、土佐日記、十六夜日記の作者の心境に思い至ることもあり、生徒時代に点数を意識しながら読んだ頃は何回読んでも文章の味わいというものを全く感じとることができなかったことを残念がったりして、今昔の想いに浸ったこともあった。

こうした気分は当時の世相への大きな反発心の一部であったかもしれない。戦前の日本の「よさ」を味わった我々には、日本はこれでよいのかと深く考えざるを得なかった。

しかし、あの自然から受けた感銘と純真な生徒の姿、地域社会の方々の立派なあつい温情によって、沈み勝ちになる気分を支えることができて、何とか無事に任を終えることができたことを幸だったと感謝しながら今の生甲斐とし、南会津高校が益々立派に発展するようにと祈っています。

十一代校長 ● 佐　川　　昇

校舎改築を終えて

校舎のこと　着任して二カ月後、新校舎の青写真を見せられました。積雪条件を考慮した、県下初のピロティ方式の校舎でした。県技術陣の頭脳を結集した立派なものでした。三年にわたる田島建設事務所の技師さんの指導に応えた建築の星組さん、設備の光和工業さん、電気の小松電機さんは一生懸命でした。またみんながいい人ばかりでした。それらの人に支えられ、新校舎は氾濫で苦しめられた痛恨の鹿水川敷地に建てられたのです。

「地元の協力で至難の国有地に建った。」という充実感は、今なお私の胸を熱くしています。安易に墜し、河川敷のままで二分された校地に建てていたらどうでしょう。冷汗三斗の思いです。これほどドラマティックな校舎は県下にないと思います。

同時に三年生が「星組頑張れ」の垂れ幕を吊し、作業員を感激させたことは本県学校建築史に残るエピソードだと思っています。

生徒諸君はこれらの人の心意気を体して、校舎を大切にしてほしい。校史三十年に負けない新しい校史を、この劇的な校舎に刻んでほしい。蛇足かもしれないが、星組さんが昭和52年度優秀工事として県の表彰を受けられたこと、そして上野建築課長さんが全国研究発表大会でその成果を問われたことを付言しておきます。

諸工事のこと　角田校長先生時代のポプラの樹形を変えたことには不安が残っていますが、新校舎にふさわしいキャンパスにしたいと考え環境緑化を思案中です。しかし篤治さんの厚意により校門を拡張できたこと、風雪に耐えた門柱を残して大学なみの通用路を完成したこと、南側の土留めを階段にし散水栓を四つ埋設したこと、超弩級の渡廊下にしてもらったこと、肇さんの善意によりバス停が生れたことには自信を持っています。第一グラウンドの改修が残りましたが、それだけに誕生した第２グラウンドの存在価値は大きい。活用を期待します。

時習寮のこと　除雪車が唸る昨今でも、通学不能者が約50名です。火鉢や練炭炬燵で暖をとり、吹雪の中で薪を割った寮生活は昔ばなしになりましたが、１階がスッポリ雪に埋れる木造の寮は寒い。天井と床が張替えられてアルミサッシに改装された時は、思わず歓声をあげました。星工務店さんから頂いた表札を掲げて喜びました。昨年は地下タンクと浴用ボイラーを作って頂きましたが、最高のクリスマス・プレゼントになりました。今年は火災報知設備を設置しました。

親元を離れて集団生活を送る寮生は大変ですが、運営に当る舎監も大変です。反面四カ月の責務を果した新米舎監が、見違えるほど逞しい先生に成長するから不思議です。時習寮は生徒に自治を育むだけでなく、気骨ある教師を作っているのです。

校歌碑のこと　歓迎会の時に聞いた校歌に惚れこみ、校歌碑の建立を思い立ちました。即座に星組さんから礎石の寄付があり、修治同窓会長さんの手腕が物を言って県の承認をもらう暇もない電光石火の早業でした。民報記者にスクープされ、県から大目玉を頂戴しました。嬉しい失敗として終生忘れないと思います。碑には作詩・作曲者の名を彫らず、揮毫された矢宗さんの名も彫られていません。「詩は友情が綴り、鼓動がメロディーを生む」それが校歌だと思っていたからです。三人の先生を無視したわけではありませんが、独断と浅慮を責められる時が来るかもしれません。

後援会のこと　文助会長さんが創設した当時の資金調達は父兄に限定

することなく、部落ごとに全くの篤志に基づいて進められていたそうです。本来の趣旨が薄れ、父兄に限られるようになったのは時代の趨勢でしょうか。草創期に戻したい気持から、良三会長さんと次郎先生の知恵を拝借して「湧雲会」として再出発しました。しかしその組織化に取組むことなく、南郷、伊南両村の厚意に甘えて2年になります。自家用車を出してくれている方々の協力にも甘え放しです。事を運ぶに性急であったこと、事を選ぶに易きについたことを反省しています。

勉学のこと　新指導要領に基づき、教育課程が改正されようとしています。しかし小規模の本校では、この政令も恵みの使者たり得ないのが現状です。

次郎先生は「毎年現役の国立大学合格者を出した」と、過去の能力別学級編成の功罪の功を説きます。到達度別講座を取入れることが無理な教員組織では、思い切って進学と公務員希望者を合した学級を編成して効果をあげる時期に来ていると思います。因みに国立大希望者は公務員に変わるケースが多く、この傾向は年々強まり、公務員内定者は20名に達して県下に万丈の気を吐いているのです。

部活動のこと　「体育部員は文句なく信頼できる。」これが私の持論です。多少の蹉跌があっても許せるのは何故でしょう。それは彼等が汗の中から実践に繋がる道徳性を学ぶからだと思います。そしてその道徳性が部員から部に止揚された時、チームの力は向上するものです。「道徳性が実践に繋がったチームは強い」これが私の結論です。

軟式野球部とハンドボール部は県制覇の歴史を持っていますが、女子剣道部は今年で三連覇し、それに奮起した男子も県制覇を成し遂げました。今年のような男女共優勝は、インターハイ史に残る偉業というべきでしょう。バレーボール部も会津制覇の余勢を駆って県制覇をめざしています。軟式野球部の球史を閉じることに寂しさはありましたが、押切りました。同窓会や野球部後援会の援助がなければできなかったことです。新しい球史作りに頑張っています。

バイクのこと　バイク通学生が遂に 200名に達しました。女子生徒のカラフルな着衣が明神岳に映え、男子生徒のエンジンの音が四囲の山並にこだましています。南会高の伝統であるとよく聞きますが、私はそうは思いません。風物詩以外の何物でもないと思っています。「スピードを出すな」、「遊びに乗るな」、「自動二輪免許をとるな」のスローガンが死語になる日が来たら、出動するパトカーの姿が登下校時消えたら、その時こそ私は風物詩でなくなったと思うでしょう。安全運転を守り、バイクを通学に利用するという特異性が伝統として定着するのには程遠いというのが正直な実感です。

雪のこと　立派な南郷スキー場がオープンし、地元のスキー熱の高まりを感じながら、本校生の意気がもう一つというのはどうしたことでしょう。指導者と若干の年月が必要ですが、「雪と聞いただけでうんざりだ」という意識をまず変えることだと思います。とはいうものの天候の急変で峠に立往生した時の不安、そして悪戦苦闘の末に山口に辿りついた時の歓喜は忘れられません。視界ゼロを実感として、また極度の緊張の連続を初めて体験しました。この時ほど私が燃え、ダイナミックになった時はありません。

荒れ狂う吹雪の外に静かに舞う根雪、渡って歩ける硬雪のあることも知りました。春の素晴らしさを教えてくれたのは南郷の豪雪です。身をも染める紅葉の迫力は、それが雪の化身だからだと思っています。一輪のさゆりが雪に朽ちたとき、一人の早乙女踊りが甦えるのです。雪は住む人をダイナミックにし、時にはロマンチックにし、時にはアカデミックにします。南会高生の青春譜に「スキーの讃歌」が仲間入りすることを願っています。

南会津高校33年のあゆみ

▲県立南会西部高等学校誕生の地
（富田村立富田中学校）

▼南会西部高校大宮分校（昭24）

▲第一回修学旅行（国会議事堂前、昭26）

▲演劇部風景（昭24）

▲測量実習（南会西部高校大宮分校、昭25）

昭和23年

7．31　県立南会西部高等学校開校(定時制)
富田村立富田中学校(現南郷村和泉田)に併置
伊南、舘岩、朝日、伊北の各村に分校を併置
富田村立富田中学校長玉川春雄学校長に補せられる。
第１回入学式（入学者数 405名）

11．1　大宮分校（定時制）設置認可

12．1　季節学級開設（片貝、明和、楢戸、只見）

昭和24年

3．8　大宮分校開校、大宮小学校に併置、入学式

昭和25年

3．31　舘岩分校廃止（在校生は地理的条件と家庭の都合で全員退学）

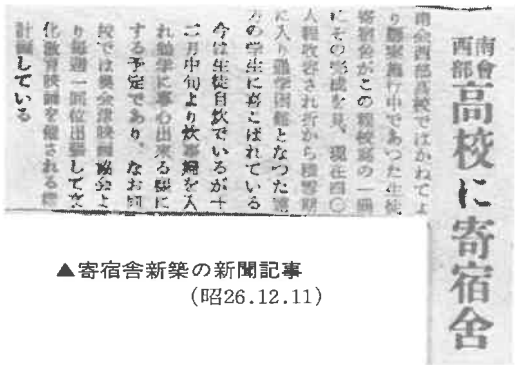
4．1　職員数32名、生徒数 247名(分校を含む)、入学者数 176名

12．1　本校校舎落成し県に寄附採納となり新校舎(現在の位置)に移転(戦前まで新潟県人、水倉庄六氏の木工所があり、その他は原野同然であった。)
定時制課程季節学級明和分室開設

昭和26年

3．31　大宮分校を本校に統合

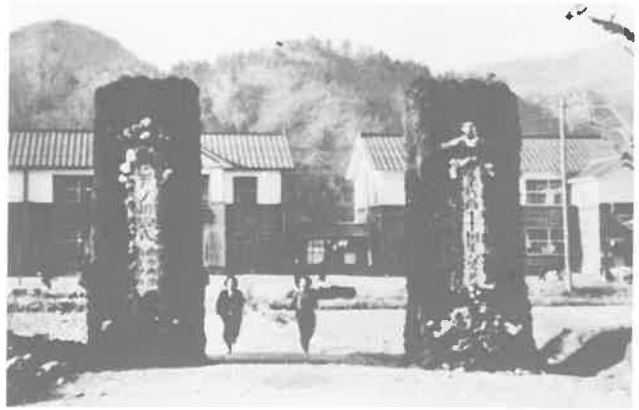
4．1　本校に全日制課程（普通科）設置、定員150名、入学者 普通科51名(本校)、農業科80名(分校を含む)、家庭科76名(分校)
明和分室を明和分校と改称



南会西部高校に寄宿舎

南会西部高校ではかねてより縣家施行中であつた生徒寄宿舎がこの新校舎の一棟にその形態を見、現在四〇人程改容され折から積雪期に入り通学困難となつた遠方の学生に寄こばれている今は生徒自炊でいるが十二月中旬より炊事婦を入れ勉学に専心出来る様にする予定であり、なお同校では奥会津映画協会より毎週一回位出張して文化教育映画を催される様計画している

▲寄宿舎新築の新聞記事
（昭26.12.11）



▲産業教育10回記念行事　ピアノ披露式（昭29）

▲鹿島神社の20年に一度の正遷宮
（昭29.9.5）

▲南会西部高校第一回卒業生（昭27）

南会西部高校
でピアノ購入
県立南会西部
高校ではPT
A（会長近藤正治氏）から二十
三万円の寄付を受けてピアノを購
入、四月上旬ひろう音楽会を開
く。

▲ピアノ購入の新聞記事
（昭29.3.29）

昭和27年

8．15　全日制課程設置に伴い、校舎増築工事認可着工

11．3　伊北村を只見村と改称したため、伊北分校を只見分校と改名

11．15　本校普通科（四室）増築工事完工

12．1　季節学級檜枝岐分室設置
片貝季節学級廃止

昭和28年

3．31　学校長玉川春雄退任（若松市立第２中学校長に補せられる。）

4．1　大沼高等学校より西間木正己学校長に補せられる。

7．15　明和分校短期農業科、家庭科開設、入学式

12．1　季節学級舘岩分室設置

昭和29年

4．10　本校、只見、朝日分校に短期家庭科開設

12．20　本校に水道工事完工

昭和30年

7．20　学校所在地の村名富田村を南郷村と改称

台風21号（昭33．9．18）▶

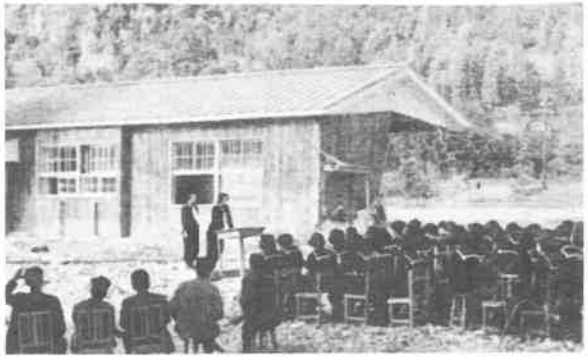
▲新しい寮の前で（昭32.12）

▲台風禍の中で発刊された同窓会会報第一号

南会西部高校グラウンド完成

▲グラウンド完成の新聞記事
（昭32.11．7）

▲嵐の後の静けさ（昭33）



◀河原となった校庭での選挙演説（昭33）

昭和31年

3．31　学校長西間木正已山都高等学校長に補せられる。

4．1　富岡高等学校より後藤次郎学校長に補せられる。

11．15　本校特別教室（二室）増築工事完工

12．1　季節学級大宮分室設置

12．　校歌制定、作詞梁取三義、作曲古関裕而

昭和32年

4．1　伊南分校募集停止
明和、朝日分校を統合してつつじヶ丘分校とし、定員40名、本校全日制普通科募集定員80名となる。

昭和33年

3．31　学校長後藤次郎湯野中学校長に補せられる。

4．1　県教委社会教育課より近藤金弥学校長に補せられる。
つつじヶ丘分校、朝日校舎募集停止

9．18　台風21号で校舎一部、体育館、寮流失

9．26　台風22号襲来、前回と同じく校庭は河川と化す。（9月30日まで水引かず校内の出入不可能。止むを得ず、臨時休校）

11．22　創立10周年記念式典

連続台風21・22号にゆれる敷地問題

南会西部高の再建敷地決る

昨年九月の台風二十二号で流失した南会津郡南郷村南会西部高の再建敷地が決まった。この敷地選定を巡って同村では旧大内村と旧高田村（校舎は高田地区にあった）両地区がそれぞれ提供を申入れ、南郷村が真二つに割れて対立したものだが、事態が変化した同村議長、佐藤教育長が仲入ってあっせんに乗出した結果十日"教育長一任"と決まった。そして県教委は十二日定例教育委員会ほかり、敷地はいままで南会西部高があった場所に近い同村字上田ト地内（旧高田村内）に決めたものである。

新聞記事（昭34.1.12）

県教委に一任か

南会西部高の再建 村当局、県側と話合い

新聞記事（昭34.1.10）

二部落が敷地提供

南会西部高の再建 対立し着工不可能

新聞記事（昭34.1.9）

はげしい誘致合戦展開

もつれる南会西部高校移転問題

県ではさきの二十一、二十二号の連続台風で校舎の大部分を損失した南会西部高校の移転をめぐって激しい誘致合戦が繰広げられている。問題地域は和田地内三ヵ所、幕山地内一ヵ所、山口地内二ヵ所、大橋地内一ヵ所だが、各方面とも代表を出張させて説明を話合いを進めている。しかし敷地は一ヵ所で移転先を決定しなければ着工が来年に持ち越されるところから地元の話合いが強く強調されている。

新聞記事（昭33.12.22）

▼大洪水におそわれた母校

南会西部高校が孤立

伊勢湾台風

校庭は伊南川本流に

◀伊勢湾台風で学校が孤立の新聞記事（昭34・10・6）

台風七号の被害（昭34）▼

盛大に記念体育祭

南会西部高校

災害復旧工事が完成

南会西部高等学校（校長近藤金弥氏）の災害復旧工事がこのほど完成、十六日関係者二十人が集まり完工式を行なった。三十三、四年に相ついだ台風で大きな被害をうけ、当時は移転か現地復旧かで話題を呼んだが結局伊南川の河川対策を強化し現在地（南郷村）に復旧することに決まり、二月以来工事は急ピッチで進められた。そしてこのほど近代的な体育館、教員住宅、寄宿舎も完成した。

◀母校の災害復旧工事完成の新聞記事（昭35・10・20）

相次ぐ台風、洪水に襲われ

再起不能の南会西部高

校庭埋める漂流物

床はめくれ、壁はボロボロ

復旧費、たったの七万円

◀台風で大打撃を受けた母校の新聞記事（昭34.10.11）

▲全校体育祭（昭35）

▲昭和36年度卒業式

昭和34年

3．31　伊南分校廃校

4．1　本校短期産業科、只見分校定時制普通科募集停止

只見分校、全日制普通科40名募集

8．15　台風７号で校舎床上浸水

9．30　職員室を２階に移転、始めて３年生普通授業、１～２年生自宅学習

10．12　１年生を明和校舎に移転　（出張授業）

12．6　校舎の修理改造工事入札

昭和35年

1．30　１年生明和より本校に移転

4．1　南会津高等学校と改称せられ、南郷校舎と只見校舎となる。

只見校舎全日制普通科50名募集

昭和36年

3．31　学校長近藤金弥塙高等学校長に補せられる。

4．1　猪苗代高校より目黒嘉祐学校長に補せられる。

つつじヶ丘分校明和校舎農業科募集停止

つつじヶ丘分校朝日校舎を廃して、在学４年生を明和校舎に転入す。

高校 大量増募はむずかしい

"校舎制"独立が焦点

南郷、野沢など確定的

◀南郷・只見両校舎独立の新聞記事（昭39・1・3）

◀野球部、東北大会出場なる！（昭40）

表彰状

南会津高等学校

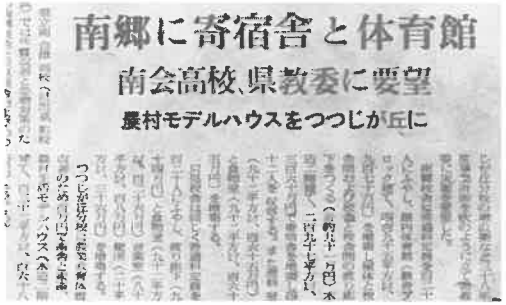
右者第十回全国高等学校軟式優勝野球大会東北地区予選大会に於て頭書の成績を得ました仍て茲に之を表彰致します

昭和四十年八月五日

全国高等学校野球連盟

会長中沢巳

◀東北大会準優勝の表彰状（昭40）



南郷に寄宿舎と体育館

南会高校、県教委に要望

農村モデルハウスをつつじが丘に

◀新聞記事（昭38・1・30）

▲台風26号（昭41）

昭和37年

4．1　つつじヶ丘分校農業科20名募集認可
南郷校舎定員80名となる。

昭和38年

4．1　南郷、只見両校舎共募集定員 120名となる。
学校長目黒嘉祐須賀川女子高等学校長に補せられる。
安積高等学校より角田祥治学校長に補せられる。

7．5　生徒急増対策により、平家建２教室増築

12．18　体育館増築決定
旧校舎と体育館との渡り廊下工事完了（5.87坪）

昭和39年

4．1　只見校舎独立、只見高等学校と改名さる。
つつじヶ丘分校は只見高等学校に所属

9．5　体育館増築完成（147.27坪）

10．1　南郷村より学校敷地として 3,828坪寄附受納

11．8　復興記念祭挙行（水害後の復興と体育館の落成）

11．30　寄宿舎、食堂増築（18坪）

12．1　季節課程檜枝岐分室廃止

12．10　校舎理科室増築(32坪)、寄宿舎増築(二階建)

昭和40年

12．11　調理室新築(28.9坪)

昭和41年

3．20　寄宿舎炊事室増築(19.83㎡)

9．25　台風26号で校舎、体育館、寮浸水

▲ハンドボール部、東北大会出場なる！（昭42）

◀創立20周年式典の日（昭43）

▲柔剣道場完成（昭44）

▲創立20周年の学校長式辞（昭43）

◀記念行事のひとこま（昭43）
—英語劇「シンデレラ」—

▶創立20周年記念誌発行（昭43）

昭和42年

3．25　校庭復旧
3．31　学校長角田祥治停年退職さる。
4．1　安積高等学校より橋本秀夫南会津高等学校長に補せられる。
10．25　屋外運動場へ通ずるため鹿水川へ架橋（南会橋と命名）
11．6　音楽室増築（99.17㎡）
12．1　舘岩、大宮両季節課程の新入生募集停止

昭和43年

3．30　寄宿舎浴室増築（19.83㎡）
9．14　正面玄関二階外側へ校章を備付ける。
9．21　創立20周年記念式典挙行

昭和44年

3．31　季節学級全分室廃止
学校長橋本秀夫飯坂高等学校長に補せられる。
4．1　本宮高等学校より橋本年雄南会津高等学校長に補せられる。
5．15　校長公舎敷地南郷村より寄附受納(287㎡)
8．12　集中豪雨により校舎、寄宿舎、職員住宅床上浸水し、校庭砂泥流入
11．28　柔剣道場新築工事完工
12．11　校長公舎新築（77.53㎡）

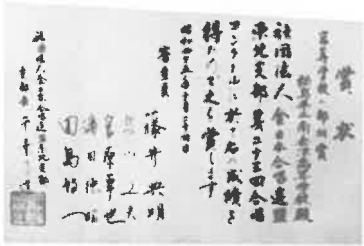
生徒ノンビリ企業ヤキモキ

求人なんと33倍

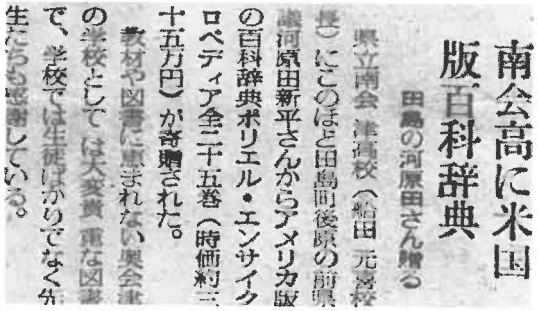
毎日10数社が殺到

◀求人申込殺到の新聞記事（昭45・9・19）

◀▼合唱コンクール、音楽部晴れの舞台と賞状（昭46）



◀県教職員住宅新築（昭46）



南会高に米国版百科辞典

田島の河原田さん贈る

県立南会津高校（船田元喜校長）にこのほど田島町後原の前県議河原田新平さんからアメリカ版の百科辞典ポリエル・エンサイクロペディア全二十五巻（時価約三十五万円）が寄贈された。

教材や図書に恵まれない奥会津の学校としては大変貴重な図書で、学校では生徒ばかりでなく先生たちも感謝している。

▲河原田新平氏よりアメリカ版百科辞典寄贈される（昭47.10.31）

◀同窓会名簿刊行（昭48）

昭和45年

3．28　柔剣道場への渡廊下増築（41.44m²）

3．30　燃料倉庫新築（49.52m²）

昭和46年

3．22　非常ベル設置（校内13ヶ所）

9．13　焼却炉取付

12．15　県教職員住宅１棟新築
　　２DK（４戸）、３DK（４戸）

昭和47年

4．1　学校長橋本年雄本宮高等学校長に補せられる。
　　会津高等学校より船田元喜南会津高等学校長に補せられる。

10．17　自転車置場新築（70台収容）

11．9　南会橋撤去

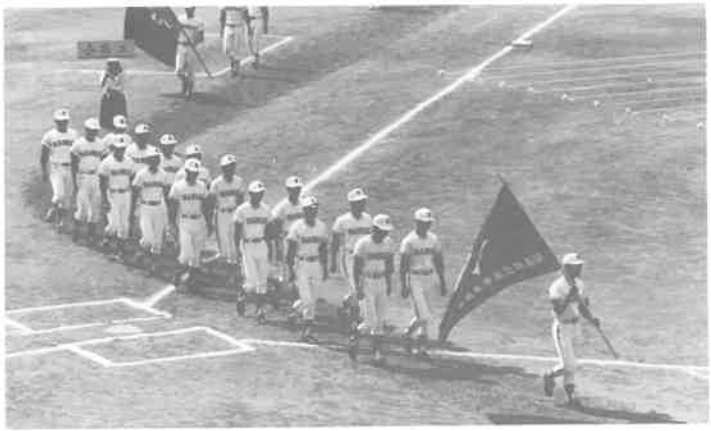
昭和49年

3．30　寄宿舎燃料倉庫新築
　　テニスコート新設（一面）

昭和50年

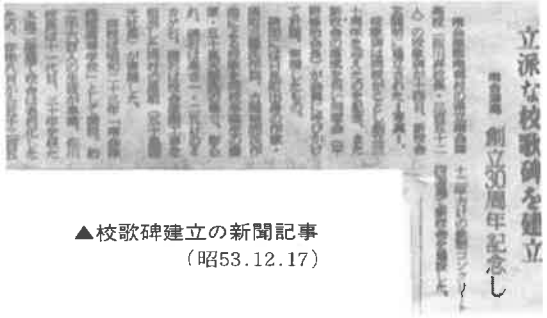
4．1　学校長船田元喜船引高等学校長に補せられる。
　　会津女子高等学校より太田宏南会津高等学校長に補せられる。

あいづっ子
南会津高野球部



◀▲夏の甲子園大会県大会会津地区予戦に初出場の記事と行進（昭53）

▼新校舎完成を待つ喜びの第６回南高祭（昭53）


立派な校歌碑を建立
創立30周年記念し

▲校歌碑建立の新聞記事
（昭53.12.17）

▲校歌碑（昭53）

昭和52年

4．1　太田宏校長病気のため休職となる。
　　田村高等学校より佐川昇南会津高等学校長に補せられる。
7．8　校舎改築第１期工事着工　工費203,939千円
　　（RC造四階建塔屋付外壁コンクリート）
12．24　体育館天井張替工事着工（672m²）
　　寄宿舎補修工事着工

昭和53年

1．28　体育館天井張替工事完成
　　寄宿舎補修工事完成
2．6　校舎改築第１期工事完成
2．9　新校舎へ全校生移転
2．18　旧校舎解体工事着工
3．3　旧校舎解体工事完了
4．1　湧雲会発足（後援会の名称を改称）
4．23　校舎改築第２期工事着工
4．28　校門拡張（62.81m²）
8．3　ハンドボールコート新設
11．27　寄宿舎、食堂天井張替工事
12．13　校舎改築第２期工事完成
12．14　校歌碑建立（同窓会より寄贈）
12．15　寄宿舎ボイラー室新築工事（4.95m²）
　　校舎改築第２期工事校舎周辺整備工事

◀同窓会員名簿刊行（昭54）

◀▲剣道部男女共第26回全国高等学校剣道大会出場
（昭54．8．2．3．4．滋賀県今津にて）

▼バレーボール部インターハイ県大会
ベスト8進出（昭54）

◀生徒会の機関紙「飛雲」

◀内容豊富な学校新聞

昭和54年

2．19　寄宿舎電灯線張替工事
2．27　旧校舎（調理室、音楽室、理科室等）とりこわし工事
4．1　募集定員135名となる。
5．4　校舎改築第3期工事着工
12．14　自転車置場移転工事
　　校舎改築第3期工事完成

昭和55年

1．29　部室用途廃止（139.62㎡）
2．24　部室解体工事
3．21　寄宿舎火災報知設備設置工事
3．25　通用路舗装工事
4．1　学校長佐川昇棚倉高等学校長に補せられる。
　　会津女子高等学校より星野俊一学校長に補せられる。
6．23　新体育館新築工事着工（910.0㎡）
10．16　校舎改築落成・創立33周年記念式典挙行

校歌の生いたち

南郷村農業協同組合長　斎藤　賢

南会高校は幾多の変遷を経てようやく定着し、近代的な学窓へ力強く歩んでいる事を多とする１人である。初代校長の玉川春雄氏と私は縁浅からぬ間柄でもあった。昭和17年、私は福島師範（現福大学芸学部）１年東組へ入学し、その時の組主任が玉川春雄氏であった。剣道５段練士の若き体育主任は、私達のあこがれの的であった。南会津出身という事で、若き情熱をぶっつけ合うには好都合だった様である。残念だったことは、私が２年になった昭和18年、玉川春雄氏は旅順師範（現中国）へ転勤の運命となり、私とのつながりはプツンと切れた。

そして昭和20年８月、日本は第２次世界大戦の敗戦国であり、みじめだった。私は師範の最終年度の学生で、大いに悩んでいた。百姓の後継者として私一人が残されており、父母の泣きおとし戦術に抗しきれず、私は師範を去って南郷へもどった。アメリカの占領政策は、一面教育政策でもあった。混迷の日本の復興は、若い人達の教育から（当時民主主義なんて知らなかった）の再出発は正しかったかも知れない。

そして、この南会津西部地方にも高校設置が論議され、各村がしのぎをけずって誘致合戦をくり広げ、村単位の分校設置という副産物づきで、南会津西部高校開校となったのである。それでも若松まで出ないと高校へ入学できない時代から開放されるわけだから、子を持つ親達にとっては計り知れない喜びの時代だった。

当時旅順師範で抑留され、後復員（帰国）された玉川春雄氏は浪人生活だった。全国的な高校の乱立期(？)によって教師は不足していたし、玉川春雄氏の初代校長としての働きかけはスムーズに進んだ。当時の実情からして、本人は不満足だったと思うけれども、よく頑張ってくれたと思う。玉川春雄氏の親は、玉川国太郎といい、片貝小学校長（現金門製作所）を永くおやりになり、私の父とも親交があった事もあり、義理人情にもろい玉川春雄氏をして、よけい初代校長として踏み切ってくれたのかもしれない。

こんな事を書いていると目的の文章が書けなくなるのでやめよう。ある日、南郷村役場企画観光課長で敏腕をふるっている五十嵐広君が私のところへ来て、「校歌の生い立ち」について一筆書いてくれとの依頼を受けたのである。

たぶんＰＴＡ会長は、今は亡き近藤正智氏だった。玉川校長と私との３人の酒席で、私は酒に酔った勢いで毒づいたのが「くされ縁」だったと思う。「あんたの高校には校歌がない。校歌とはその学校の魂である。入魂のない南会西部高校は、形骸化したセミのヌケガラに等しいものだ。」と……。「君の言う通りだよ。開設して歴史も浅く、校歌まで手のまわらないのが実態なんだ。高校には校歌を作る予算もないし、ＰＴＡにも金がない。心意のままにならずで残念なんだ。」校長とＰＴＡ会長が２人してホロリと本音をはかれたときは、私は悪い事を言ってしまったと思ったものである。

ある日、私は私用で上京した。当時、ある程度は作詞家とし

て、又文筆家として有名になりつつあった梁取三義氏(只見町布沢出身)に、さりげなく校歌の実情を話してみたら、案外たやすく引き受けてくれたのである。しかも作曲は友達の古関裕而氏とまで約束してくれた。私は東京から帰って玉川校長と近藤ＰＴＡ会長に一応の報告はしたが、確約はできないと言っておいた。作詞・作曲料の相談は契約もしないし私の権利でもないが、ある程度頭痛の種でもあったから。

そして、忘れかけて１年余の歳月が流れたある日、梁取三義氏から「上京して来い。」の連絡が届いた。早速上京すると、梁取三義氏の神田の事務所に、古関裕而氏と歌手の松原操さんが来ておられ、私は初めて二人の紹介に浴した。そこで私は南会西部高校の校歌を受け取ったのである。松原操さんがきれいな声で何回も何回もうたいつづけてくれた。作詞家と作曲家は目と目でうなづき合った。これでＯＫのサインでもあった。それだけは私の脳裏に焼きつけられている気がする。

最後に作詞・作曲料についてちょっとふれておきたい。当時、全校生徒が山菜取りをしてその代金全部と、若干のＰＴＡの寄付金をかき集めて、後から謝礼として届けた記憶があるが、その額は残念ながら定かでない。もちろん私が何回か上京しているが、費用はもらっていない。そんな費用は作りたくても作れなかった時代だし、自分の善意で思ってやった事だから「心の中に喜び」が残ればそれでいいと思うのである。

梁取三義氏、古関裕而氏共に健在で東京で活躍されているが、本当にありがとう。極安でできあがった校歌ではあるが、今ではもう伝統ある校歌として入魂しているのですから。私は毎年卒業して学窓を去る諸君と、毎年入学して南会高校の一員となる諸君とが、常に高らかに校歌をうたいづづけ、永遠に忘れ去られない校歌であってほしいと思う。それが作詞、作曲をしてくれた両氏への無言の返礼でもあろうと思う。そして私は、南会津高校から巣立って一人一人が激動する日本のよき社会人としての一員たる事を願うや切なりである。

二十周年記念誌
職員一覧表から

校医　渡部　次郎

こんどの記念誌には歴代校長先生始め旧職員、同窓生多数より沢山の御投稿があり、小生は書かなくても良いと思っていたのですが、「次郎医者のは面白いから二十周年の続きを書け」という命令です。面白いのは玉川校長時代の古い話。二十周年誌をひもといて当時の職員構成より思い出すままに、とりとめのないことを書いて責めを果たさせていただきます。尚、敬称は略させていただきます。

学校長、橋本秀夫、夫人はヤイ。仲々の美人であった。前任者角田校長は緑化校長夫妻。共々早起きで畠を耕し花をつくり、旧職員住宅、学校のまわりは百花繚乱であったが、ヤイ夫人は病身、半年にてこの草地に戻った。秀夫校長は口が悪く若い教員を呼びづけにしてズケズケと言っていたが、右にも左にも評判が良く人徳のある人でした。

教頭、金川孝、大人風でカンラカラカラと高笑いするのが印象的。前任者、菊地教頭は背広、ネクタイ等キチンとして机の上にはチリ一つない、という人物でしたが、この人は全く対称的な人物でありました。

山内博允、九年もいた校宝的人物。自然科学クラブを指導し、この人がいる間片貝の空は模型ヒコーキのエンジンの音でやかましかった。この前の教務の佐川六郎、この人も良く出来た人で温厚誠実将来のある人です。

鈴木康弘(通称康さん)、バレー部の監督、激しいトレーニングでよく女生徒がぶったおれて当院に運ばれたが、会津三部のCクラスよりAクラスに引き上げ、県体にも出場した。次に高橋(現、鳥居雅夫)、松枝、渡辺賢典と続くわけですが、どういうわけか監督交代時にCクラスに転落、十何連勝かしてAクラス復帰と繰り返し、現在の箱崎となり、はじめて会津一位となり、県体、東北大会、福島テレビ杯大会等で活躍し、南会高の名声を高めております。

三瓶昌久、25才で上から3番目とは驚き。ハンドボール監督、今野雅益から始まって加藤岳郎と県体での優勝をねらっていましたが、惜しいところで2位。43年秋の新人戦で初優勝、感激の涙を共に流したのが忘れられない。翌44年、薄貴が監督となり、県大会で優勝し全国大会に出場した。その後菅野正行、草野芳明となり優勝はありませんが今年も3位というのは立派なものであります。

山口竹郎、英語の先生、自動車とオーディオの気狂いであった。学校にあった中古の自動車を毎日ピカピカに光らせて運転も担当した。1キロにつきいくらと値段があり、3人乗れば3人分徴収したところがタクシーと違うところです。

金沢厚四、ポーカーの名人で「どこを見てるのかわかんねなぁ」と言ったら、「私のは義眼です」と言ってポロッとはずされた時には驚いた。二十周年記念誌の編集を担当し、夏休みを返上してやっておりました。只見校より出張の先生と恋愛結婚しております。

後藤言行、理科の先生、夫人も北大の理学部を出て非常勤で教えたこともあります。この頃先生が良かったのか生徒が良かったのか、スポーツばかりでなく大学進学の成績も良くハナ高々であった。彼は本校に7年勤務し剣道部顧問、本人も無段から四段までなり会津で初優勝もしている。

長谷川久仁子、美人の国語の先生。もう一人、鼻のちょっと上を向いた同姓の長谷川洋子がいたが、この人の方が人気があり秀夫校長が不思

議がっておりました。

栗城信雄、国語の教師で野球部長。監督は非常勤の大竹良幸。山口清水薬局の若主人であります。前年度は布川澄夫監督のもと、県も東北大会も準優勝でした。この布川は変った人で、湯の花温泉に行った時、風呂場と炊事場を間違い、飯釜に入ってきた人です。44年の県大会では橋本年雄校長になっておりましたが、野球も抜群に強く、双葉、保原等の強豪を大差で倒し初優勝しました。年雄校長と共に信夫ヶ丘まで応援に行きましたが、ハンドボールも優勝したので大きく新聞に報道されました。

小熊千代一、英語の先生で、現在は会津高。渡部仁男、数学の先生で、現在は磐城女子高。南会高の新任教員は成績優秀な人が多かったので現在は福高、福女をはじめ、県下の主要校で活躍している人が多いことはうれしいことです。

県の教育庁にも、佐々木慶司、佐川六郎、菅野栄子の諸先生がおり御世話になっております。県外に出た人でも、鈴木孝二が埼玉県与野市で、野尻武男が静岡県掛川市で教頭をしております。南会高出身の教員も多く県内外で活躍中です。

菊地昌美、社会の先生。第一回の南郷村剣道大会で優勝した。多喜子夫人は大宮中教員で山口から通勤していた。46年に赴任した斎藤真策も同じケースで、彼の進学指導で福島大だけでも６名の合格者を出したことがありました。

富田良夫、社会。この43年から53年まで11年間当校勤務。理由は五十嵐事務長の仲人で、南会高卒で和泉田生まれの美人を夫人にしたからであります。南会高卒美人を夫人に迎えたのは、古くは、会高の須佐、新しくは喜商の星名正の両名であります。

富田先生は永らく生徒指導を担当して生徒から親しまれたが、困った顔をしたのを見たことがある。現鈴木総理の故郷、岩手県山田高校が２度にわたって当校を訪れた。目的は「へき地校でいかにすれば大学進学が良くなるか」という事で、福島県教育庁より南会高が指定されたとのことでした。山田高校では彼の説明に納得し、その後成績が上がった由。

山口啓輔、商業。山口姓が二人いたので前者が山竹（ヤマチク）、後者が山啓（ヤマケイ）と称されていた。卓球部の顧問で前任者の田中武彦から引き継いだが、なかなか成績が上がらなかった。このあと来られた山口利助教頭の甥でもあります。尚、卓球部は近ごろ団体戦でも入賞するようになりました。

斎藤和夫、音楽。この人がオーソレミオを唱うと天井が反響して家全体がふるえた。あとにも先にも見たことがない。会津大会、県大会で銅賞に輝き東北大会にも出場したので、「音楽クラブは金がかかる」と言って父兄はこぼしました。先年郡商オーケストラ60名を引率、当校を訪れました。後任、佐々木芳雄も双葉高に転任し「大須賀」となったが、やはりオーケストラで成績を上げています。

浅野嘉尚、数学。柔道愛好会の顧問で直接柔道も教えていた。なかなかの快男児であったが土地柄の故かあまり強い者が育たず勝った話を聞いたことがない。後に柔道の達人であった船田元喜、そして現、星野俊一校長を迎えるわけです。

非常勤講師、大竹良幸。前述したが彼の弟で本校出身の大竹広直が只見高の教員となり、やはり野球監督だったので兄弟の対決も見られました。一昨年佐川校長時代に軟式より硬式に変わりました。甲子園経験者佐藤譲敬監督の好指導でかなりの力はつけたのですが、昨年は布川澄夫の白河高に、今年は佐川校長転任先の棚倉高に惜敗いたしました。いずれ甲子園出場の折は多分の御寄付を、といいたいところですが、私の生きているうちに行ってもらいたいものです。

今年の甲子園で双葉高が活躍しましたが、双葉高ベンチがテレビで放映されたとき鼻クソをとっていたのが、当校の理科教員をやった松本貞夫であります。会津高に行った渡部佐吉も部長でがんばっています。

非常勤講師、酒井良平。甚だ残念なことに3年前心筋硬塞で急逝されました。昭和40年代は剣道部は男子ばかりで、会津大会に、県大会にと、彼のライトバンに人間も防具も一諸になって乗っていきました。平競輪場にて県大会の開会式が行われたことがありますが、南会高からは剣道部4名だけで校旗もなく入場行進するのを見て涙を流したことがあります。試合の方も勝負のカケ引きとかずるさがなく、なかなか勝ちあがれませんでした。

昭和47年になり男子がようやく会津地区優勝し、51年秋の新人戦で女子が県大会初優勝しました。早速優勝祝に南郷、伊南両村の厚意で女子用の赤胴白袴を購入しました。これは県大会でも見ばえのするなかなか立派なものでした。酒井良平が亡くなられた時女子用の防具が自宅にありました。女子団体戦が3名から5名に増えるので買っておいた、とのことで御寄贈されたと聞いております。

太田校長、佐川校長、藤田教頭、玉川教頭など剣道有段者が管理職の時代、佐藤善久5段が監督となって剣道部は花咲かりとなりました。団体、個人とも入賞、優勝が続きましたが、何といっても花は54年の浪江高で行われたインターハイ県大会で、男女団体と女子個人が優勝し応援に行った本名副会長と万才致しました。女子は3年連続の全国大会出場で金がかかり、その度に南郷、伊南村から只見町まで毎年お世話になっております。

今年に入り佐藤善久御栄転となり剣道部は国語教師馬場博文3段が監督となり、高知で行われた全国大会に出場。体育の後任、五十嵐直はソフトボールの顧問となったが、彼はレスリング62kg級日本第3位の実績をもっています。

事務長、五十嵐文泰、あとさき24年も本校につとめられた。長い原稿をいただいたので私からは省略。永いこと御苦労さんでした。

主事補、渡部利助、筋肉のかたまり、スポーツ万能、特に柔道が強く体操もうまかった。後任の北郷正憲は酒強く、いわきに転任しムッとなる。次の薄久男（通称久ちゃん）は会津農林が合唱コンクールで日本一になったときのメンバーで歌がうまく5年在任。独身会長となる。次の佐藤弘一は頭が良く、囲碁、麻雀に将来性あり。当地から嫁をもらうという話もあります。

事務員、目黒計江、下山生まれのしとやかな美人であったが、田島に嫁に行く。その昔同じような名前で目黒文江という事務員がいたが、お盆で帰省した時同級生であった伊南の村長、教育長さんを呼び出したら喜んで「とうりゃんせ」まではせ参じたそうです。同級生バンザイ。

用務員、菅家利徳、昔「トシ坊」つづいて「菅家さん」今「社長」と呼ばれている。若い先生の面倒を良くみていたので結婚式にはたいてい招待されている。歌は片貝の音痴で最底であったのだが、福島に転任した渡部賢典か菅野正行の引っ越し荷物をトラックで運んだとき、元、南会高、今、福島高教員の高橋薫の案内の安いキャバレーで、うまいはずの小生や、南会高一うまい増子博英の歌がバンドに合わず白けたとき、彼のうたう「北国の春」が生バンドにのって、バーのホステスからお客まで盛大な拍手があったときは全くの驚きでありました。

これで終わりです。あの先生も書きたい。この先生も書きたいと思い出す先生がまだまだおられます。南会高女先生伝も書きたい。五十年誌に書きたい。21世紀になるが生きていられますかどうか。

二十年誌に書いた折にも大分電話がありましたが、名誉を傷つけられたと思われる方、お電話下さい。あやまります。

思　い　出

前事務長　五十嵐　文泰

創立三十三周年記念に際して思い出を、ということでペンを執りましたが、県職員としての在職期間中その大半を南会津高校で過ごした私には思い出もまた色々とあります。限られた紙面ですので、そのうち特に心に残るものを書いてみたいと思います。

私が南会西部高等学校の事務職員として採用されたのは昭和26年５月１日で、新学制により学校が創立されてから３年を迎えようとしているときであった。当時の学校は本校の外に、伊南、明和、朝日、伊北、の４分校をかかえ、生徒数は全校で378名（内訳、全日制49名、定時制329名)。職員は、教員が30名、事務関係職員６名、といった陣容で学校が運営されていた。

私は採用と同時に会計係を担当することになった。未知ながらも執務していたが、就任早々は事務的操作能力もなく、ただ言われた通りに書いているだけの毎日であった。そんな中で疑問に逢着すると学校関係法令集や県例規などをひもといてみるが、日常扱っている細かい事務の取扱いについては何も出ていない。もともと事務は法令規則等によってすべて解明できるものと思っていた私には、事務取扱い細則というようなものがないことに困ってしまった。

こうして幾日か過ぎたのち、これら細部の事項については県よりの通達によっている、ということがわかったので、宿直室に格納してあった開校以来の文書を取り出し、これを執務の合間に整理して部門別に分け、事務取扱上の例規を作るなどで数日を費した。

やがてこんな日々の繰り返しで事務にも徐々になれてはいったものの、まだ不可解なことの多い学校事務にはなかなか馴染めなかった。幸い私は過去において郵便局や軍隊生活の中で事務を経験していたので、学校事務に対しても裨益するところはあったが、故あってわずか１年７ヵ月の経験だけで事務主任（現在の事務長職）を命ぜられたときはその重責に身の引き締まるのを覚えた。

その後は命ぜられた以上これを遂行するのが自分の使命であると思い努力したものの、軍隊の事務等に比較すると、当時の学校事務には不透明なものが多く苦悩した。またこのころの学校は、前述４分校の他に冬期間になると、檜枝岐、舘岩、その他に季節分校が設置されたので、学校としては南会津西部地区全域にわたって関係をもっていた。雪の中、これら広域にわたる事務管理には、人知れぬ悩みもあった。馬の背のように高くなった雪の細道を分校へ事務連絡のために歩いた。また、学校所在地が無集配局の配下にあったため、集・配ともに１日１便であり、郵便物は遅着しても期限付の報告物は早期発送を余儀なくされるので、他校に比して学校での調査に要する日数は少なくなり、その上分校が多かったので報告の資料を分校に求めることが多く、またこの連絡も順調に行かず、報告期限は切迫する。こんな時の悩みには切実なるものがあった。

一方、教員の方もこの地には好んで赴任する者もなく、あっても１、２年で転出を希望し、３年目には転任するというのが常であった。従って職員構成も若年者が多く、組織その他で常に振出しに戻っているような状態だったので、定着した校風や伝統というものはなかなか実らなかった。

また学校災害としては何といっても昭和33・34年と、２年にわたって

起こった水害が最大のものであった。それによって起こった問題もまた大きく波紋をよんで県下に周知の事実となっている。ただ私はこの時期に南会西部高校から転出していたため、詳細については承知していないので書くことを控える。

次に、昭和41年９月、台風26号によって起こった水害は私にとって初めて身をもって経験した災害である。ちょうどその時は職員の大半が新潟方面へ旅行中で、私が一人で学校の宿直に当たっていた時であった。

終日降り続いた雨の中、夕刻になって私の二男が夕食の弁当を届けにやってきた。やがて食事も終わり子供を帰そうと思ったが、折からの雨が一層激しくなり、不安を感じたので宿直室に泊めることにした。雨はその後もますます激しくなり水害の先例を受けた本校にとっては、不安の様相を深めていた。巡回も数回にわたって行ったが、校舎周辺は水量が増すばかりでここに至ってはただ学校施設の安全を祈るのみであった。

こんな状態に不安を感じながら眠りに就いた。豪雨の音で夜半に目が覚めた時には軒下は水で一杯になっており、伊南川・鹿水川の川鳴りも一層激しくなっていた。熟睡も出来ず、うとうとしているうち未明近くなり、学校の玄関へ「オーイ、大変だ、学校が流れるぞ」と言って来た人がいた。しばらくすると方々で人の叫び声がする。

そこで私はすぐに伊南川の氾濫だと思い、起き上って水害状況確認のため、校舎東側の二階に上って川辺を眺めると、思った通り、グランドの西側の方から堤防が決壊していた。ただ洪水が校舎周辺に至るまではまだ間があるので、事務室に戻り、机の引き出しを机の上に重ね、またロッカー下段の書類を上段に移すなどして書類を濡らさぬように図った。次に校長室の学籍薄入り小型ロッカーを、泊めておいた二男に背負わせて校舎東側の階段の上まで運ばせた。(この時の二男は、小学６年生であったが体格もよかったので、足をよろめかせながらも次々と運搬してくれた。)

このころ、校舎内は床面から水が沸き出て浸水しており、一方伊南川堤防の決壊距離もすでに 100㍍に汲び、グランドの濁流も鹿水川を越え、更に校舎へと迫っていた。また前庭も刻々と水量を増していたので、危険な状態になっていた。

その時、校門前の道路に集まっていた人の中から私の姿を見て、「事務長、流れてしまうから早く出てこい」と叫んでくれた人がいた。だが私はそのうち水も引くだろうという予感があったので焦らなかった。しばらくすると虻の宮の神官、渡部義臣氏の奥様、トシ姉（今は物故者）が女性でありながら危険を冒してかけつけ、「事務長さん、何をしたらいいんですか」と言って下さった時は、100万の援軍を得た思いだった。そこで早速、二男と一諸に２階へ書類の運搬を手伝ってもらった。この時のトシ姉の献身的な行動はありがたく、今でも忘れられない。

続いて虻の宮に下宿していた野中恒男先生が来てくれた。この頃から消防団、ＰＴＡ、婦人会、青年団など地域の方々が次々と救援にかけつけて下さったので、２組に分け、職員住宅と寮の方は野中先生に、校舎の方は私が采配を振ることにして救助に当っていただいた。

特に職員住宅と寮の方は濁流が押入れの上段まで及び、泥土の流入が多くこの排除には消防団の方々に一日中ポンプを可動していただくなど特別の御骨折りをいただいた。また、ＰＴＡや婦人会の方々には救援作業の外、炊き出し、接待まで御協力いただいた。またその後も引き続き後始末まで御尽力下さったことは忘れ難い思い出として、今も心に深く銘記致しております。

南会津高校にはこのような過去がありました。今ここで旧校舎時代から一転して現実の姿を見るとき、正に隔世の感がいたします。今や完全に独立し、鉄筋四階建の威風堂々たる校舎と整備された環境にあって専

心学業にいそしめる校長先生はじめ、職員生徒一同の幸せを心からお喜び申し上げるとともに、南会津高校が益々発展されるよう祈念して筆を擱きます。

南会津高校と共に28年

用務員　菅家　利徳

県立南会津高校も33歳になりました。そして近代的な立派な永久校舎に生れ変りました。誠に喜びに堪えないものであります。ここに至るまでには永い年月と多くの方々の努力の結集があったと存じます。

当時のことを思い起しながら少し書いてみたいと思います。南会高の話には必ず水害のことが出てきます。厳密に数えれば５回も水害にあっています。伊南川という川は大変な急流なのですが、水量の少ない時は全く気付かないのです。台風が来て洪水となれば想像もできぬ程の激流に変り、必ずどこかで水害があり耕地や民家が浸水したり押し流されていました。

勿論その頃には大きな堤防がなかったからですが、高校周辺も地形上いつも水害のあるところでした。鹿島橋の上流の向い側に岩盤があって、そこにぶち当った反動がいつも高校を狙っている格好なのです。それは昔も今も変りありませんから、堤防決壊の恐れが全くない訳ではありません。昭和22年にも大水害があり、伊南川の至る所で堤防が決壊しました。当時水害木工場がありましたが、やはり水害を受けました。堤防工事が盛んになり土建業者の誕生したのもこの頃でした。

学校の建つ前の状況をみると、南側は原野になっており、北側は木工場があり、従業員が50人位で戦時中は軍事工場に指定されたこともあります。荷車などを生産しておりました。工場が閉鎖されてから、元ＰＴＡ会長の近藤正智氏が買収されたと聞いております。前庭のハンドコー

トのあたりに４棟並んで建っていました。その中の１棟を現在の体育館の位置に運んで体育館として使用し、残りの２棟が寄宿舎になり、もう１棟は隣りの大工さんが仕事場に使っていました。伊南川の石を並べて基礎としてその上に建てられた５間に10間位の大きさで、天井も低くバレーやバスケットなどはできそうにないものでした。

校舎からの渡りが、尾瀬の木道を思わせるような丸太を削った一本橋でした。寄宿舎は冬には大勢になり炊事婦も居りました。夏でも自炊をしている生徒も５、６人居り、舎監を兼ねて渡部政吉先生が泊っておられました。この寄宿舎が生徒のたまり場になり、いろんな話題を生みました。渡り廊下は日中でも暗いような所でしたからいつも話し合っている先生もいました。中には転出して間もなく一緒になられた方もいました。

27年の秋には２階建て４教室が増築されました。しかし元の校舎と４間も離れており、更に２階の廊下は繋いでなかったので非常に不便でした。30年に１階調理室、２階洋裁室とコンクリートの防火壁ができまして、学校らしいまとまった姿になりました。

28年頃片貝に赤痢が流行しました。その対策として片貝簡易水道ができ、高校にも同時に引かれました。この水道の入るまでは手押ポンプが１台あるだけでした。正面玄関裏に３間ほどの小屋があり、「水 屋」という木札が下げてあったため、外来の客には水を売る所なのかと不可解な顔をする人もいました。生徒 200人ほどの飲用、掃除用、すべての水はこのポンプ１台で賄っていたのですから、ラッシュ時には大混雑しました。

水道という驚くほど便利なものができて２階でも水が飲めるようになったし、トイレの手洗いもひねればジャーになり、台所にも革命を起こすに至りました。家庭でも勿論流れの水を利用しており、風呂もバケツで汲んでいました。高い所から水が出るとは考えてもいなかったようです。衛生的で便利であることから、惣ち村中に普及しました。冬は凍結するので、水道管理も一つの仕事になったようです。

暖房の燃料も薪から石油スチームへと大きく変りました。薪の始末が大きな仕事でした。毎年の学校行事の一つとして生徒達の大きな負担となっていました。薪切り、薪割り、薪運び、杉の葉拾いの終わるまで２週間もかかったでしょうか。放課後と体育の時間だけでは足りなかったようです。特に薪運びは天気の良い日を選んで、全校生が朝から１日がかりの作業でした。それでさえ終わらない時もありました。１列に並んで１本１本手送りして、玄関や廊下にびっしり積み上げました。

35年頃水害の古材で漸く薪小屋ができました。薪割りは危険だということで割る段階まで業者がやることとしました。しかし薪運びは石油ストーブの登場するまで続きました。雪が降ったとしても12月１日にならないと焚けない時代もありました。つくづく思うに、今の御時勢にこのような作業を強いたとしたらどんな苦情がとび出すことか。

31年にグランドの造成が始まりましたが承知しない人もあり、非常に困難を極めたということも聞きました。寄宿舎の改築や、すぐ裏の鹿水川の護岸工事もこの頃にできたように記憶しています。グランドの北角には民家２軒が建っていました。

３月末になると先生方の異動があり、峠を越す人で駒止峠は賑やかになるほどでした。除雪をまだやっていない頃ですからバスもタクシーもありませんでした。歩く以外仕方がなかったのです。

32年春に菅野栄子先生（23歳）を出迎えに山次先生と田島の駅まで行ったことがあります。４月に入っても峠は丈余の雪で埋まっていました。３時間余りで針生に着き、そこからバスに乗るのでした。南会西部高校の目印旗を持って駅の構内に立ちました。待合の人や大勢の人が汽車か

らはき出されてきて恥かしいような気持でした。

先生はすぐそれと分りました。母親のようなお姉さんと一緒でした。帰りも針生までバス、荷物を山次先生と分け、皆背負い、峠にかかりました。長いオーバーコートを着てゆっくり歩きました。午後になると雪が溶けて、ぬかったり転んだりして苦痛でした。幾らも歩かないのに「まだですか、まだですか」という。「もう少しだ、もう少しだ」と慰めてはみても、仲々頂上には致らなかった。疲れや淋しさもあったのか、泣き声も聞こえるようでした。小学校の先生も「吹雪に遭って死にかけた」といっていた魔の峠であり、忘れられない峠でした。

長いこと降り続いて最後に台風がきて一晩中の雨と風。33年９月18日９時頃、堤防が決壊して高校は濁流に呑まれてしまいました。早く避難するよう誰か怒鳴っていたが、いっこうに避難する気配がありませんでした。その時にW氏が特別の大声で怒鳴って、やっと気付いたように避難し難を逃れました。体育館も寄宿舎も流されてしまいました。校舎も１階の教室が流失し、２階がぶら下がってしまいました。できたばかりのグランドと人家２棟が流され、根こそぎの大木があちこちに横たわり前も後も伊南川になってしまいました。

午後には大分水もひき、区民の手伝いを受けて片付けや掃除が始まりました。至る所泥ばかりで、洗い流すのが大変でした。まだきれいに片付けも終らない中に台風22号が来ました。追い打ちをかけられ、授業が始まるまでには時間がかかったそうです。２階の教室も危険になり、教室が不足して全校生を収容することができなくなってしまいました。その結果、１年生は明和分校へ通学することになったほどでした。そのままになってしまうのではないか、という不安から父兄から承諾を得られず、話が難行したようです。

復旧工事が進まないまま、34年８月15日にまた洪水にあいました。この時は夜で宿直の先生が置き去りになって、一騒ぎになりました。いよいよ移転問題が大きくなり、誘置合戦が激しくなってきました。近藤校長は移転を主張され、村当局と意見が合いませんでした。そのために殆ど只見分校に居られ、入学式、卒業式にさえ顔をお出しになりませんでした。

移転の候補地は富山、和泉田、大倉、大橋、大新田、伊南など挙がっていました。辺見文助氏の甚力によって明神岳の前の高台に敷地が決定したのですが、何らかの理由で現地復旧となりました。そうするからには絶対に流れない堤防を作るという県土木部の申し合わせがあり、８億とかの予算で河川改修が始まったのです。この頃には機械化が進み、惣ち大きな堤防ができました。

水害から２、３年はグランドも体育館もなかったようです。グランドは星組の請負で、駒止の近くから大量の壁土を運んで埋めたてました。体育館は現在の体育館の３分の１だけできました。ステージもなく狭かったので、入学式や卒業式などの式典には新校舎の教室の仕切りを取りはずして行っていました。職員住宅、寄宿舎、調理室、理科室、普通教室２つが増築になりました。

前庭の一部が仲々整地できないままになっていました。これを生徒の力で埋めたてることになり、全校生で伊南川から石を運びました。石を手に持って蟻の行列のように並んで。生徒の手で完成させることはできませんでしたが、その熱意が村当局を動かし石垣と整地が村負担でできあがりました。そこに音楽室が建てられました。39年体育館が増築になり、学校の機能が整いました。

学校も近代化が進み、木造校舎が県下に10校位と聞いたのが45年位でした。早期改築を願って期成同盟会も発足しました。改築は間近からしいというニュースばかりで長いこと待たされました。本当に改築が決ま

ったと知らされた時には、皆ホッとした感じでした。近代的な設備を誇る永久校舎が完成しました。保育所、小中学校、官庁も改築されており、木造校舎を知らない生徒も多くなったと思います。特に暖房は厳寒の真冬でも27度位に保つことができ、夏と同じような状態にあります。腹が空いたらパンを食べ、水の代りにジュースを飲み、ほどよく温まって居眠りをする。学力低下に繋がったのではせっかくの校舎が泣いてしまう。

恵まれた環境でせいいっぱい勉強され、優秀な人材の生れることを願ってやみません。

師からのたより

在職の思い出と提言

太田原　芳治

終戦のどさくさにまぎれて21年ほど在職した旧制会津中学校を退き、養蜂業に打ち込んで５年ほどたった昭和25年の11月、玉川春雄先生が訪れて下さった。南会西部の高等学校に来てくれないか、とのことであった。結局お引き受けして着任したのが片貝の新校舎（取りこわされた旧校舎）が出来て和泉田から移転されたその日であった。

私は朝、田島駅に降りて、はや12月だったのでバスも運行をやめた針生、駒止、山口の街道を徒歩で片貝に向かったのであった。幸い体力と脚力には自信があったので、60歳近い年輩ながら勇気に満ちていた。雪が２、３寸積り、なお、しんしんと降る駒止峠を一歩一歩登った記憶は今でもはっきりとしている。

学校に着いたのは３時ごろであったろう。移転を終わった若い先生達は活気にあふれ、玉川校長も大変喜こばれて、心あたたまる歓迎を受けたことを記憶している。

私は英語の受け持ちでこれ一筋に長年やって来たので他に芸はなく、ひた向きに授業を始めた。生徒も大変まじめでよく勉強し、暖かい心で遠来の老教師を受け入れてくれた。昭和26年の４月からは全日制の普通科が開始されたので、英語も時間が増えて基本からやれるようになって来たし、大学進学の希望者も増えつつあったので生徒とのかかわりもだんだん深くなって行ったように思

われる。

私は宮川屋という所に下宿していたが、村人との交際も次第に増え、純朴な奥会津の人情に心ほだされるようになった。長年勤めていた会津中学校も生徒が熱心で純朴で本当に愛すべき少年達であったが、南会西部の生徒達はそれに輪をかけた本当に純真で、まじめで愛情に満ちていた。私は6年間の小学校教育の経験ではあるが青年に近い女性徒を扱ったことがないので西部高校の女性徒は特別に新鮮で可愛らしい存在であった。

私は学科の他スポーツ好きで、殊にスキーが大好きである。会津中学校で昭和6年からスキー部長を勤めたが、生徒と共に熱中し、毎年の県大会には連続優勝し、毎日新聞社の優勝旗4本を獲得していた。昭和7年、若松に会津スキークラブを創設して、背炙山にスキー小屋を造り、猫魔、明神ヶ岳、博士山などの冬季スキー登山を行なうなどのことをやっていたので、深雪の奥会津の冬は自分にとって絶好のゲレンデであった。

学校のすぐ前にそびえている明神ヶ岳で毎日スキーをやった。生徒もだんだんつられてすべるようになり、やがて全校に広まり、伊南川を渡って向側の小野島部落の裏山で全校スキー大会を開催するまでになった。私は、奥会津は日本でも豪雪地帯であるから将来スキー場を造って全国のスキーヤーを招き寄せ、農家は民宿で稼ぐようにすれば良い産業になるなど自分が肩を入れて来た猪苗代の例を引いて、村人や生徒に話したこともあったが、それが今日、南郷、只見、桧枝岐に実現していることは、喜ばしいことである。

昭和54年4月20日、南郷村役場振興課長、目黒良夫君が車でわざわざ迎えに来てくれた。普通科の第1回の卒業生が同窓会を開くからというのだ。28年ぶりのことである。その夜、名湯旅館さゆり荘に集った人達約30名、大方は村の要職について「ふるさと造り」に挺身しているとのこと。昔懐しいＰＴＡ会長、渡部次郎医師。30年勤続の五十嵐文泰事務長。本当に懐しく楽しい集りだった。

目黒君からは前もって数々の立派なパンフレットや写真などを送ってもらって、村の発展の有様を予知していたが、会が始まる前に車で村を案内してもらい、昔と違って村が立派になり便利になったのに驚いた。面目一新である。新築殆んど完成に近い高校も見せてもらった。それから目黒君は、わざわざ駒止峠の大トンネルの工事現場まで車を走らせてくれたが、竣工の暁には山口から田島まで一直線に20分位で出られるとの話であった。これこそ西部開発の大動脈であろう。

私は31年の3月に西部を辞して若松に帰ったが、未開発地の多い深山大沢、原始林に囲まれた奥会津の、この30年間の発展ぶりに目を見張ると共に、この発展を今後も長く続けるために私なりに一言提言したいと思う。それは西部の大自然を破壊することなく、かえってこれを利用しつつ現代的な産業を発展せしめ村を振興させる方法である。

前に述べた通り私は養蜂業に従事して来たが、その基本となる蜜源植物が（例えば栃の木など）奥会津の原始林の中に非常に多く、全国でも首位を占めている事実に注目したい。私はこの貴重な資源を保護するよう議会を通じて国に要請して効果をあげているが、これを実地に活用するのは地方民であるから、村としても指導者は早く着目して国の施策に歩調を合わせて青少年を指導して有望な養蜂業を振興させ、合わせて村の発展を図るべきだと思う。大自然の合理的な利用、そこに新しい産業が生まれ、新しい村の発展があると男う。

在職期間 昭和25年～31年
（会津若松市門田町南青木字石高249）

或る思い出

山次　政男

創立三十三周年、校舎改築落成記念おめでとうございます。

さて、当時（昭和25年より８年間）の思い出と申しますと、いまだ「南会西部高等学校」と称した時代で、いわば、本校の古代史の部になってしまいます。とにかく本校の歴史といえば、渡部次郎先生は、古代・中世・現代と、言うなれば本校の歴史そのもので詳しくは次郎先生にお聞きした方が良いくらいです。それでは、私の思い出を２、３記してみたいと思います。

最初に赴任したのが伊南分校で生徒数が19名。驚いたことには出席は常に半分以下。しかも、モンペ。ドーラン携行、教科書は丸めて懐中にといった姿。私の担当は英、国、社で、理、数は本校から鈴木孝二、須摩先生等が徒歩で出張授業。それも１日中数学だけ、又は理科だけで、生徒もいやになったろうと思います。欠席も多かったが登校した時は熱心に授業を受けていたようです。向学心の盛んな伊南からは、福大、明治、法政、会津短大等に進学した者もおり、そういった人たちが現在の伊南の村長、教育長その他相当の地位で活躍しているようです。そんな４年間を伊南で過ごし、後半は本校へ移って次郎先生宅へ度々伺い、山の茸取りなども楽しんだ思い出があります。

本校へ移って一番印象の深いのはなんといっても雪のことです。昭和32年の大雪では校舎がうずもれる寸前で、授業中にミリッ、ミリッと音がする状態になり、先生生徒一丸となって毎日雪降ろし。最初は授業がつぶれる、といって喜んでいた生徒も「俺達は雪おろしに学校に来ているんじゃねえ」とぶつぶつ言い出す始末でした。

冬休みに入っての或る朝、1・5メートルも積り学校のことが気になり、下宿（渡部雅夫氏宅、鹿島神社のすぐ上）から学校まで50分かかった経験があります。それこそ雪の中を泳いで行く、という表現がぴったりの経験でした。さすが健脚自慢の私もあの経験は忘れることができません。

健脚のことが、でましたが、当時の入学試験の問題の運搬。これが又問題で、若松まで三人の先生が３日がかりで駒止峠を運び更に各分校へ運ぶのですが、日頃の健脚自慢がたたって私はいつも一番遠い只見までやらされました。なにぶん馬の背中のような雪道を歩くのですから、かなりの重労働だった事を覚えています。

それから、４月。新任の先生が来るわけですが、田島まで来て情報に驚いて着任を中止し、Ｕターンした人もあり、また中には電話で、田島からリヤカーで荷物を運んでほしいと言われ、こちらが驚いた事もありました。更に女の新任の先生が３人着任するというので、私が田島まで迎えに行き峠で皆にブツブツ言われ、帰られては一大事とだましだまし連れて来たことなどもありました。それから奇妙な事には、単数独身で赴任された先生が離任の時は殆んどといって良いくらい複数になった事です。

まだまだいくらでも思い出はありますが、紙数の関係でこの辺にしておきます。

在職期間　昭和25年～32年
（会津若松市住吉町155）

現在にも生きる５年間の経験

小林　栄三

南会西部を去ってもう22年。20歳台後半の青年だった私も大学生と高校生の子をもつ身となっています。日夜生起する政治的、社会問題につぎつぎと対応を迫られる現在の私の仕事と生活の様相は、学校の年間計画と時間割にしたがって、教科書と出席簿と教務手帳とチョーク箱をかかえて教室に通った頃とは大きく異っている。しかし、南会西部の５年間は遠い過去の思い出にすぎないというものではない。

1953年５月はじめ、私は郷里の金山町から只見でバスを乗り継いで学校前に降りた。桜がまだ見ごろだった。それまで教師になるなど全く考えたことのなかった私だったが、生徒諸君の学力がはなはだ心もとないものであることは間もなくわかった。たとえば、寄宿舎住まいの某君が大学志望ということだったが、「ヒー、ヒズ、ヒム」などと懸命に暗誦しており、その文法的意味をたずねると正確な答えが返ってこないので私は驚いた。科学的社会主義について語る以前に、もっと基礎的な知識がまず必要だと痛感したし、そこに私の一つの生きがいを見出しもした。

当時の日本共産党は分裂状態にあり、その関係で私の組識的活動も中断を余儀なくされ、党員としては苦難の状況にあったが、教壇に立って人類が長い歴史の中で産み出してきた文化の一端を、生徒諸君のものとするようつとめることが、ささやかながらも社会進歩に役だつ私の使命だと考え、それが私自身へのはげましにもなり愉快に—かなりの生徒諸君にとっては猛烈に—仕事に取り組むことになった。現在も私は党の教育政策などに関与するが、当時の経験はその重要な支えの一つにもなっている。

私の本籍地の金山町もそうだが、南会西部は交通とか文化施設とかの面では非常に不利な条件のもとにおかれている地域である。私の赴任当時は水道もなく、冬は徒歩以外になく、校舎も校庭もまことに貧弱なものだった。５月の連休明けまでは教員の補充がつかず、臨時時間割で私も英語、社会のほかに数学までやったことがあった。冬は寄宿舎の舎監室の羽目板のすき間からは白く凍った積雪が見えた。そういう地域での人々の生活に教師という限界はあるが接することもできたし、情熱を傾ける仕事をすることもできた。それは私にとって充実した日々だったと今も確信するし、ひそかな誇りでもある。

今では校舎は新築され、近くに温泉も出るなど学校も地域も様相はかなり変わったが、いろんな面でまだ日本の中で不利な条件下にあることには変わりがないと思う。その意味では、過去の思い出としてなつかしんでいるだけでは私の責任を果たせないと考えている。そうした事態の根本的打開に、日本の政治と社会の変革をめざす今の私の仕事は結びついていると思うし、いろいろな仕事をするにつけても、伊南川沿いの地での５年間の生活の記憶が私の念頭に去来するのである。

在職期間　昭和28年～32年
（日本共産党中央委員会
川崎市多摩区下麻生636－16）

がんばった思い出

今野　雅益

私が南会津高校（当時は南会西部高校と称していた）に奉職したのは昭和34年４月、前年に台風のために伊南川が氾濫し、体育館と校舎の一部が破壊されグランドは土砂や石などで使えず、体育の授業はまったくのお手上げの状態だったことを思い出します。それでも荒れて河原みたいなグランドでソフトボールをやり、なんとか当時の生徒達にスポーツを好きになってもらうよう努力したつもりです。

私の専門のハンドボールを生徒達に教えたのもそんな時でした。ボールを扱いやすいことや、ジャンプシュートやスナップシュートのおもしろさを教えたことが理由だったのか、ほとんど毎日の放課、ボールを借りに来てはゲームをやっていました。私も若かったのでいつも一諸になって走りまわりました。その後、数人の人達が愛好会をつくろうと集まり、ハンドボール部結成の足がかりとなったわけです。五十嵐司君、森建樹君などが中心によく活動しました。

昭和35年、愛好会から正式にハンドボール部となり、又、台風災害の復旧工事も進められ、グランドにも大量の山砂が入れられて整地され、広いグランドに生まれかわり同時にハンドボールのゴールポストも備えつけました。当時は11人制ハンドボールでしたので、ゴールポストもサッカーのゴールポストと同じで、幅７㍍23㌢、高さ２㍍44㌢　だったので、知り合いの大工さんに手配をお願いしても材木が集まらずに若労したことを思い出します。

やっとのことでゴールポストを備え、それこそ毎日練習に励みました。当時私も現役として活動してまいりましたので生徒と一諸になってあばれていました。又、私が選手として出場した県の大会や東北大会では、他のチームがどんな練習をやっているのか、又どんな新しいプレーがあるのかを見てきては新しい練習法などといってよく教えたものです。

昭和35年８月、初めて県総合体育大会に出場しました。安達高校グランドで行われたのですが、相手は安積高校だったと記憶しています。南会津高校ハンドボール部の初めての公式戦、いや対外試合でした。

試合開始のときびっくり。フォワードが右と左、逆に並んでいるではありませんか。学校で練習をやっているときは自分のチームの５人のデフェンスに向かって攻撃するわけですが、いつものように並んでその場で「まわれ右」をしてしまったのです。正しいポジションはセンターフォワードだったわけです。現在の７人制ハンドボールのようにポジションはどこでもいいという状態でなく、ライトウィング、レフトインナーなどになっていましたから、あきらかに間違いがわかるわけです。

そんなわけですから試合の方も一方的、一点も入れることができなかったことを覚えています。ＧＫの森君だけが右へ左へと大活躍だったことを思い出します。

ハンドボール部をつくって３年間でしたが色々なことがありました。しかし、安積高、福島高に次いで第３番目にできた南会津高ハンドボール部の歴史には誇りを感じています。しかも昭和36年には初めて県大会出場、福島高、安積高いずれにも敗れはしたが接戦をくり広げ、初出場の若松一高を敗り第３位になっている。また次の年の高校大会では安積高校を敗り福島高に次いで第２位となったのである。

このように、創立３年目でハンドボール部の土台がしっかりと築かれたと感じました。私の青春時代の南会津高校、そのなつかしい時代を思

い浮かべるとともに、ハンドボール部の土台として活躍した人々の面影が次から次へと浮かんで来るのです。

これからの南会津高校の一層のご発展とハンドボール部のご活躍を期待してやみません。

在職期間 昭和34年～37年
（県立川俣高等学校勤務、福島市伏拝字台田５の13）

南会津高校での思い出

佐　瀬　　渉

風雪、洪水、自然の厳しさに耐えつつ、郷土の方々の教育に対する情熱に支えられし南会津高校、創立33周年校舎落成心よりお慶び申し上げますとともに、今後ますますご発展されますこと、お祈り申し上げます。

さて、小生在職昭和36年より３年間のほんのわずかな期間の思い出、感想を述べさせていただきます。

冬の駒止峠越と夏の鳥井峠越

昭和36年末、終業式も終え、寄宿舎の舎監の任からも解放され、冬休みで帰省し正月を実家で送りました。３学期の始まる１月上旬、田島町針生の大和屋に一泊した。その夜、雪は一晩中降りしきっていた。しかし翌朝、同僚の先生とスキーを担いで深い雪の中をはうようにして、駒止峠を電線やら木立ちのかつての道を求めつつ足を進めた。登山用のキスリングを背負っており難儀なことだったが、西部、南郷の人々はかつて幾年もこうして厳冬の山越えをしたのだろう。そしてそれは、やむにやまれぬ峠越え、生きるための活路を開くためのものだったのだろう、などと様々な思いをこめて４時間ほどかけて、ようやく峠の茶屋にたどりついた。

茶屋は今の反対側にあった。昼食をすまし程なく歩き、下り坂よりスキーにはきかえて重いリュックを背にし、樹間を滑り降りた。時々木をさけることが出来ずに樹々に体あたりしたこともあった。視界が開けた所からは奥深い連峰、会津駒ヶ岳の愁然たる姿、その奥に燧ヶ岳、朝日

の山なみの冬景色は誠にすばらしい。今でも鮮やかに脳裏に残っている。しかしそんな景色を見ながら下山したものの、山口に着いた時は５時を過ぎていた。以外に時間がかかるものでした。

「駒止峠」早春のあの燃えるような新緑、樹間のブナの趣、盛夏の蟬の声、錦秋の絵巻の峠はすべて心をうち、心を洗うものがある。そしてあの厳冬の峠。私は生涯忘れられないだろう。

さてこの年の夏休み帰省の折、南郷に帰るのに大沼郡の奥地、谷ヶ地村から独り歩き、博士峠旧街道を越え、喰丸峠、大芦、更に鳥井峠を通って界の鹿水川、今のスキー場の下の沢ぞいの路をとぼとぼ南郷に帰ったことがあった。途中で一泊、それは大芦であり小学校前の宿屋であった。急に行ったのでソーメンの夕食。たぶん１泊300円程だったと思う。

この街道は明治の中頃まで南郷の方々が、新潟、柳津の虚空蔵様参り、飯豊山参りにと往来した交通路であったらしい。下宿していた富山の酒井延寿翁も幾度か通ったことがあったという話を聞いたことがある。この道は昭和村との交流の路であり、山中にはサユリ、道標もあり、変化にとんだ路である。地図を片手に歩いたが、難所もいくつかあった。会津の峠はまさに趣きのある景色と、その隣に住む人々の往時の生活をしのぶことができると思う。ふるさと会津に長く住む人々にとって交通がいかに重要なものか、ということを悟ったものでした。

幼稚園での盛大なパーティ

昭和38年の年末。そぼふる雪の晩だった。トキ医者が園長だった幼稚園で盛大なクリスマスが催されたことがあった。多くの婦人、青年が集い、ダンスパーティが行われた。その時の飲み物は、ベースに焼酎を使ったジン、アカダマ、ペパーミント、安ウィスキーなどのカクテル。確かなことは忘れたが、甘口で口当たりの良い腰がとられやすい飲み物が多かった。それをみんなで飲み、踊りに踊った。

外は静かな雪景色、近くを流れる伊南川の流れは聖夜の如く、「清しこの夜」にふさわしい景色だった。パーティ会場の飾りつけもみごとなものだったし、照明も超一流であった。楽しげに踊る発起人トキ医者、次郎医者、南会津高校の先生方、近郷の青年男女、誠にすばらしい交流交歓の雰囲気であった。

あのすばらしいエネルギーはトキ医者の地域若人に対する心づかいが山間地のレクリェーションの発芽の様な気がする。小生はあのビックなレクリェーションは特に思い出の一つである。

下宿、学校、舎監、すがや食堂、次郎医者での談義など沢山思い出があります。心暖まる南会津での思い出は心のふるさとであり、いつも心の支えになっていることをありがたく思います。

忘れ得ぬ人々

最後に私の忘れられない人々について書いてみたいと思います。

南郷村下山の故馬場とくえさんの歌。良く理髪に行く度に歌を見せてくれた。南郷の女の生きざまを詠んでいる、〝さえかち〟の歌集。表紙はかつての床屋さんが撮ったものである。当時散髪料70円也であった。息子さんが出版したものを入手し、南郷の老婆の物語として感心している次第である。更に故酒井延寿翁の精神と神仏の信仰について、下宿した者として深く印象に残っている人である。

次郎医者、トキ医者の温和にして心暖まる人情は筆にあらわせぬものがあります。

南会津高校ＰＴＡ、同窓会、学校関係者の御健康と御多幸をお祈り申し上げ、乱筆にて失礼いたします。

在職期間　昭和36年～38年
（県立喜多方商業高校勤務・河沼郡会津坂下町福原字福川原930）

思い出の記 ～あの一戦～

布川　澄夫

「幸多き大自然　尾瀬の高原　燧ヶ岳に湧き出ずる雲　かかげる理想　花咲く文化…」と校歌にうたう歴史と伝統の上に数々の輝かしい記録を残しつつ着実に発展されておられますこと心からお祝い申し上げます。またこの度は創立33周年を迎えられ並びに校舎改築落成記念式典が挙行されますこと誠におめでとうございます。

さて私のいた昭和40年頃の建物は最早跡形もなく姿を消してしまったと聞きます。しかし私の脳裏には今なお当時の思い出の数々が印象深く、しかも鮮明に映ってくるのです。あの雲脚が早く、雪の舞い落ちる冬はその印象の一つであります。ともあれ私が南会津高校を語るには事欠くことはありません。それら数多くの思い出の中でも私の心から離れない強烈な印象があります。それは忘れもしない昭和40年８月５日の第10回全国高等学校軟式野球東北大会であります。

準決勝の相手校はすでに山形県代表谷地高校と決定していた。試合は９時ちょうど、けたたましいサイレンの音と共にプレーボールとなった。２回裏先取得点をされながらも４回表同点とし、それ以降は息づまる膠着状態の一戦となった。２対２で迎えた７回表、５番打者大束一仁選手の１打は左中間深々と破る大３塁打となり、後続打者の正確で実に見事なスクイズは３塁線上に点々ところがった。それにより得た１点はこの試合を決定づけ、３対２のスコアをもって逃げ切り決勝進出を果したのであった。南会津高校の強い一面を見せつけた一戦であった。スコアは次の通りである。

南会津（福島）	0	0	0	2	0	0	1	0	0	3
谷　地（山形）	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2

続く決勝戦は宮城県代表の石巻商業高校であった。思えばこの日は実に長い１日であった。２時30分、大束一仁投手が１球を投ずることによってその幕が切って落とされた。馬場秀男捕手のミットに矢のようなスピードボールのストライクが決った。８月５日の猛暑の中の一戦であった。

県営信夫ヶ丘球場には多数の先生方、先輩諸氏の顔があった。今なおその時の情景や選手一人一人の顔が走馬燈の如く思い浮んでくるのである。それぞれ強い個性を持ちながら監督の私を全面的に信頼しきってついてきてくれた選手の一人一人を、はっきりと目に浮かべることができる。野球部員としてのマナーの良さ、礼儀正しさは評判となったばかりでなく、学業成績の面でも他に誇れるものがあった。ここで当時のメンバーを紹介し、話を先に進めたい。

氏名	大束一仁	馬場秀男	大宅進	小松一男	平野幸隆	菅家進	斎藤洋	斎藤建之	河原田修蔵	平野修司	斎藤幸雄	五十嵐伸也	馬場俊幸	酒井敬臣	大桃幹一	河原田紀敏	斎藤玉男
学年	3	3	2	1	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	1	1	1
位置	㊥	捕	一	二	三	遊	左	中	右	補	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

（『第十回全国高等学校軟式優勝野球大会第二次予選東北大会』要綱より）

この一戦に勝てば大阪行きだ、藤井寺大会に臨むのである。イニングは進んだ。３・４・５回、両校とも安打の少ないまれにみる投手戦とな

っていた。６・７・８回、依然として両校無得点のままであった。それはただいたずらに無策のまま回が進んでいくように見えた。ここで恐ろしいのは四球と失策だ。私はベンチ前で気合いを入れた。９回裏でなんとか決着をつけねばならぬ。

しかしだめであった。零対零のまま延長に入った。大束投手一人をたよりにするしかない我が校にしてみれば実に不利であった。失点の少ない本格派の投手だっただけに延長戦にもつれこむことは直接「敗戦」につながるだけであった。今考えてみればチーム全員の心の中はどんなものであったのだろうか。その後全員揃って歓談する機会のないのが残念である。

やがてくるべきものがきた。魔の11回表、大束投手の力が目に見えて落ちてきた。打たれる。キャリアのある石巻商は見逃すはずはなかった。３点とられてしまった。実に大きな失点であった。「裏がある」と叱咤激励し続けねばりにねばったが、そのまま押し切られてしまったのである。あの時の悔しさは何にたとえられようか。チームメート達はどんなにか無念であったことか。本当に惜しい一戦であった。選手諸君はもとより、私も自然と泣けてくるのであったが、「その涙は将来の君達を造っていく上で決して無駄ではないのだ」と言って聞かせたのもついこの間のように思われる。

その日のテレビ、翌朝の新聞は「南会校惜敗」と大きく報じた。彼等は実に貴重な経験を積んだばかりでなく「天下に南会津高校あり」と母校を世に高らかに示してくれたのもこの時であった。

《決勝》石巻商（宮城）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
南会津（福島）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（延長11回）

実に懐しい限りである。この度実行委員会の御希望によりまして「当時の野球部について」という内容のものを書くことが出来ましたことは大変嬉しいことでした。その後の私は南会津高校を転出致しましてから、東白農商高校、須賀川高校、白河高校と異動し、それぞれの学校におきましてはいずれも野球部の監督として生徒の指導にあたっております。

どうか皆さん、未来永劫に続く南会津高校を自愛されて、益々発展されるようお祈り申し上げます。

在職期間 昭和40年～41年
（県立白河高等学校勤務、須賀川市朝日田129の20）

思　い　出

富田　良夫

私、43年に着任し、すばらしい自然、生徒諸君にめぐり会え、教育の原点に近い人間教育の場に、実績もなく11年間も在職できたことは幸せこの上ないものがあります。また、私にとっては表面上教師づらを保っていましたが、何につけ先徒諸君と学んだ実感が強く、教師としての母校でもあります。

この度、校舎落成、創立33周年記念を迎える運びとなったこと、私にとって喜び極りないものがあります。

今は懐しく思い出されますが赴任当時は生徒諸君の顔の黒さには驚きました。後に部活動による雪焼けの顔と解った時には、南会津高のすばらしい一面を知った気がいたしました。トレパンに短パンスタイルの三瓶先生。独特の腹の康先生。今べートーベンの斎藤先生など熱心な先生がいらっしゃいました。この伝統は、薄、高橋、菅野、渡辺、善久、先崎各先生方などに受け継がれました。渡辺先生などは吹雪の夜でも生徒を自宅に送り、午後10時ごろもどられる姿を拝見し敬服いたしておりました。

更に私は100ホーンの公害と言われましたが授業では生徒諸君に迫力があったことです。昭和45年卒業の諸君がそうでした。新、和成、安治、政孝、孝法、和彦、吉久、竹則君など、私はこの生徒達の顔を正視できないものでした。年々薄れはしましたが学習意欲の強い生徒が多く、46年卒業の方隆君等と授業を忘れ、真理、真実論争をしたことが思い出されます。金沢先生の影響で読書欲も強く、陽臣、洋三君等はじめ山口の大宮堂書店に本代のつけがいくらたまったかが自慢であったようです。

又、頼もしい連中でもありました。参観ホームルームで「農業が生きがい」と宣言した孝法君はじめこの学年の諸君が、地元に多く残られたのは大きいものがあります。以後この傾向が強まった気がいたします。学習面でも厳しさがありました。山内、後藤、菊地、浅野等の先生方の残されたこの風潮はしばらく続き、進学、公務員、就職にと好結果をおさめました。

当時、私共の関心は校舎改築につきていました。山内先生を中心として、内容で改築を早めよう、そのためには勉強で、部活動で実績をあげる気持ちで一生懸命でした。由祐、英明、邦夫、喜春、甚悦、月田盛夫、善一、羽染盛夫、一吉君等多くの生徒諸君がこの期待に応え、補習等もしないのに立派に巣立っていきました。

教師として成長できたのは舎監として浅野先生共々過ごした時習寮のおかげでした。部屋割、洗濯等の雑用は下級生にさせないなど、運営をめぐって大論争をしましたが、薪割りに雪踏み、炊事に良く働いてくれました。また恋愛相談などで悩まされ午前1時頃の就寝の毎日でしたが、教えることより教わることの方が多かったものです。閉寮式では山内信也君のギター伴奏で、寮歌、分散歌に涙し、一晩中続いたことが思い出されます。

生徒諸君のすばらしさを感じたのは44年の水害の時でした。電話が不通で生徒非常招集はできませんでしたが、それでも学校までかけつけ後かたづけをしていた姿が忘れられません。10年間たずさわった生徒指導ではバイクと男女交際です。県教委通達2年前からバイク屋さん、生徒達と衝突しながら50ccに統一しましたが茂君を亡くしたことが悔やまれます。恋愛学校との評判を気にしながら指導に困ったのが男女交際です。

最後には次郎医者の忠告どおり将来一緒になれば、と心配したものです。数多くのカップルが結婚しましたので安心できました。

思い出せば限りありません。紙面の都合で書けないことが数多くあります。新しい酒は新しい皮袋に、という気持ちで南会高を後にしました。今までの伝統の上に新しい哲学が生まれ、ますます発展されることを祈り、そして信じております。

在職期間 昭和43年～昭和53
（県立二本松工業高校勤務
伊達郡伊達町大字伏黒荒屋敷５）

同窓生のたより

故郷を出てから幾年ぞ

農業科昭和27年卒業　五十嵐 暁 三

山越えと夜汽車の疲れで目をこすりながら、G少年は古びた木造の千葉駅に降り立った。すでに心の整理はできていたはずであったが、不安と期待の交差はどうすることもできなかった。

昨日は、またG少年にとってもうひとつの出来事があった。それは隣りのM嬢の祝言の日であった。……峠の茶屋で、少年の布団を背負って後からきた叔父から「富田橋まで追いかけたが会えなかった。」との話を聞き、少年の鼓動は高鳴り、また静まっていくのであった。

紅顔の美少年(？)であったG君にも歳月が流れ、髪にも白いものが混じり、ふるさとを思い出すこの頃である。

多くを語らない父は、出るとき、千葉の女には気をつけろと言った。それもいつしか風化し、純粋な千葉子を現地調達し、自然ななりゆきとして子供も３人生まれ、上は大学で、毎月決まった額を請求され、２番目は生意気な高１で、毎日鏡の前でドライヤーを使っている（勉強時間よりも長く)。末の娘は中２で、色気づき服を着替えては街をうろつきまわっている。

忘年会の余興にとようやく覚えた「北国の春」などうなるものなら、オンチ公害だからヤメロと言う。たまにはG君、俺の高校時代はナァー、定時制で働きながらよく勉強したもんだ。だから偉くなったんだ。お前達もよく勉強して偉い人になるんだよ。子供一同、フン、南会津高校テあんのかヨー。G君、憤然として、旺文社だか何かの高校コードを見つけ証明してみせる。これでおさまらず、同窓会名簿を持ち出し、大学入学者など懸命に数えるのである。

先ほどの水割りがキキ出し、ユキドケーセセラーギ……アノコハドーシテル……。

G君はまた名簿をめくり、千葉県に何人来ているかと赤エンピツで印などし始めるのである。確かめるとカーチャン、カーチャン、200人もいる。すぐ近くに女の人もいると叫ぶ。すると妻君、会ってきたらいいでしょうと機嫌が悪い。仕方なくG君、名簿をめくりながら思い出にひたるのである。

G君には貯金通帳の次に大事にしまっているものがある。ガリバン刷りのボロボロの高校新聞と会誌である。それはそれはオソマツなできばえではあるが、G君の宝物である。その中には、渡部亘先生（名簿にない)、山口秋夫、桑原寛、須摩功、林辺礼一、鈴木孝二、玉川カヨの各先生の寄稿が多い。いや、創立当時(23～24年頃)は先生全員であったかも。もちろん若い玉川校長の訓示はいつも載っているが、また、生徒の中には中途でやめていった秀才たちの名前がある。能弁な馬場広道、のっぽの山内清兵衛、五十嵐了介、万能な坂内勝典君等々。

G君の最近の(といっても数年前か)ショックは、後輩のT女子の息子が千葉県庁に入ったことである。G君、やおら計算を始め漸く納得。千葉県在住28年をかみしめるのであった。

（千葉県農林部農産課・千葉県千葉市都町1－52－11）

当時の学校

農業科昭和28年卒業　八巻　牧夫

我々第２回生が母校に入学したのは、昭和24年４月であった。その当時は各村に分校がおかれ、私も大宮中の同級生６人と一諸に大宮分校に入学したのだが、もちろん独立校舎はなく、小学校の２階の端にある１教室を借り、第１回生と同じ教室で授業を受けるいわゆる複式学級であった。

大宮分校の専任の先生は、岩手大学を卒業と同時に赴任された角田先生と、東北大学の中途で健康を害され休学されておいでになった竹内先生のお二人であった。その後、東京農大を卒業されたばかりの篠崎先生もおいでになったが、どなたもお若く、それぞれに特色あるユニークな先生方で、今でも楽しい想い出が次々と頭に浮かぶ。

角田先生の御指導で２週間程かけて行った山林測量実習、あるいは夜に伊南川の河原で川の水を汲んで炊いた缶詰め飯のファイヤーストーム等。中でも印象的なのは測量実習で得た謝礼金をもとにして行った舘岩旅行であった。３泊４日の分校ぐるみの旅行であったと思うが、舘岩小学校の教室を借りて宿泊し、湯の花温泉まで歩いて往復した後、夜は校庭で火を囲んで歌を歌い、夜がふけると若い先生の指揮のもとに近所のとうきび畑にアタックをかけ、収穫物に舌づつみを打ちながら夜の明けるまで話し合ったこと等、今から思えば勇気のある先生のもと、土地の人には申し訳ないが楽しい思い出であった。

また、その当時の授業で今でも印象深く想い出されるのは、角田先生の幾何と竹内先生の世界史である。我々にとって初等幾何は難解極まりないものであって、先生が板書され丁寧に説明されるのだが全く我々の理解の範囲を越え、ただひたすらにノートするだけであった。私自身現在数学の教師として幾何等を教えたりすることを思うと、運命の皮肉さに内心忸怩たる思いがするのである。また一方竹内先生の世界史は、教科書もなく、先生自身ノートも持たずに、そらで口述されるのをノートするのだが、その文章が幼稚な我々にも大変な名文に感じられ、一言一句聞きもらさず必死にペンを走らせたものである。

その後、第３回生が入学する頃になると大宮分校も手狭になり、元の南郷村役場の場所に移ったわけであるが、大宮分校も３学年２学級の編成となり、だいぶ学校らしい雰囲気も出て来たように思う。しかしそれと同時に私の記憶も薄らいでしまう。ただこの年の冬、教室にあった大火鉢の底が燃え抜け、危く大事になる事件があった。丁度、この頃、大宮分校が本校に統合されるという話が具体化し、分校生全員で村内を回って、その存続方を訴える等の運動を行なったりしたが、結局昭和26年３月限りで大宮分校の廃止、本校への統合が実施されたのであった。

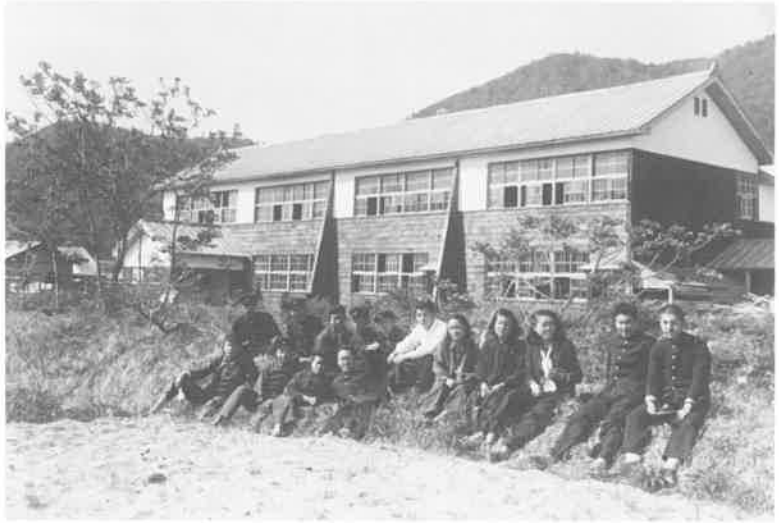
本校へ移ってからも、我々３年生は４年生と同じ教室で同じ授業をうけたわけであるが、第１回生である４年生の中にはすでに成人に達した人や、自称成人等何人かおり、授業が終わると廊下にあった火鉢に集まり、おもむろに腰のキセルを抜き出し一服つけるという光景もみられた。

初代校長である玉川先生御夫妻に親しく御指導をうけられるようになったのも本校に移ってからであった。校舎の裏の一角に校長公舎があり、放課後などお宅におじゃまをしていろいろお話をお伺いしたことなど楽しい想い出であった。

戦後の混乱期に何もない所に生まれた母校が、玉川校長先生初め、草創期の諸先生方や地域の方々の御努力によって礎が築かれ、さらにその

後多くの関係者の方々の御努力によって、かくも立派な学校に成長発展したことは、我々卒業生にとってまことにうれしい限りである。深く感謝を捧げるとともに、我が母校が今後共、隆々発展することを祈ってやまない。

（福島県立保原高等学校勤務・福島市渡利字高谷12—4）



本校旧校舎裏の土提で

30年前の高校（南会西部）

農業科昭和29年卒業　酒　井　　淳

あと残すところ、今年79年もわずかとなった。大阪に来て20年とちょっと、早いものである。

来年でわが会社も創立30周年を迎える。そのための記念事業企画と特別番組の製作でもちきりのところに、わがふるさとの母校も33周年を迎えることになったので一文をとのこと、さて何を書こうかと考えたが、20数年前のことを今さら書いたところで、という気がしないでもない。校名も変わって実感もないうえに、校舎もほとんどその面影を残さないようになるらしい。しかし、あらためて思い出せばなつかしいことばかりである。それらの１コマ１コマを思い出すままに……。

○大宮分校のころ

私の学んだのは定時制の農業科。それも学校ができたばかりで、小学校の片すみに仮り住まいの授業。まとまったことができるはずがない。しかしその時に得たものは大きかった。今考えてみて特にそう思える。

この頃、まだ先生はこわいものという考え方があたりまえであったが、よく遊んだ友達という印象が強い。特に分校時代の竹内先生(東北大学)、篠崎先生とはよく遊んだし、よく教えていただいた。またこの頃の遊びは、草野球とソフトボールがその主なもので、暇があればやっていたことを思い出す。

この頃の毎日の生活は、名ばかりの寺小屋式の高校といったところであったが、学ぶことの楽しさ、大切さを、特に何もないところで「自分

で学ぶ」自習するということの真の意味を実感として、身につけさせ、教えていただいた時期であったと、つくづく思い出し感謝しているところである。

○本校と合併したあと

次に思い出すままに、その１コマを……。

● ２階の正面玄関上の小さな図書室。ここで語り合った将来の夢の数々。その一つ一つと同級生の顔がオーバーラップする。

● 進学のことなど話しながら、その合い間に教室の片すみで熱心に聞いたテネシーワルツ。１年先輩のＢさん。Ｉさん、その後いかがお過ごしやら……。

● 冬の間の寮生活。炊事当番で御飯をこげつかせてしまって、相棒のＳ君と二人、小さくなって真黒こげを食べた。その時の苦さを今でも思い出す。

● 寮生のＹ君、いつもラブロマンスの花を咲かせ、羨望の的(？)だったが、いまはいかがお過ごしでしょうか。

● 本校、分校対抗で勝ったあとの、寮の一室での打ち上げコンパ。優勝カップで酒を飲んだ(？)記憶があるが、やっぱりジュースだったろうか。

○今の私にとってのふるさと

遠い。たしかに物理的以上に遠くなりつつある。

春の園、弥生の野辺みれば、桜花咲き春がすみ、清き鎮守の小川、さらさらと流れ落ち、鳥の啼く声のどかに……。(六段)

きれいな山、川。たしかになつかしく、幼き日々の思い出がいっぱいあるところ。

○高校時代に得たもの

自分の道は自分で拓くしかないということ。

○忘れ得ぬ先生方

国語の玉川先生、生物の篠崎先生、数学の鈴木先生、物理の和田先生、数学・物理の関根先生、英語・古文、それから何でも小林先生、歴史の渡部先生、伊崎先生の人生論、一般社会・新聞部担当の星永二先生などなど、お元気にお過ごしのことと存じます。　(1979年師走)

(㈱毎日放送勤務・大阪府枚方市大字藤阪1461―2 藤阪ハイツD7―403)

本校・分校ニュース
春季野球大会開かる
本校優勝々
県大会出場選手者

当時の学校新聞

このごろ思うこと

普通科昭和29年卒業　渡　部　　淳

寒い冬でした。手足はかじかみ、唇も荒れてカサカサ。血が出るほどでした。ちょうど寄宿生でいた、小林の清子さんだったと覚えています。見るに見かねて、口紅を貸してくれました。これを塗るといくらかいいよ。リップクリームなんてシャレたものがなかった時代なのでしょうね。

翌朝、雪もいくらか小止みになっていました。寄宿舎から校舎へと渡る廊下で、体育の星先生と会いました。お早うございます。お早よう。ちょっと道場へ来い。朝稽古をつけてやる。私は身体も小さかったし、力もなかったし、たぶんそれだからでしょう、柔道が大好きでした。礼を交わし、さあ来いッ。ぶん投げられたこと、ぶん投げられたこと。へたばり切って、有難うございました。もう一丁来いッ。ようやく終わって帰り、顔を洗おうとふと鏡を見ると唇が真紅。ヒャアー忘れていた。これかあ、今日の稽古のキツかったのは。

なにか書けと言われると、あれやこれやのエピソードが飛び交い、収拾がつかないほどです。胸が痛む想いあり、楽しい想いあり。でもそんなのは後からしみじみ思うからで、そのド真中にいる時には迷いだらけ、傷だらけなどとものの歌で聞くとそれも含めて本音だなと、これまたしみじみ思ってしまうのです。

高校を卒業して26年。３人の子供のうち、上の子がこの４月で高２です。ちょうど私が星先生にぶん投げられていた年頃です。でも今の高校生の方が100倍もかわいそうです。服装だの規則だの、体罰、停学等々。先生と生徒が、取り締まり官と取り締まられ屋の関係でしかなくなっていい先生なんてテレビの中にしかいなくなったようです。ちょっと足を踏み外すことすら許されないみたいです。あと成績、成績、点数、順位。

小児病院という子供を対象とした職場にいる関係上、学校と子供の問題にぶつかることがとても多いのです。それと都市生活。車が恐しくて外に出せない。隣りから苦情が出るから、部屋の中でとびまわることもできない。夜泣きすら楽々させられない。お友達はテレビしかない。都市生活のひずみは全部子どもとか年寄りの所におしよせています。

そういう仕事での体験を通して、自分や自分の子どたちの生活のあり様を含めて、今のままでは破滅の方向しかないと絶望しているこのごろです。

南会津高校の現状はわかりませんが、先年、只見中学校での同窓会等で仲間から聞いたのでは、皆どんどんと都市部に出て行くのだそうですね。仕事がない、食えない。八方ふさがりの中でなお、地域に根をはった生き方を見い出していく方向はないものでしょうか。

ところで、小児病院に勤めて13年。昼に夕に私を養ってくれていた近くのおそば屋さんが、実は先輩の馬場五郎さんのお姉さんのお店だったとか。狭い世の中、そんなに競い合わないで、支えあって生きていきたいなあと、このごろそう思っています。

（国立小児病院勤務・東京都狛江市岩戸南3―3―3）

健康ランニングへの誘い

普通科昭和30年卒業　馬 場　康 昌

創立33周年、校舎改築落成本当におめでとうございます。このような記念すべき時にあたりまして、記念誌上を借りて皆様に健康ランニングについて語る機会を与えられましたことは、私にとってまことに楽しいことであります。

カーター大統領もしておられるジョギング（緩走）を始めてからすでに２年になり、大変健康によいことがわかりましたのでご紹介いたしたいと思います。

1. 運動の必要性・なぜランニングか？

所信がありますが、紙数の制限で全面カット。

2. ランニングの効果について

すばらしい効果がありますが、全部カット。

3. 楽しいランニングを一生続けよう

ランニングが続かないのは、ほとんどの場合スピードの出しすぎで、苦しみを味わうためと考えられます。楽しいランニングでなければ継続できないし、身体のためにもよくありません。日本では小学校時代から、走ることイコール競争の教育をうけていますので、たいていの人は「速く走れないから恥ずかしい。」とおっしゃる。速く走る必要性は全くないのです。

私は今、あるランニングクラブの一員として、週５日早朝（６時）に走っています。特に日曜日にはマラソニック（マラソンとピクニックの合成語）と言って、メンバー10数人と普段よりも遠くまで出かけます。

距離にして10～20キロ、時間にして50分～２時間半位ですが、ランニングよりもむしろ走りながらの楽しいおしゃべりの方に力が入っている状態です。早朝の清浄な空気を胸一杯に吸いこみ、健康の喜びをかみしめる時間でもあるわけです。このマラソニックには、美人の奥様方がいつも半数以上は参加されますから、一層楽しい雰囲気になるのかもしれません。それに何と言ってもランニング後の壮快な気分、満足感、牛乳のおいしさは格別です。楽しく走っている中に、早起き、睡眠時間の問題は解決するはずです。

4. 継続は力なり

以上のような無理のない楽しいランニングであれば一生続けられますし、自分でも驚くほどの力がつきます。私も最初は１キロがやっとでしたが、現在は週に70キロまで走れるようになりました。月金は休み、火水木は毎朝10キロ、土は25キロを２時間で、日曜はマラソニックで15キロの内訳です。次にレースの記録。青梅マラソンは53・54年共43分台（10キロの部）で完走。サンスポ千葉は65分（15キロ）で完走。その他10キロロードには10数回出場し、すべて完走するまでに力がつきました。また昨年はテムズ川やマイン川に沿っても走りましたが、これも日頃のランニングを楽しむ習慣があればこそできたことでしょう。人間の身体ってちょっとやそっとでは倒れないものだということも知りました。

5. 事故のないランニングについて

この原稿を書いている間にも、心臓の弱かった女子中学生が持続走で死亡したことが報ぜられました。また53年の福島での事故も記憶に新しいですね。ランニングを始める人は事故防止について充分研究して下さい。以下は私の短い経験と知識をまとめたものですので、参考にして下さい。

(1)スピードの上げすぎは自殺行為

心臓が少し弱い人や高血圧の人には、1キロメートルのジョギングよりも、100メートルの全力疾走の方がはるかに危険であると言われています。これは、たとえ瞬間的であっても、血圧値が各人の最大許容血圧を越えることは危険だということで、一般の健康人も最大酸素摂取量の6～7割程度で走れと言われています。しかし、この最大……なるものはわかりませんから、一般の健康な人は、楽しくおしゃべりできるスピードを「めやす」とすれば、ほとんど問題はありません。

(2)急に距離をのばすな

1、3、5キロメートルという具合いに徐々に月日をかけて距離を多くしていくこと。病気あがりの人や、前述の高血圧の人などは医師の指示に従い、歩くことから始めた方がよいでしょう。急に距離をのばすと疲労するばかりでなく、足の故障を必ずひき起こします。

(3)レースへの出場は慎重に

健康の増進が目的ならレース出場は邪道であるという人もいます。特に暑い時期のレース出場は見合わせることです。私は11月から翌年4月までのレースに数回でますが、それ以外の月は専らマイペースのジョギングだけです。やはりレースに出ると、どうしても競争になってしまい、相当に苦しいランニングをすることになります。

(4)健康診断をしてから始めよう

ランニングを始める前に精密な健診を受けることです。私は会社のミニコンを使った総合システム（いわゆる人間ドック）による健診を年1回受けています。

(5)夏季は涼しい朝の間に走り、距離も半分位におとします。

(6)最後につけ加えますと、私はランニングの専門家でも医者でもありませんので、私の記事を読んで走り始めて事故を起こされても責任は負いかねます。ランニングを始める前に書籍等で充分研究し、自分に無理のない方法で、自分の責任において楽しいランニングを始めて下さい。いつの日かいっしょに楽しいランニングができることを念じつつ筆をおきます。

（富士通ＫＫ勤務・神奈川県川崎市多摩区下麻生832—11）

昭和29年度卒業生が寄贈した時計、今も新校舎で時を刻み続けている。

今だから話します

普通科昭和32年卒業　森　　カ　ヨ

創立33周年、おめでとうございます。この記念すべき行事の一環に、こうして参加させていただけますことは大変光栄に存じますが、なぜ事務局が私ごとき者に「書け」と命じられたのか考えてみたのですが、多分私が通学生と寮生と両方の生活経験を持っているからだろうと解釈いたしました。同級生の皆様どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、可愛らしいこじんまりした校舎とせまい校庭、そしてオンボロ体育館にオンボロ寮の中で過ごした私の学生生活には、それはそれは数えきれないほどの思い出が山のようにつまっております。その中の２、３書かせていただきます。

私共のクラスには、今でも尊敬している方がおられまして、この方はまるで私と正反対、色の白いおとなしい秀才で決して自分を見失わず、それでいて全然出しゃばりでなく、そのうえ最良なことは、他人の悪口や陰口を絶対に言わないことでした。人間ついつい自分の悪い所をかばうために、他人をとやかく言いたがるものですが、この方は決してそういうことのない、自分と言う者を実によくわきまえた方でした。反対に私は学校でも寮でも、自分の理想とはおよそかけ離れた馬鹿げた事ばかりしていましたから、彼女がとても偉く見えました。その彼女、なんと卒業後、クラス１番の秀才君と結ばれたのですから！彼、学生時代からちゃんと見てたんですね。

次にあれは１年か２年の時だったと思います。隣の席にいた女の子が、彼女がお手伝いをしていた下宿屋でトラブルを起こしました。全面的に彼女の言う事だけを信じた私は、彼女の弁解のために親友に頼んでいっしょに下宿屋までついて来てもらい、そこのおばさんに話をしに行ったのです。後でわかった事ですが、彼女の方が悪かったのです。結局、彼女、学校をやめました。しかし彼女を信じていた私は彼女の家までたずねたのです。会えませんでした。ものすごい挫折感を味わいました。

寮生活は楽しいものでした。家が遠いため無理にお願いして夏も寮に置いていただいたので、先生方に大変御迷惑をかけました。小林(栄)先生、小松先生等が交代で泊まって下さいました。皆がその当時流行していた歌を歌って楽しむのです。ところが、部屋で練習している時は大変(？)うまく歌えるのに、いざ本番になると駄目なんですね。あがってしまって。自分のふがいなさに内心がっかりしたものです。その他実にいろいろありました。定期試験の最中に音楽室で小説を読んでいて大田原先生に叱られたり、寒い冬、受験のためのピアノ練習の折、江畑先生の弾かれる「銀波」の曲にウットリしてしまったり。

小林（栄）先生、柴田先生、小松先生、江畑先生、蓬田先生、野尻先生、大田原先生、山次先生、谷津先生、小林（勇）先生、憶えていて下さいますか。お懐しゅうございます。御健勝お祈りしております。

（主婦・神奈川県中郡二宮町二宮98）

大阪の空の下で

普通科昭和33年卒業　斎藤　英二

もう22年がたつのだろうか。思えば長くそして短い年月である。22年！それは私が雪に埋もれた南会西部高校を卒業してからの年月である。

……私が高校を卒業した年に彼等は生まれたのだろうか……そんなことを考えながら、昭和33年に生まれたという同僚の顔をまじまじながめて一人感慨にふける。

母校南会津高校が生まれて33年になるという。私はその年月に取りたてて感慨を持たない。しかし、私たちが卒業してから過ぎ去った22年の歳月に、言い知れぬ感慨がよぎる。

――もうそんなにたつのだろうか

卒業してから今日まで、それなりに頑張ってきたつもりではあるが、後に残った足跡の薄さに歳月の早さをねたむ。見れば頭も薄くなり、白いものも増して、お腹も出はじめた。同級生も同じように変っているとしたら、道で会って顔を思い出せるか自信もない。

しかし、22年前、思えば良い時代であった。第一、南会西部高校に入学できる者は本当に恵まれた者だけで、一つの中学から５、６人あったかなかったかである。また、入ってしまえばテストや受験勉強などに青春をすり減らすことなく、適当にやっていればなんとか卒業することができた。したがって、深い山、深い雪、深い草の中で夢を夢み、恋を恋し（私はいつも恋をして、６名の方に延 200通余の恋文を書いたりはしたが）ながら３年間を楽しく過ごすことができた。同級生のみんなも、受験勉強に追われ心の安らぐ暇さえない現在の高校生をみたら、私たちが送った高校生活をなつかしむだろう。

私は今、南会津の地から遠く離れた大阪の空の下で働いている。故郷は遠くなればなるほどなつかしいし、母校の存在も年月がたつほど心の中で重みを増していく。南会津高校が最終学歴になる自分には、一層それが強いのかもしれない。高校に通った３年間、勉強はまったくしなかったし、スポーツも課外活動もこれということは何もせずに過ごした自分である。それでいてこの22年間挫折を繰り返すたびに、故郷を思い、南会津高校のことを思い出して耐えた。

教養も体力も人に誇れるものはないけれど、厳しく貧しい自然の中で学んだ生きるということ、そして体を寄せ合って生きた心のぬくもり。“人は心だ！”というのなら私は負けないし、絶対負けてはいけないと自分に言い聞かせながら今日まできた。

南会津高校ではぐくんだその心と、当時の後藤次郎校長が残してくれた“一生が自己修養の場”であるという言葉は、今後の自分の生きざまに少なからぬ支えをしてくれることを私は疑わない。

（養命酒製造㈱大阪支店勤務・大阪府枚方市西田宮町1－11－103）

胸をよぎるもの

普通科昭和34年卒業　小野田　　萬

昨夏、卒業後20年目にして初めて同級会に出席してみた。前日までは不参加のつもりでいたが、何かにせかされる思いがして急いで駆けつけた。同窓会名簿に載った五十嵐ユキエさんの「思い出」という文章に酔わされたためでもあったろう。それは多くの友の絶賛を受け、名文の誉れも高く、人を遠くへいざなうものがあった。久し振りに蓬田先生のお元気な姿も拝見でき、友と久闊を叙することもできた。行って本当によかったと思う。

会の始まる前、母校の前にひとり立ってみた。あたりはすっかり変わってしまい、往事をしのぶものは何もない。それでもやはり懐かしく、昔のあれこれが遠い海鳴りを聞くような思いで蘇えってくる。記念に校門と時習寮の跡とおぼしき所から小石を二つ拾い、我が家の庭に持ち帰った。それを手にするとき、20年前の懐しい先生方や級友の顔が彷彿と浮かんでは消え、伊南川の川瀬の音や緑なす山々を渡る風の音、吹雪の音が聞こえてくる。

卒業後は特に故郷や母校に対して懐旧の情をいだくこともなく過ごした。むしろ何もかも忘れたくさえ思ったこともある。若い時代にあっては身近なものを全て払拭し、新生の人生を求めるものだという。それは感傷に陥りがちな過去にとらわれるより、未知の人生に立ち向かっていく思いが優るからであろう。20年が過ぎた。年と共に時折ふと胸をよぎるものがある。夜静かに杯を傾けるときなど、茫漠として記憶の彼方へ消えさろうとする青春時代が、驚くほどの鮮明さで蘇えってきては胸をうつ。

いま当時を思うと、限りない愛惜の念と、いやし難い痛恨の思いが交差しては心を揺さぶる。成すべきことを成し得ず、果たすべきことを果たし得なかった時代。濁りも知らぬ純真さで一人一人がひたむきに生きた時代。互いに傷つけ、傷つきあった時代。共に語り、悩み、そして風のように過ぎ去った日々。今にして思えば光るような毎日だった。去ってしまえばいとおしく、また無念でもある。誰もが一度はそう思う時があるにちがいない。

蓬田先生との３年間は誰もが忘れ得ぬ３年間であるはずだ。それは「曰く。言い誰し。」で語るすべを知らない。ただ、先生のあの鮮烈さが、我々一人一人の胸から消えることがないということだけは確かに言えよう。また、昭和33年９月18日の台風もすさまじく、見るも無惨な母校の姿に茫然としたものだ。それは自然の与えた厳しい試練でもあった。いろんな事のあった３年間であるが、この頃を境にして一人一人が確実に何かをつかみ、道は違っていてもそれぞれの目指す人生の目標に向かってスタートをきったように思う。

不思議なもので、忘れたつもりでも青春時代に得たものは原体験となって色濃く体内に残り、人の人生を決定して行くような気がする。私の場合、自分の道はあの３年間で決まったといってよいだろう。甘美な陶酔の苦汁にみちた思いと、そして何よりも南会西部そのものと、母校での３年間に得たものは失いたくないという思いは、常にどこかにあったように思う。形は違っていても、みなそれと似た思いをどこかにいだき続けているのではなかろうか。

時がたつにつれ記憶もさだかではなくなる。私は多くを知らないし、また思い出せない。人それぞれの思いがあろう。いまはただ黙して20年

前に思いをこらす事の方が何ものにもまさるような気がする。これからもその余韻だけは大切にしていきたい。

（静岡県立富士東高等学校勤務・静岡県富士市富士見台5—4—11）

行司役馬場萬、投げられ役五十嵐勝司、投げ役横山勝介、
蓬田ティーチャーの演出？　台風21号の後でした。

心に残っている事

普通科昭和36年卒業　馬場　久一

昭和32年から３年間、私の高校生活であった。１年・２年の担任が高橋薫先生（先年テレビに出ておられ、なつかしかった）。そして３年の時の担任が白石進先生。卒業して20年もたっているが、２人の先生は今はどうしておられるのか、一度お会いしたいものである。

私にとって二つの事が今なお心に残っている。昭和33・34年頃といえば、通学は自転車。家から学校まで12㎞。それに現在のように舗装道路ではなくジャリ道。朝７時に家を出て、帰ってくるのは夕方暗くなってからであった。特に私は陸上クラブに入っていたから、校門を出る頃から暗くなっていた。でも友達と話しながらの帰り道は、それほどきついとも思わず過ごしてきたから不思議である。しかし、11月寒くなってからの通学は大変つらかった記憶がある。吐く息は白く、田んぼに氷が張り、霜柱をふみしめながら通学したあの頃は今になってなつかしい。12㎞の自転車通学が後に私の人生にプラスになった事は確かである。

クラブ活動は陸上競技クラブであった。今考えると勉強よりもクラブ活動に熱中していた感がある。１年生からずっと３年間陸上クラブで過ごしたのも、子供が何か期するものがあったのかもしれない。洪水でグラウンドが流され、川原になった校庭を走り続けた事。学校から下山まで走り、石の階段登りのきつかったこと。雨の降った日は体育館で柔軟体操。先輩にしごかれ、何度も陸上クラブをやめようと思った事か。しかし、つらい事ばかりでなく楽しい事もあった。その当時、県体に出場で

きるのは陸上クラブだけであった（３年の時はハンドボールクラブも出場したが)。県体に出場してもほとんどの人は予選で失格。それでも出場する事に誇りと喜びを感じていたのである。

高校時代をふり返えって心に残っていること。それは自転車通学とクラブ活動の二つである。共につらかった事が多かったが、高校時代にスポーツに熱中したその事から20年たった今なお、陸上競技でなくても、野球に、テニスに、スキーにとスポーツを愛し楽しむ精神が植えつけられているのだと思う。最後に一つ。高橋先生、白石先生を囲んで69人全員そろって同級会をやってみたい。

（村議会議員・伊南村大字青柳）

水害による出来事

普通科昭和37年卒業　馬 場　司 夫

創立33周年を迎えるにあたり、母校も改築され改築落成記念及び同行事に日夜御努力されている方々に対し深く感謝の意を表したいと思います。改築が始まり４年目を迎え、立派な母校が雄々しくそびえ立つ姿、また周辺の環境が整備されてゆくのを日々目にする時、先輩、同輩、後輩共々、青春の１ページを過ごし、また過ごしている君共々、いま胸を張って立派さを自慢したい一念にかられるのである。

それも我々が入学した時は、先輩達の目の前であの学び舎が1958年の台風21号により、寮、体育館、校舎の一部が流失した次年度である。体育館はなく、入学式は特別教室という名の場所であった。廊下に机、イスがうず高く積みあげられ、すぐさまこの場所が教室に早変わりするのだなと思いこませるには充分であった。でも、校長先生、先輩の校舎流失の思い出をよそに力強い励ましの言葉は、我々は頑張らねばと思う気持ちにさせてくれた事はたしかである。が、特別教室は我々新入生２クラスの教室である。式終了後、机、イスを入れ、中仕切りをして教室のでき上がり。全校生の集会のある都度、机、イスの出し入れをせねばならない場所でもあったのである。

外に目を転じれば大きな石がゴロゴロしている運動場、体育の時間ともなれば子供達の砂場での遊び同様、砂場での運動である。これが幸なのか不幸なのか脳裏に浮かんでくる。

また入学間もない８月、我々同級生が１年間母校を離れなければなら

ない決定的な台風７号が、またも校舎を襲ったのである。校舎の前は腰までつかる川と化し、校舎に入るのも建設会社のブルドーザーで入った覚えがある。内部は南側職員室が一番ひどく、床が天井板に届かんばかりの状態である。この様な中、一生懸命先輩共々清掃し、ドロと水との戦いが続けられ、水害時の鼻をつくあの何ともいえない臭気は今も忘れることはできない。

この決定的な台風で我々１年生は不安を胸に明和校舎への学び舎の変更である。我々の不安をよそに南郷校舎の長髪厳禁の中で、明和校舎の長髪の人々、自分の校舎でなく学ぶ我ら。よそもの扱いされるのではないかとの不安の中でコワイナァーと思った日々もあったが、通学不能に対し我々は下宿、寮生活と明和校舎の同級生、先輩と心ふれあう交流ができ、後のロマンス花咲く話もチラホラでるような交流ができ、１年間を過ごさせていただいたのである。

先生は南郷校舎と明和校舎の行ったり来たりの教壇であり、我々は思い出多い１年であったが、今考えると先生方の苦労には今になってしみじみ頭が下がる思いである。

一方、たび重なる水害によって学校長の南郷校舎のみきりによる校長不在事件、同時に只見校舎との分離独立等々、水害によってもたらされたエピソードは数知れなく続くが、このような中で学んだ校舎が、今立派にできあがり33周年の歴史を刻み、多くの卒業生を世に送り出してきたことに対し深く感銘するのである。

今、立派な校舎で学ぶ君達よ、また今後入学する者達よ、我が子よ、南会津高校の歴史と立派な学び舎に恥じることなく、勉学、スポーツにと青春の１ページを悔いることなく有意義に送られんことと共に、南会津高校発展を期待してやみません。

後筆

今回の寄稿で書きなれん私はピンチヒッターとして寄稿したが、同期生諸君、高校でのエピソードはいろいろとあると思うが、私なりに断片的に書いた。自分の職場の同僚、また家庭で記念誌を片手に思い出を語ってほしいものである。

（山口郵便局勤務・南郷村大字山口）

堤防決壊し，濁流と化した校舎周辺

南会津高と私と兄弟と先生

普通科昭和38年卒業　遠　藤　　源

私には兄弟が８人いる。勿論全部健在で、構成は男７女１の割合である。その内南会津高を卒業したのは５人。その他２人は中途で転退校した。長兄は入学こそしなかったが、１番門を出入りした数が多いのではなかろうかと思う。商売が商売だけに、私など中学生時代から兄の手伝いで出入りしたものだ。卒業生名簿の中で１つの家族兄弟では、私の兄弟が１番多いのではなかろうか。そしてこれから先、姪や甥、従兄等数えあげたら20人以上になるのでは、と考えると楽しくなる。

今回は、33周年に際して原稿をとの依頼でありましたので、思いつくまま知っている先生方の話を書いてみようと考えます。兄姉から聞いた伝説的なものも一緒に書き綴ってみます。書かれる先生方には失礼とは思いますが御了承下さい。

姉の話の中で「ヨモギダ」先生の話がよく出ます。数学の教師であったらしく、女生徒のアコガレの的であったのかナァなどと思います。その次に出てくるのが「……リキオ」と覚えていますが、この先生は先生同士のロマンス説があったようです。

兄の時代の先生の中で特筆すべき方がおられます。あだなが「赤ベコ」といって、私が配達に行くと首だけ前の方に出ていて、振り振り歩く大柄な先生で、名前は確か「大久保教頭」。今考えてもうまくつけたナァと感心しています。その頃の兄の話では傑作がありました。世界史かなにかの産業の話で「アメリカは大国だ。造っている車は全部外車である。」と。私など中学生だったので「なるほど大国だ。」などと思っていたらしい。考えてみれば日本だって外国からみれば、造っている車は全部外車ではないか。平和な田舎の授業風景であったろう。

先生の思い出の中で、私の家に下宿された「高橋先生」は女みたいな名前で、今でいうカッコイイ先生でした。この先生、新任で誠に快活明朗でセンスのいい先生でありました。ただ、田植え時期に手伝いと称して、背広を着て参加されたのにはまいりました。作業着なんてものはサラリーマンはもっていないので、一番悪い背広を着られたことでしょうが、マァビックラこいた次第です。また、酒に酔うと十八番「雪の渡り鳥」を踊られたり、覚えかけの手品をみせられたり、私の家族の中に本当に溶けこまれた思い出多い先生であります。兄達と一緒にスキーに出かけ、あわや遭難になりかけたりされまして心配もいたしました。

何人かの先生が下宿されましたが、一人一人の方についてはまたの機会にして、私の時代の先生を一人。女の先生、万年先生。この先生はキビシカッタ。音楽の試験でダルマの絵を書いて「手も足も出ない」と書いたら、みごと０点（ユーモアがわかっていない）。しかたがないから自分であだ名をつけて「起き上がり小法師」などと後姿をニラミつけた。しかし、先生は上から下まで楕円形のお尻を振り振り廊下を歩いていかれた。懐かしいものです。

谷川先生と赤インキの話。藤井先生の赤いネクタイ。渡部先生のロマンス。この次にはもっともっと書いてみたい。

（㈱保志勤務・会津若松市大戸町下雨屋101）

ふるさとの山河のほかに

普通科昭和39年卒業　目黒　広一

1968年３月31日だったと思う。南会津高校を卒業して６年たっていた。私は南会津をあとにして、神奈川県湘南地方の海辺の都市に向かっていた。新しい仕事、新しい生活への期待と不安で胸が詰まりそうだった。新聞は60年代後半に噴き出した大学闘争の記事で埋まっていた。駅売店でふと手にした雑誌が確か「未来研究」とかいうものだった。70年代を目前にして、世の中がそうであったように、私にも未来が始まったばかりだった。時代の潮流に乗って私は戸数20戸たらずの山村から人口20万の都市に出たのである。

あれから10年という歳月が過ぎた。高度経済成長の神話が崩れ、未来論がすたれ、混迷の時代の今はまっただ中。近代化の意味が問われている転換期でもある。

そうした中で、私も今、私個人にとっての近代化の意味を、言い換えれば、南会津を出て都市に住みついたこの10年とは何であったのか、それを問い返えしている。

私は昭和39年に南会津高校を卒業すると、村の土地改良区の事務員として勤務することになった。給料が 8,500円だった。私を高校３年間下宿させるのは、日雇い労働者である父の収入では容易でなかった。それだから卒業して家から通勤するようになった時の親の喜びは計りがたいものがあった。

しかし私は親の反対をおして３ヵ月でそこを退職した。峠の向こうには何か素晴らしい未来があるように思えてならなかった。とにかく一度あの山の向こう側に出てみようと夢みていたのである。ところがそうはとんやがおろさず、私はそれから６年間都市に出ることもなく、南会津で不本意な生活を送ることになった。簡単に言ってしまえば、近辺の小中学校の代用教員をしながら、通信教育で教員免許取得のための学習をしていたのである。この期間は私には重かった。暗い時代だったとも言える。しかし、私はこの経験によって人間に対する目、教育に対する目、あるいは社会に対する目を見開かされたと思っている。

そうこうしていて神奈川県の教員試験に合格し、1968年３月の旅立ちということになった。そのあと２年間小学校で勤務し、１年間東京で大学生活を送り現在に至っている。やや面映ゆいが、紆余曲折があり決して楽な青春ではなかった。けれども今そのことを愉快に思う。

こうした経験の中で、在学当時から強かった文学への関心が余計に増幅されていった。３年の時の担任だった須田明先生が年度賞を受けられたことのある「文芸広場」という雑誌に、一昨年度拙作「根雪が降れば」が掲載された。そして79年神奈川県勤労者文芸コンクール小説部門で「赤蛙」が２席になった。須田先生との縁の不思議さもさることながら、私と一緒に渡部九重さん宅に下宿なさっていた広岡先生など、多くの先生方から文学の下地、文学の世界への窓を開いてもらったことを今懐かしくしみじみと思い出す。

先日、詩人の小野十三郎氏に色紙を書いていただいた。

ふるさとの／山河のほかに／ふるさとを索めて／歩む／と。

この暮れ、中山峠の蛇行した道で、雪化粧した山頂をのんびり眺めながら、私は、私にとってふるさとの山河のほかのふるさとは何だろう、と考えた。それが私自身のこの10年間の近代化への問いでもある。

峠から眺める山頂の景観は永遠のもののように変わらない。ふるさと

の山河のほかのふるさとを探しての10年だったが、この山河以上のものがほんとうにあるのだろうか。そう思うほどふるさとの山河は崇高である。

（平塚市立金目小学校勤務・神奈川県平塚市浅間町2―14）

高校　津南会

全校生徒首の体育館

建築中の教室

昭和38年６月25日発行の学校新聞

高校の思い出

普通科昭和40年卒業　渡部　嘉永

１年の時は確か目黒嘉祐校長であり、２年３年とは角田祥治校長であったと思う。角田校長は非常にまめな性格で働きものであった。学校の正面玄関前に大きな庭木を植えられたり、校舎のまわりのポプラの木も目黒校長から角田校長と引き続き植えられたものと思う。

とにかく私たちもポプラを植えた。植える時校舎周辺は砂利ばかりで土を掘るのに骨がおれた。校舎を囲む大きな木がないので殺風景であり、木があればその成長と共に学校の歴史がわかり、木が古くなればその頃には学校の貫ろくもついてくる。ポプラはアカシヤと違って目にみえて成長して良かった。私達が卒業しても教師が代わっても、ポプラはここで成長するだろう。また、校門も角田校長の時に新しくされたと思う。校庭の端にはよく花も植えられ、黄色の花で、今思うとマリーゴールドとかいう花だったかもしれない。

朝とか夕方、そして休みの日など校長先生は、普段着で夫婦仲良く教員住宅のまわりの畑で種々の野菜作りをされた。おそらく肥料も自ら天秤かつぎを行なわれたと思われる。ある朝早く、薬草さがしなのか散歩なのか、着物の裾をはしょって、農道などを夫婦で歩かれて、神楽ぶちに間違われるほどの気軽な姿であったらしい。ワラビ採り、山菜採りなど山も先生の行動範囲であった。だから山間農村部での生活は生命感あふれるものであったにちがいない。普段の身なりは質素であって、百姓おやじを思わせるものがあった。

座右銘は晴耕雨読か勤勉節約で、愛読書は二宮尊徳か宮沢賢治ではないかと思わせるほどだ。校長先生には直接教科の指導をうけないから校長などどうでもよかったのだが、なぜか印象に残っている。今になればなかなか偉い校長であったと思う。

次に私達のクラブ活動で最も印象深いものは、やはりハンドボールクラブであろう。毎年何度も県内あちこちに試合に出場できた最強のクラブであった。壮行会で全校生徒がその健闘を願ったものだ。このクラブは私達が卒業しても、伝統的にその後ずっと活躍して良い成績をおさめたことをきいた。ファイトある先生が生徒をどんどん引っ張って、これまでにされたことはあきらかであったが、部員も一体となって厳しい練習をしのぎ、技術とたくましさを備えたためだと思う。

今想像するよに、テレビ俳優の中村雅俊の青春学園物語のようだったと思うんだが。いつ洗ったものと思わせる土色に染まったユニホームが印象的であった。ハンドばかりでなく、野球青春の人もそうであったろうし、他のクラブも一生懸命やった者は、本当の良い青春を過ごし、一生の思い出を持っている。

それから他に覚えていると言えば、昭和39年の春だったか、伊南村古町の大火である。多くの同級生や上級生、下級生の人達の家が焼けてしまった。全校生徒で古町へ行き、どの程度手伝いできたかはわからないが、同級生の家の焼けあとだけを、その場面だけを記憶している。焼かれた友人達には決して忘れることのできない大変なできごとだった。

高校時代は一人一人いろいろなできごとを思い浮かべると思う。友達同志のこと、ちょっとしたことで先生や先輩に注意されたり、喧嘩したり、成績が悪くて特別によばれたり、また、つまらないことだが、新潟地震も高校の時だったと思う。教室の床がローラースケートのようで、その揺れが衝撃的であったため覚えている。とにかく３年間あっという間に過ぎた。南会津高校は木造から鉄筋コンクリート造になった。先生方もすべて代わった。思い出馴染んだ校舎はない。しかし南会津高校は我が母校であることに変わりはない。

（会津名倉堂整骨院勤務・田島町中町甲3936）

南会津高校新聞　第42号

南会津高校新聞

山里の静かな休み

旅・バイト・学習

……四十日の思い出……

夏休み特集

真夏の太陽を

当時の学校新聞（昭和39年９月発行）

私の高校時代

普通科昭和42年卒業　菊地　春一

私が南会高へ入学したのは昭和39年だった。オリエンテーションで英語の試験をとられた。高校ってやはり中学とは違うのだなと思った。対面式、クラブ紹介、いかめしい髭顔の上級生、何もかも興味深く感じられた。

寮生活も楽しい思い出だ。入寮した次の朝、上級生に呼び出され、態度が悪いと２・３発見舞われた。上級生の女性は優しかった。弁当洗ってもらって、夜食をつくってもらったり、寮自慢の“豆みそ”の味は今でも忘れられない。でも弁当のおかずの“三海漬”の辛かったこと、涙をポロポロ流しながら食べた。寮の分散会は涙、涙、涙。同じ釜の飯を食い、風呂に入り背中を流してもらい、頭まで洗ってもらった友達は忘れられない。あれからもう15年、みんな元気でいるだろうか。

２年になると組替えがあった。16歳になるとバイクの免許も取れた。校舎のまわりには植木がいっぱいあった。角田校長が時折植木に下肥をまく、その臭いこと、これには閉口した。修学旅行、関西への旅、祇園をよぎる桜月夜、晶子のようにはいかない。腹へった、飯足りない！佐久間先生もオロオロ。

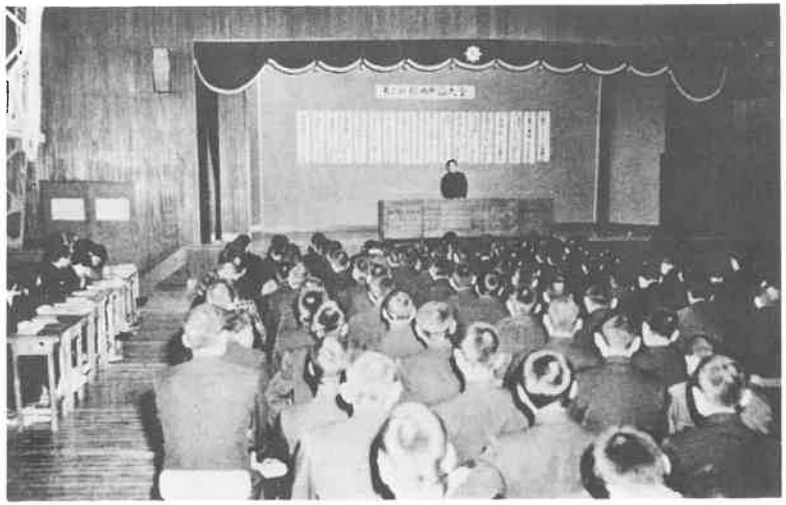
３年になると、夏休みの補習。これは楽しかった。公務員試験。これは地獄。農業技術職員というのを受験した。専門試験、解けたのは60問中１問だけ。○×式だから、後は鉛筆をバタン、バタン。桃の木の消毒剤は？そんなの知るか！試験から帰ると学校が水害に見舞われていた。片貝の渡部宅から耕運機を借りて後かたづけをした。その時、流木の中に蜂がいて手をチクリ、痛かった。バレンタインデーにチョコレートをもらった。宮川屋に泊まっていた悪友達が中味をたいらげて、外箱だけ私によこした。

こうして振り返って見ると、人生の一番楽しい時が高校時代かもしれない。

今、南会高は新校舎となり、雨もりのする教室などなかろう。80年代は地方の時代。また、東北の時代とも言われる。この雪国の学校で培われた粘り強さ、不屈の闘魂は、将来世に出てきっと役立つであろう。

今でも高校時代の友達が集まって酒を飲み歌う歌。そこには校歌があり、寮歌がある。

（吉野建設勤務・只見町大字梁取）



あゝ迷演説かな（弁論大会）

ジ　ン　ク　ス

普通科昭和44年卒業　馬 場　正 悦

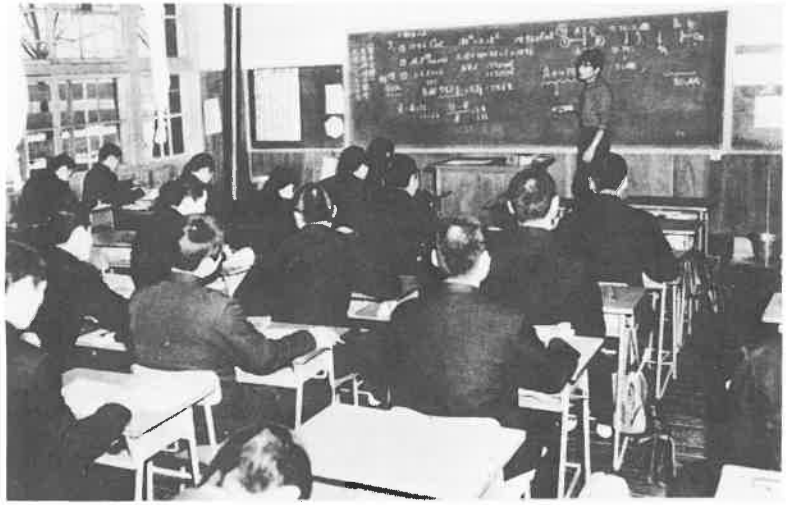
みなさんジンクスという言葉を知っておられるでしょう。私はこれまでに２度程ジンクスを体験しております。

私は昭和44年８月に小林郵便局に就職しましたが、10月に仙台の研修所に約１ヵ月入所させられました。研修生活は、あちこちの郵便局からピッカピッカの新入生が、大勢集まって合宿生活をさせられるのですから、結構楽しい研修を送ることができましたが、研修生活の中盤頃、研修所の先輩に「この研修所では研修生は必ずカゼをひくことになっているよ。」と教えられた私は、カゼをひかないようにカゼ薬など買ってきて注意したのですが、３日程たってついにカゼをひいて１日寝こんでしまいました。この出来事は、私が体験した２つ目のジンクスです。

最初の体験は、南会津高校の卒業生ならほとんど知っていることとは思いますが、「南会津高校生は入学したら卒業するまでに必ず水害にあう。」というジンクスです。このジンクスも最近は提防なども良くなり通用しなくなったようですが、私が入学した昭和41年にはものすごい台風が襲来し、我が母校は見るも無残な姿になったのでした。

台風に見舞われた朝、私は母校へかけつけましたが、先輩や同級生も大勢かけつけており、何人かで無残に荒らされたグランドや校舎をひとまわり見て歩きましたが、何とも言われぬ気持ちでした。最後に寮の方へ行ったら、トイレが水びたしになってあふれ出しており、当宿でいた先生が一生懸命にバケツで汲み出しておられるところでしたので、私と何人かの生徒が手伝って、バケツでトイレの汲み出しをするはめになってしまいましたが、このことは高校時代の思い出として一生忘れられないことです。

（山口郵便局勤務・南郷村大字鴇巣）



女っコえねえ授業はつまんねえなー（化学の授業）

我が母校は……

普通科昭和45年卒業　馬 場　孝 法

仕事の手を休め、腰をのばしながら毎日のように見る南会津高校。それは鹿水川が流れ、前庭には白樺と芝生が植えられ、吹雪の日には雪が吹き込むあの木造の校舎ではなく、新築された校舎。我が母校とは思えない校舎である。そういえば卒業から10年、隣のあの子がもう高校生か、あの子もかと人の成長をみて時の立つのを知る今日このごろである。

先輩を恐れ、あいさつを忘れないようにとだけ気をつけた日々や、クラブがすべてという日々。クラブといえば自然科学。山内先生（当時の鬼軍曹）のもと、夏休みには自転車と耕うん機に荷を積んで湯の花へキャンプ。食料の米が少なくなり、インスタントラーメン１個を持って旧中山峠の頂上まで自転車で乗り上げ、植物の生育調査をしては峠を一気に乗り降りる。楽しさより苦しみの多いキャンプだった。しかし今では舘岩を通るたびになつかしく思い出す。

冬にはストーブを囲んで山内軍曹の岩波新書「栽培植物と農耕の起源」による講義。時にはみんなで焼肉を、うどんを食べながらのクラブだった。冬の晴れ間は飛行機を飛ばし、失敗続きで全校生徒からバカにされながらも何とか成功。しかし、リモコンのない手作りの飛行機は「俺の行き先は俺にもわからん」とばかり、山のかなたへ燃料の続く限り飛んで行く。それを作った人間は空を見上げて走って追いかける。かくして飛行に成功したものは１機も残らない事となった。

子供もでき毎日の生活に追われている現在から見ると、なんと平和な時だったろう。

卒業後農業をやるんだと決めた時から、高校生活も変わり、今という時を自分で後悔しないように生きようと思い実行してみたが、これが大変。勉強は学校のみとし家ではしないこととしたら、英語等はただちにテストに現われ、さらに成績表は赤も入った２色刷りとなった。今でも当時の先生に会うたびに言われるような実力テストの結果もあり、英語の先生には卒業後再会した時、「俺の時間は『わかりません』ばかり、俺に恨みでもあったのか。」と言われてしまった。この時は、ほんとうにすみませんでしたと後悔した。その先生にも若松で不意に話しかけられたりして、なつかしい思い出になった。

今思うに、当時は当時なりに思い通り生きる事ができたのではないかと思う。

苦しかった駅伝、クラブ活動、先生に隠れて知った酒の味、夜遅くまで遊び過ぎての１枚の始末書。家の手伝いをしなくても勉強だクラブだと言えば許してもらえ、親のスネをかじりながらの自由な３年間であった。高校へ行けたことを感謝している今である。

現在の生徒には新しい校舎が母校となるが、自分にとっては、応援団が地球整備と言われながら造った芝生の前庭であり、薬品のにおいのするクラブ室がある木造の校舎である。ある土曜日、クラスで登った明神岳の頂上から見た母校が忘れられない。

最後に、我が同級生でありながら、現在まで４人もの人が亡くなっていることは残念でならない。できるなら全員でこの時を迎えたかった。

（農業・南郷村大字界）

生きること

普通科昭和46年卒業　沢井　順子

高校を卒業して早や10年近くなるわけです。私、27歳、46年卒業の者です。

高校を卒業して、芝居をするために東京へ出ました。そして今まで、どうにか大劇場にも出ることが出き、５年舞台を踏んできました。５年たち、今新たに自立演劇を志し、京都に引越してきたばかり、という状態でペンをとっています。

プロをやめることに決心し、京都行きを決めた時、ちょうど南郷村から記念誌にのせる寄稿の連絡が入った訳です。そこで、ちょっとした自分の記録として、又、自分に再度納得させるために、自分勝手な文章になりますが、ここに記してみたいと思います。

私は、いわゆる商業演劇と言われている分野で仕事をしてきました。他にもありますが多くはという意味です。５年も舞台に立ちながら、自分のやりたい芝居の方向みたいなものを見失ってしまいました。ようやくそれが具体的にはっきりしてきて、自分の生き方みたいなものを決めることができました。あまりに時間がかかったように思いますが、私にとっては、これだけの時間が必要だったのだとしか言いようがありません。

芝居というものが本当にこれでいいのだろうか、と常に疑問でした。自分はどんな芝居をしたいのか……。それが今、小さいながらも社会との接点を考えながら、人が何か感動を受けるような、お客とじかに接しあえるような、そういう芝居を創ってゆきたいと……。そして、そういうものが少しでもありそうな京都の劇団と一緒にやってゆこうと決めたのです。

京都では小さいながらも「劇団自立の会」というのを４年前結成しました。これは、劇団養成所時代の仲間が主に興したのですが、私も創立メンバーの一人に入ります。４年前プロの仕事をしつつ、一方で京都の劇団の仕事をしてきました。この劇団の方針としては、職を持っていること、つまり芝居だけではお金になりませんから、生活を支える仕事を他に持つこと、ということです。芝居に真剣に取り組み、今、除々に京都に根をおろしつつある劇団です。

自分が京都に決めたこと。それは私の人生の中のひとつの冒険です。新たな出発点です。

人生、様々な生き方があっていいと思います。一つ所に根をはり実を成すか……。私は、その場その時を納得し、十分に生きること、そう考えています。一生京都にいるのか、それもわかりません。ただ、自分の価値感だけは変わらず、ある方向性を失わなければ、場所を変えようと、人間は伸びてゆくだろうと信じたいのです。もちろん、場所を変えるごとに一段階上でなければなりませんが……。

私が一段階上に登れたのかは大変問題ですが、これは私の生き方です。生き様です。京都にきて、ホッとする暇もなく仕事に追いやられておりますが、ただひとつだけ、楽に息をついているといった感じでいます。これからが勝負というところです。

いろんな事をして、今までどうにか生きてきました。生きることがどんなに大変なことか、しみじみ感じております。他人は、自由でいいなと言います。でも、自由であろうとすることは、それなりの犠牲、覚悟が必要と思います。

私は常に自分を大切にしてゆくこと、それは他人をも大切にすることとつながっていると信じます。私のまわりの良き友人達によって、ようやく方向を決めることができました。友を大切にし、大きな“いい顔のした”ステキな人間になりたいと思っています。

（日下工芸勤務・京都市山科区四ノ宮鎌手町11―16喜楽荘1F6号）

劇「夕鶴」の出演者たち（南高祭で）

わ　が　高　校

普通科昭和47年卒業　須江　健男

昭和55年の１月10日の朝日新聞に、三島由起夫の死後10年という記事が載っておりました。10年前、その事件を聞いた場所は、高校の前にある愛想のいい親父さんが商売している「としま商店」でありました。その店で、ソーセージをストーブの上で焼いて食べるのが大変うまく、その日もそれを楽しみに出かけて行ったのです。十年一昔と言いますが、新聞の記事をみながら、高校時代から10年もたったのかと、月日の流れのの速さを感ぜずにはいられません。

私たち百十余名が入学したのは69年の春でありまして、69・70年安保の盛んなりし頃でした。卒業は浅間山荘事件があったかと記憶しています。ですから、私たちの高校時代は、政治的に激動していた３年間だったのです。マスコミでは毎日のように学生運動が報道され、高校生も自主的活動の権利獲得のための運動が、東京をはじめ各地でおこっていました。

我が南会高では、思想的にそれほどの深まりはなかったのですが、それまでの長髪禁止がある程度の長髪を認められました。男子生徒は鏡をみる毎日が楽しみの一つになったのです。また、ホームルーム等で「同じ県立高校でありながら、施設設備等で差別があるのはおかしい。プールさえない、特別教室もない、図書の冊数もちがう。どこにそういう差が生じるのか。私たち学生の質か、そんな基準はどこにある。また、地域文化の差か。」などとよく話し合ったものでした。

そして、私の手元には、２年生の時から誰が始めたのか、自由ノートが２冊あります。友だちの手から手へと渡っていったため、アカで大変汚れています。しかし、中身は山口百恵の発言にも負けないような、大変重要な発表も書いてあったり、まるっきりの冗談ばかりが書いてあったり、青春の苦悩そのままの姿がびっちりと埋まっているのです。その中に、就職組と進学組とに分けられることへの不満と疑問も書かれてあり、そういうことも話し合った思い出があります。

さらに、そういう話し合いに対して、真剣に考えてくれた若い教師がたくさんいたことを忘れることはできません。体格も大きいうえにスポーツ刈りをしており、一見恐そうだが実はやさしかった浅野先生。ぶつぶつとあまりはっきり聞こえないが、よく話しかける上野先生。服部半蔵などとニックネームをつけられ、それを誇りに思っていた菊地先生。そのほかに、生物の後藤先生、体育の薄先生や高橋先生、倫社の富田先生、音楽の斎藤先生、英語の紺野先生、国語の押田先生など、多くの先生方との出会いとふれあいとがありました。紙面を通して感謝の言葉を述べさせていただきます。

最後に、そうした私たち百十余名の思い出が、10年前に過ぎてしまった事実と、その時話し合った校舎新築が実現する喜びを心から祝いたいと思います。

（新潟県長岡市宮内2—10—24）

あの頃……

普通科昭和48年卒業　山内　正吉

今までに自分の母校南会津高校を知っている人にめぐり会えたのは数える程しかいない。「聞いたことないなあ。」とか「そんな高校あるのか。」と言われるのがほとんどで、ひどいのにいたっては「どこの県にあるの。」とさえまで言われた。それだけに新聞の片スミに載った小さな活字でもうれしく思ったものである。

12月にこの原稿を依頼されてから２ヵ月余り、何を書こうかと思い悩んできた。その間、母校のバレーボールチームが東北大会に出場するということをテレビで見たり、剣道部の活躍を知らせるＯＢ会のたよりが届けられたりで、だらしのない先輩の一人としては、華やかなニュースの陰で筆をとることが余計にためらわれた。執筆が遅れたついでに、何か衝撃的なことを書いてやろうと思ったのだが、思い出すのはみな平凡なことばかり……。それほど年を経たわけではないのだから、高校生活そのものが平凡であったのだろう。

卒業してからまる７年になるのだが、今までの学舎がすべて新しく変わってしまい、母校の姿が何一つとして残っていないのは淋しいものだ。変わらないのは悪友ども……、寄ると触ると酒を飲み、人生論やら恋愛論、はては政治経済から世界の動向まで(？)時のたつのも忘れて語り合ってしまう。ニキビ面して話していた７年前の姿と何ら変わりないのはうれしいものだ。そう言えば、あの頃も親の心配をよそに、たまに(？)酒を飲んだものだ。２日酔でクラブの合宿に出たり……それが今では、

「先生」と呼ばれる立場にいるのだから、ぞっとする思いである。

嫁に行ったとか、もらったとか言う知らせを受けとるたびに、もうそんな年になったのかと感慨深いものがある。高校時代、校舎裏にあった堤の上でふと口にした言葉「おれは30過ぎまで結婚しない。」が、どうやら現実になりそうである。共に約束した友達がつい先日結婚してしまった。「おれは24までには……。」と言っていた友達は今もって独身。人生の計画などを語り合ったあの堤や芝生の緑が妙に鮮明に目に浮かんでくる。年月の流れを感じながらも、すべてに輝いていたあの時代は、私にとってかけがえのない財産と言えるだろう。

久々にアルバムをひも解いてみた。そこには懐かしい先生や先輩、そして友と一緒の10代の自分があった。あの頃のひたむきな若さを明日からの生活にもう一度ぶつけたいものだ。

雪深い南会津の地にもまもなく春がやってこよう。いつか自分もあの自然のふところの中で、子供達と過ごす日が遠からず来ると思う。その日を夢みつつペンを置きたい。　（昭和55年２月）

（福島市立飯坂小学校勤務・福島市笹谷字西谷地3―4）

一隅を照らす人

普通科昭和49年卒業　馬 場 謙 一

高校に入学から卒業まで我がクラスの担任教諭であった、富田良夫先生の思い出について述べることとしたい。

昭和47年の春。伊南中学校を卒業後、南会津高校に入学。自己紹介が終わり、おれ達の担任をじっと見つめる。20代後半の顔はまるで河童。頭を何となくみつめる。60代後半としか言いようがない。光る頭部に横たわるかすかな髪。この人が３年間担任になるとは誰一人として思わなかっただろう。立命館出身で大学時代にはボクシング部に入っていたという。短期ではあったが、生徒の関心を十分引きつける何かを持っておられた。日本史、世界史、地理、倫理社会と幅広く教えられ、先生の少なかった我が母校にとっては大切な人であった。

忘れもしないある晴れた冬の午後、先生をからかって「ハゲ。ハゲ。」と言って大きな声を出していたら、やにわに胸倉をつかまれて１発フックをくらったのを覚えている。授業中に居眠りをすれば容赦なくチョークの雨。煙草、酒を見つかれば有無を言わずして無期停学。あの頃どこの学校においても同様ではあったが、その厳しさは誰しも思い出すであろう。しかしそんな先生が私は好きであった。人一倍神経質なところもあれば、何となくどこか抜けているところもある。盆や村祭になると夜を徹して監視の目を、頭を光らせ、体力の続くかぎり生徒の面倒をみていた。

先生を理解できる頃にはもう高校生活の中間を過ぎ、就職、進学と個

人個人の面倒をみながら、人一倍忙しい日々を送られたのだと思う。一段落つくころには一生涯の伴侶を南郷村から見つけられた。だが、あの時に結婚されなかったら、今頃まだチョンガーで暮らされていたにちがいないだろう。青春時代において、かけがえのない生活の場での経験というものに対し感謝したい。先生との生活というと、高校の思い出として残るのは、修学旅行、寮生活、クラブ活動、悪いいたずらなどがあった。

現在母校には残っておられないが、南会津高校の歴史をつくった一人でもある。また先生に恵まれたことは、社会に出てからも大変役に立つものだと感じた。

最後になったが、いつも言っていた言葉がある。一番の思い出として残っている。

一隅を照らす者
これ即ち
国宝なり

（横浜税関監視部審理部門勤務・神奈川県横浜市中区新山下1―1―19税関新山下寮）

高校時代―僕の場合―

普通科昭和50年卒業　小山　正充

卒業してから早くも５年。改めて３年間を振り返ると懐かしい思い出が次々と溢れ出て、どういう言葉で表現していいのか困ってしまう。一口で表現すると「悩みの多い時代」だったのではないかと思える。よく三無主義・四無主義とか言われていたが、確かに僕自身外面的には完全にしらけきっていたようだ。それがかえって内面では自己嫌悪や焦りで「悩みの多い時代」にしたようだ。（ちょっと大袈裟）。

今考えると、あの頃はいい意味でも悪い意味でも真剣に自分自身を見つめていたのでは……。最近は以前に比べ、悩む量が少なくなってきたようだ。真剣さが弱くなってしまったというか、ずるくなったというか、妥協することが多くなり、酒で誤魔化したり。笑って誤魔化したり。

あの頃は、思い出してもバカバカしくてつまらないような事から、本当に真面目なものまで、実に真剣に悩んでいたものでした。（今でもそんなに進歩もしていないが……）。社会に出たら自分なんか努まるだろうか、なんて自分は無力な人間なんだろう。タバコは１人前（？）に吸った方がいいのだろうか、麻雀なんかできないと仲間はずれにされてしまうのだろうか、赤面恐怖症を直す方法はないだろうか、数えたらきりがないほど悩んだ記憶がある。

中でも生徒会の役員になって悩み続けたことが特に印象深く記憶に残っている。いろんな面でものの考え方が変わった時期だったように思える。そういう方面では器でないということは自分自身がよく知っていた

ので、誰もやりたがらないからといって、ちっぽけな正義感で「イイカッコ」してしまったのではないかとか、本当は心の奥で犠牲を感じているのではないだろうかとか、あれこれ考えたり……。人畜無害さをいかんなく発揮して、特に問題なく(?)努めていたが、あまりの無力感に悩みの連続で苦しんだことを覚えている。

そして、高校時代3年間を通じて悩んだことと言えば、やっぱり人気・頻度共No.1の恋愛問題・異性問題であろう。僕も他聞に漏れず悶々と悩み続け、修学旅行が過ぎたあたりからカップルが続出するにつけて、羨望と焦りで「なんで俺がモテないのか!?世の中間違ってる!!」なんて…。今考えると現実は正直だったのです。

そんないろいろな悩みを解消するために、手当り次第というのかもう無茶苦茶に本を読んだり、拓郎・こうせつ・陽水・アリスなんかに力を借りたりしてみたけど、本を読めば読むほど悩みが膨れてしまって、こうなるともう軽いノイローゼだろう。ある時など「不動心」などという本を読んでいて一週間ぐらい悩みが拗れたことがあった。

高校時代の日記を見ると、自分に対する非難の言葉ばかりで、高校生活を体で感じることもなく、何かもっと大事なものがあるのではないかと、歌の文句を借りれば「胸にトゲ刺すことばかり」「道に迷っているばかり」だったような気がする。でもあの3年間が、決して時間の浪費だったわけでなく、精神面で何か大きなものを見つけてきたと思いたい。

5年たった今でも高校時代に自分の中に根っことなったものはほとんど変わっていない。それ以上に成長していないかもしれない。僕の青春時代はどこまで行ったら終わるのでしょうか?

(通商産業省勤務・東京都大田区北千束1―19―1)

思　い　出

普通科昭和51年卒業　山内　裕希

月日の過ぎるのは早いもので、社会人として5年目を迎えました。

私達が学んだ木造の校舎は無くなってしまいましたが、思い出はいつでも生き生きと蘇えってきます。人生において最も多感な時期を、南会津高校で過ごせたことを誇りに思えるこの頃です。

高校のことを考えるとき、勉強した記憶はほとんどなく、クラブ活動が真先に思い出されます。「合唱なんて男のすることではない。男はやはりスポーツだ。」と友人達に言われたものですが、さほど気にもなりませんでした。中学まで縁のなかった合唱に、どういうきっかけで入部したのか思い出せませんが、その時の合唱との出会いが社会人になっても合唱を続けているほど、強烈だったことは確かです。

いい声はいい体からとばかりに、スポーツクラブもどきのトレーニングをしたり、練習のことで意見が合わずに真暗になるまで討論した毎日でした。土曜日も日曜日もなしに指導して下さった福井先生のことも忘れることができません。最後のコンクールの時に「今年こそは入賞を」の願いもむなしく入賞できずに終わった時、旅館に帰られる先生の大きな背中は、絶対に忘れることができません。クラブ以外でもほんとうにお世話になった先生でした。御無沙汰してますが、お元気のことと思います。

高校のことを思うときに、クラブと同じく思い出せるのが友人と過ごした時間です。他のクラスのHRにおしかけて行ったり、校庭掃除で集

めた落葉で焼イモをしたり、捨犬を拾ってきて学校で飼ったり、大成功に終わった南高祭でのお化け屋敷で、教室に土を入れたり、数え上げればきりがありません。

今になって考えると、私達の高校時代は全体として生徒の自主性にあふれていたように思われます。クラブを初めとしたいろんな活動が自由にできたし、いろいろな運動も自由でした。『頭髪規制廃止運動』や『サンダルばき自由化運動』『同好会設立運動』などが思い出せます。また、そういう私達に対して、先生方が真剣に話し合って下さり助言して下さいました。寺脇先生、富田先生、千葉先生、ケンテン先生……。みんな机上の勉強だけが勉強ではないと教えて下さったように思えます。

学歴万能主義の今の社会では、受験のための勉強が優先するのはしかたのないことかもしれません。でも、高校の3年間を一生懸命に打ち込めるものがないままに過ごすのは残念な気がします。勉強であっても、クラブであっても、趣味でもなんでもいいと思うのです。自ら進んですることなら、惰性で過ごす3年間でないならば、人間として本当に大切なものがつちかわれるのは、クラブ活動を初めとする諸活動や、人との触れ合いではないでしょうか。

南会津高校のすばらしさは、そんな気風が脈々と生きているところにあると思うのです。冒頭で述べた南会津高校の卒業生であることを誇りに思えるというのは、そのことなのです。

最後に、南会津高校の益々の発展を期して、拙ない文章を閉じることにいたします。

（只見町農業協同組合勤務・只見町大字二軒在家）

わがハンド部室

普通科昭和52年卒業　斎藤　良

私が卒業して3年が過ぎようとしています。しばらくぶりで会うハンドボールの先輩と同輩との間で、酒を酌みかわしながら話すあの青春の日々は、胸の中に太陽の日ざしがさしこんだかのように鮮明に甦えってきます。毎日続けられた苦しい練習。そしてその合い間の楽しい時間や全力で戦った試合の数々が、喜びと悔しさと懐かしさとともに皆の顔にあらわれています。

そんな中で、チームの汗が一つになるハンドボール部室が、私の頭の中に甦えってきました。入部の当時は、昼休みと帰るときに水をまき砂をはいて掃除をし、苦しい練習が終わり先輩が帰った後は、新入部員だけの安楽の場所でありました。1年生のときは練習の苦しさに負け、部室を見るだけでも背すじが寒くなるような場所でしたが、部室の雰囲気に溶けこんでいくにつれ自分達の砦的存在の場所になりました。昼休みなどは、ただそこに自然と部員が集まって雑談をし、先輩と後輩が一緒に笑える場所でもありました。

部室は学校の北西に位置し、1軒の平家を野球部と半分に分けて使っていました。中に入ると左右に木の棚が沢山あり、そこにダンボール箱が沢山のっていました。それが1年生や2年生の着替えを入れておく箱であり、後に悲劇と化する箱だったのです。

遠征に行くと恒例である行事が必ず行なわれました。それは、1年生を押さえ込んで好きな女子の名前やクラス名を言わせることでした。不

幸なことに、言わなかったばかりにパンツのゴムを引きちぎられ、あげくのはてにはパンツを下ろされた１年生もいました。遠征から帰ってくるなり、あのダンボール箱にマジックペンで女子の名前を書かれ、部員全部に広まった末、隣の野球部にまで広まりました。そして結局は、人の口に戸を立てることができないように全校へと……。

部室のセメントで造られた堅い床は、新入社員に喝を入れるときによく用いられました。態度の悪い点や、自分の目の前の障害から逃げようとする甘い精神を叩き直すために、正座をさせ教えを説く場所でした。また、ハンド部室においてザラ板は必要不可欠なものでした。普段はこの上で着替えをし、また練習中にときどき出た急病人のために「いざ鎌倉へ」とばかりに、「いざ渡部病院へ」というときには担架となりました。砂だらけの臭い足がいつも乗り、インキンの菌があるかもしれないこの板の上にのせられ、顔までも直接触れたかと思うと、私は３年間のうちで１度も倒れる事なく練習できたことを神に感謝するしだいです。

私が昔の学校の中で１番好きな場所が、このハンドボール部室です。私たちにとってあの青春の日々はすでに過去のものです。しかし、サブヒューマンからヒューマンへの変身を遂げる、精神面で１番重要な時期に鍛えあげられた私たちのハンドボール精神は、今なお盛んに燃えているのです。

（四谷駅前郵便局勤務・東京都新宿区北新宿3—27—18 明和荘）

東京に生きて

普通科昭和53年卒業　佐　藤　　実

南会津高等学校の在校生諸君、そして先生方お元気でしょうか。私は５年前、そうもう５年になるのですが、貴校に入学、３年間お世話になった一卒業生です。このたびは、この私の文章が活字になるとのこと、たいへんうれしいことで、そういえば高校入学当時、物書きになりたいなどと思ったことを考え、そういう意味ではその志はとげられたのかなどとも思っています。

私は現在、私大の２年生としてスーパーシティーTOKIOに住んでいます。上京して２年、やっと勝手がわかったというか、とにかくあまりにも多すぎる人と物のペースに合わせるのは疲れます。思うに東京の人間は、自分自身に適していないハイペースで生活している結果、あまりに疲れすぎていて、ゆえに個人の中に埋没してしまうのかもしれません。

しかし東京のいいところは、己れにそれだけの裏づけがあるなら、どんなペースでも暮らしていけることだと思います。現に私のまわりにもいろんな人間がうごめいていますし、たとえば学生なら１年間で48単位をとるものもいれば、年間12単位にとどまっていみじくも２回生１生の汚名に甘んじる者もいます。まさに10人10色というところです。

思えば２年前、田舎の兄ちゃんとしてSUPER—CITYにのこのこ出てきた私が、この町のシビアさにとまどったのは無理からぬこととも思えます。とにかく私はここでいかに対処したか、約２年の短期間ではありますが、私なりに科学的あるいは哲学的に分析したTOKIOの生活

に関してお話ししたいと思います。

まず私が第1にとまどいを感じたのは言葉です。これは地方出身者にとっては共通したものだと思います。我々は高々東京から数百キロ離れているだけで、まことに大きなハンデを負うわけです。しかしこれは、さほど大きな問題ではないのです。もちろん完全な方言、たとえば「めんげえ」とか「こわい（疲れたという意味の）」とかいうものは通じませんが、「……だべ」とか「……べや」などの名詞や形容詞、動詞などを除いた部分については、何とかわかってもらえるものです。我々の弱点は実にこの方言にあるのですが、語尾などの独特の言いまわしなどを気にするあまり、おかしな日本語となるのです。

これら方言に関しては、我々は何ら努力も用しないのです。何と我々のGENERATIONにはテレビという強い味方があるのです。テレビによって標準的言葉を覚え、更には教育の進んだ日本のこと、国語の訓練もゆきとどいて、頭の中では立派な都会人としての語学力が養われているのです。

それではなぜ、我々が標準語なるものを話そうとすると異和感が生じるのか。この異和感というのがなまりというものだと思います。頭の中では標準的な言葉の知識をもっており、TVやラジオなどから聴覚的にも理解しているのになぜそれが出ないか。思うに「テレ」であると考えます。「……でしょう」だとか「……でさ」とか言った言葉を口にする、恥ずかしさに似た感情が我々をさまたげるのだと思います。このテレがなければ、我々は標準的言語を話せるだけの資質はもっているのです。

先ほどこの言葉に関することは、さほど重要ではないと言いましたが、それは以上のようなことではなく、もっと大きいことは、なぜ我々が標準的な言葉を使用しなければならないのか、相手が我々の言葉を使わないのか、ということです。もちろんENGLISH が世界の多くの国々の共通語として使用されているように、便利さの面から言えば我々が歩み寄るというのは合理的ではあります。しかし私は、関西の人間がその独特な言い回しを堂々と出しているのをみるにつけ、このくらいの個性を出してもいいのではないかと考えるのです。神奈川県民の使用する「…じゃん」という言葉も今や標準化しつつあるのです。

第2にお話ししたいのは「知る」ということです。たとえば東京の交通機関はたいへん発達しています。渋谷から新宿に行こうとするのにも、国鉄線で行くことも可能ですし、車なら明治通りをまっすぐ行けばいいし、電車にしても井ノ頭線で下北まで行き、小田急に乗り換えて新宿ということもあるいは可能です。いや、こちらの方が運賃的には安いかもしれません。また道路にしても小さな路地を考えれば、それこそ行き方は数々あるわけです。このように同じ渋谷から新宿へ行くのにもいろいろあるわけです。目的によっても異なりますし、目的に合致した方法であってもそれは更にいくつかあるのです。ですからその方法をできる限り知るということは、たいへんプラスになることだと思います。

また、どこに何があるということを知っておくのも便利です。これらは何も交通機関や建造物、名所、その他を単に知ってほしいと思って書いたわけでなく、我々にとってありあまっている情報を知るというのは、それなりに良いことではないかと考えるからです。その方法を選択するのも実用するのも我々の自由ですから。

私の書きたかったことはまだまだいっぱいあります。ということは、私が東京へ来て失敗したことがいかに多いかということなのですが、枚数に限りのあることですし、最後にこれを読んでくれているみなさんにお願いしたいと思います。とにかく個性的に生きてほしいと思います。そして言いたいときは言って、泣きたいときは泣き、笑いたいときは笑ってください。私もそんな人生を送りたいと思います。

（駒沢大学学生・東京都世田ヶ谷区駒沢2—10—9矢野様方）

スポーツと政治

普通科昭和54年卒業　馬　場　　稔

スポーツは政治と無関係であり、政治上の問題に対しては常に中立であるべきだと思います。オリンピック憲章の第１条には「大会では、人種・宗教、または政治上の理由から国家または個人を差別待遇することはできない。」とあり、25条には「ＮＯＣは完全に自主的な独立団体で、すべての政治的・宗教的、または商業的圧力を排除しなければならない。」とある。しかし憲章は理想であり、望ましいあり方を文章で示したものだが、見方によっては、こうして条文化しなければならないということにも、かえって問題があると思います。

多くのスポーツ種目の起こりが古代人の生活の手段、戦いなどからであることでもわかるが、スポーツはもともと世界の歴史からも明らかに示されるように、政治と切り離して存在したものではなかったと考えられます。ナポレオンをワーテルローで大破した時の、イギリスの司令官ウェリントンは、この勝利を「イートン校の運動場でかちとられたものである。」という有名な話もあります。こうした例は、世界各地の歴史の中でみることができます。

スポーツが政治と無関係で存在できるならば、複雑で難しい社会から離れて、１つの現実として遊びの世界を作り出すことができると思います。しかし現実の社会では、スポーツをする人間の一人一人は社会的な存在であり、その社会的存在を規定するのが政治であり、政治を離れて完全に独立するということはできないと考えます。

1972年９月の西独ミュンヘン・オリンピックで、オリンピック村を襲ったパレスチナゲリラ５人は、イスラエル選手団を人質にして立てこもり、拘留されているアラブ人の釈放と、自分たちの無事脱出を要求してきたが、結局、空港で銃撃戦となり、人質もゲリラも全員死亡し、オリンピック史上最大の惨事となり悲劇となった。これはまったくスポーツと関係のないパレスチナ問題が、世界中の人々の注目、注視の的であるオリンピックという大舞台を利用して展開されたもので、スポーツといえども政治と離れて存在できないことを、あらためて世界中の人々に知らせしめたということになりました。このパレスチナ問題は、その後も常にスポーツ大会の影にあって問題となっています。

1974年、テヘランで開かれたアジア大会や、1976年のモントリオール五輪では、ミュンヘン事件の再発を恐れて、スポーツ大会とは思えない厳重な警戒の中で行なわれました。また、今年開催されるモスクワ五輪が、ソ連自体の政治的しくみや、それに対する各国からの政治的影響をうけ、どのように展開されていくかが、注目し興味あるところです。

以上の問題とは別に、スポーツの政治からの独立や、政治はスポーツに介入すべきではないといった考えは、今や非現実的な抽象論として、誰もが信ずることのできない言葉となってしまったように思われます。

（1980年１月）

（国士館大学学生・東京都町田市広袴町811 国士館大学望岳寮4F・C）

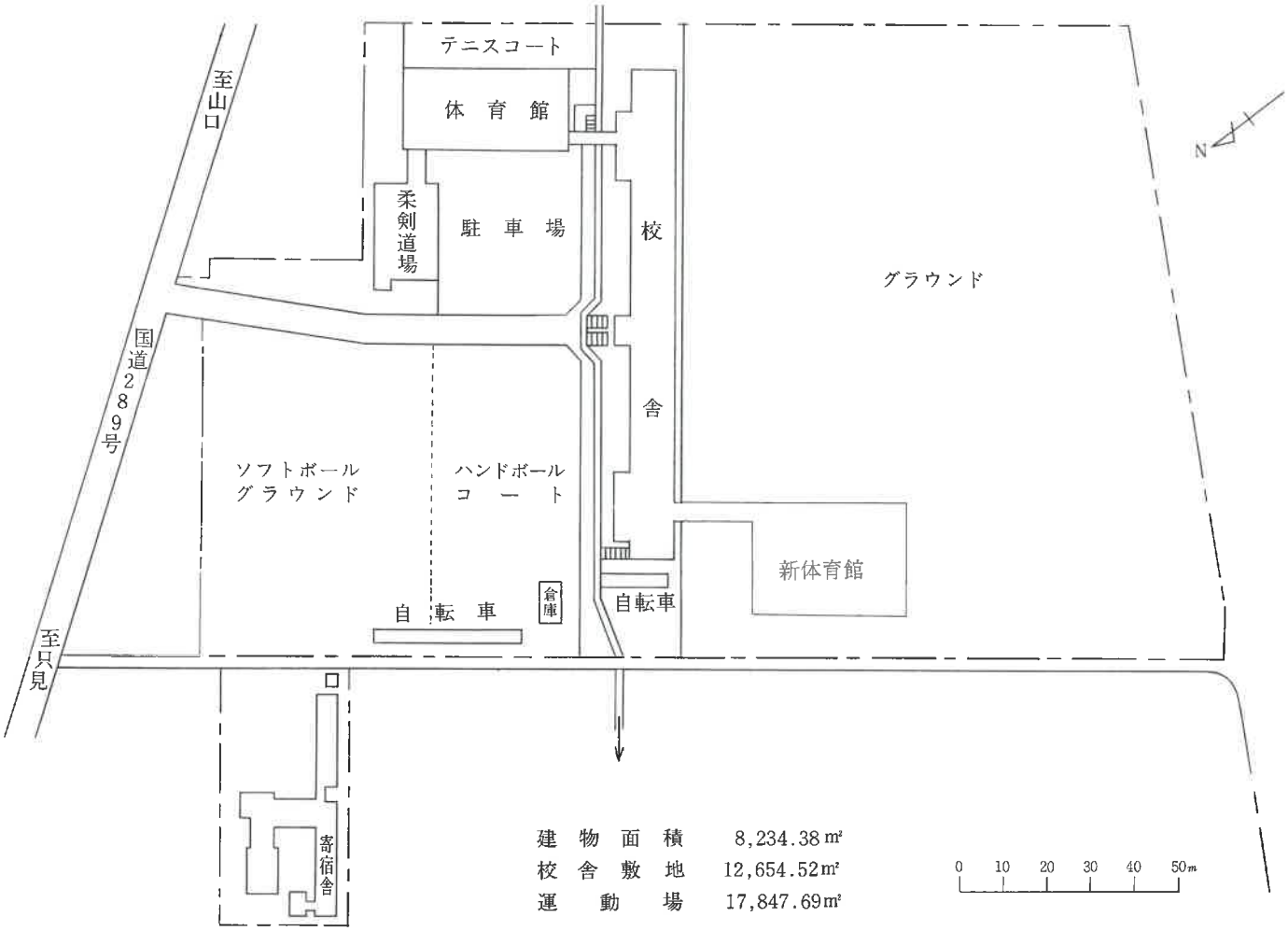
資料編

●学校施設の概要……90
●生徒会部活動アラカルト……96
●年次別卒業者数……99
●現職員一覧表……100
●旧職員一覧表……101

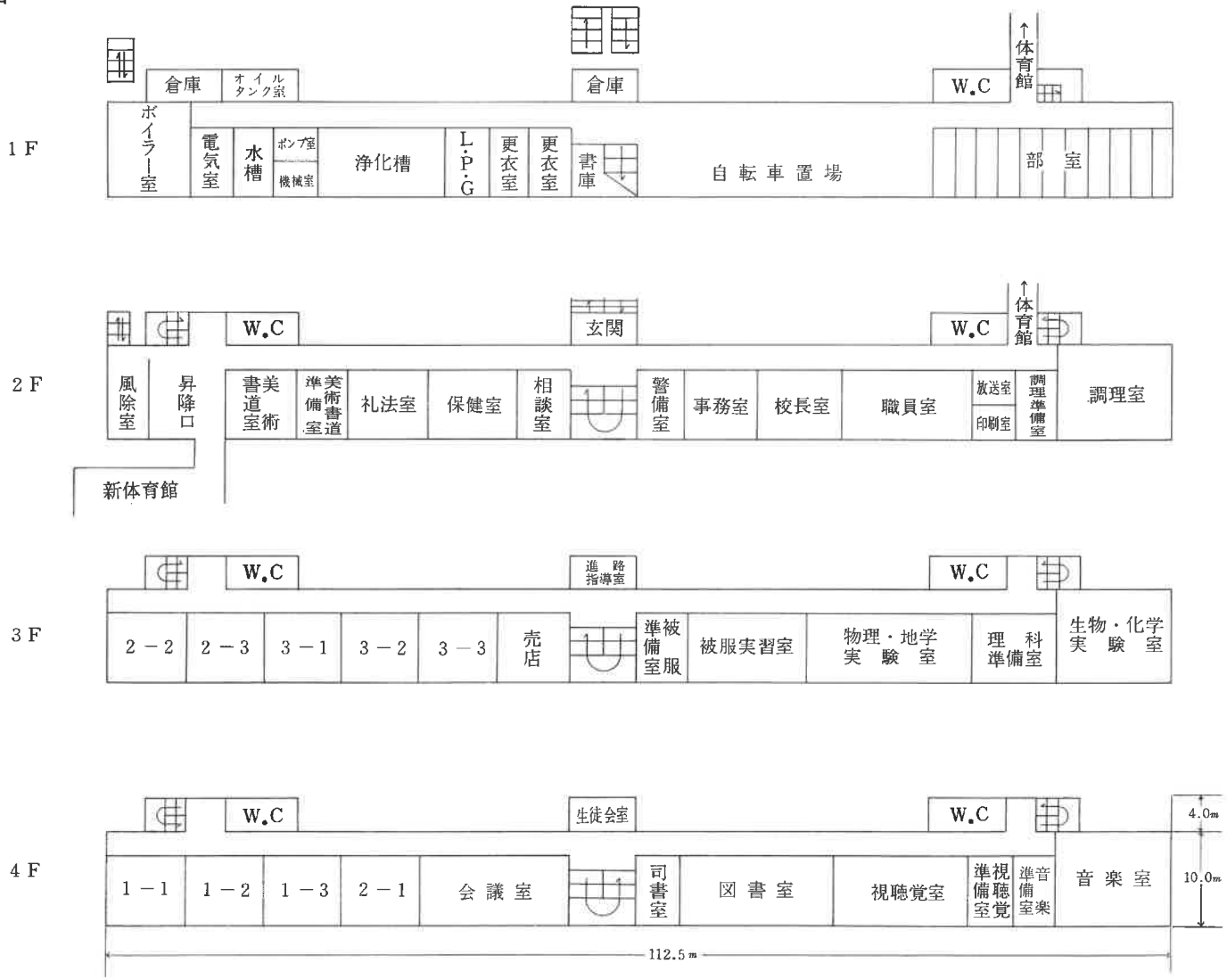
学校施設の概要

所在地　福島県南会津郡南郷村大字界字向川原2000番地
（ＴＥＬ　02417―3―2221）

■学校配置図



■校舎各階平面図


1F
倉庫
オイルタンク室
倉庫
W.C
↑体育館
ボイラー室
電気室
水槽
ポンプ室
機械室
浄化槽
L.P.G
更衣室
更衣室
書庫
自転車置場
部室
2F
W.C
玄関
W.C
↑体育館
風除室
昇降口
書道室
美術室
準備室
美術書道
礼法室
保健室
相談室
警備室
事務室
校長室
職員室
放送室
印刷室
調理準備室
調理室
新体育館
3F
W.C
進路指導室
W.C
2－2
2－3
3－1
3－2
3－3
売店
準備室
被服
被服実習室
物理・地学実験室
理科準備室
生物・化学実験室
4F
W.C
生徒会室
W.C
4.0m
1－1
1－2
1－3
2－1
会議室
司書室
図書室
視聴覚室
準備室
視聴覚
準備室
音楽
音楽室
10.0m
112.5m

特別教室

■ 2 階

▶校長室

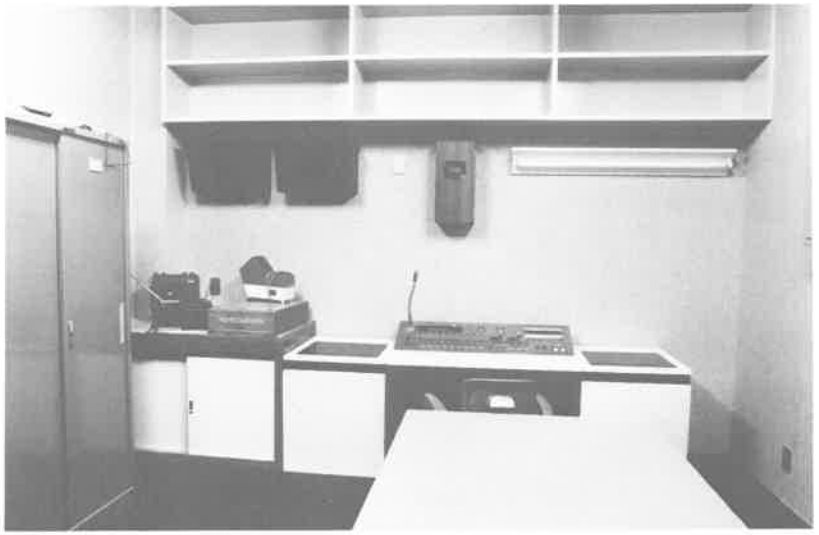
▲美術・書道室

▲調理実習室

▲保健室

▲教育相談室

▲礼法室



▲放送室

■3階

▶生物・化学室

▲進路指導室

▲物理・地学室

■4階

▲図書室

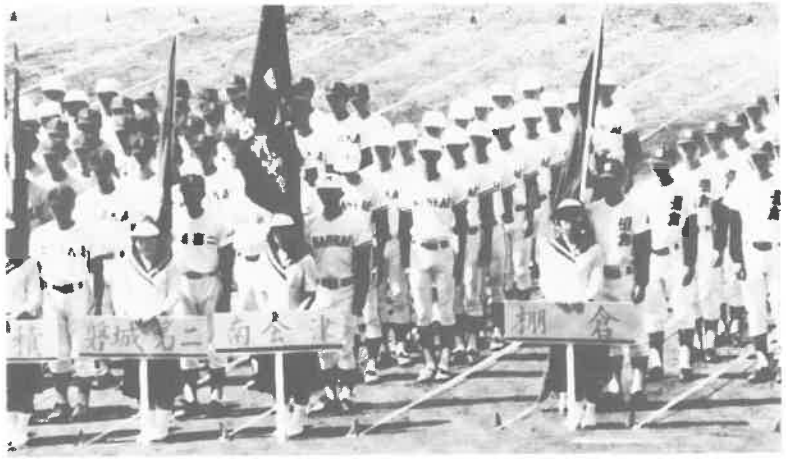
▲音楽室

▲視聴覚室

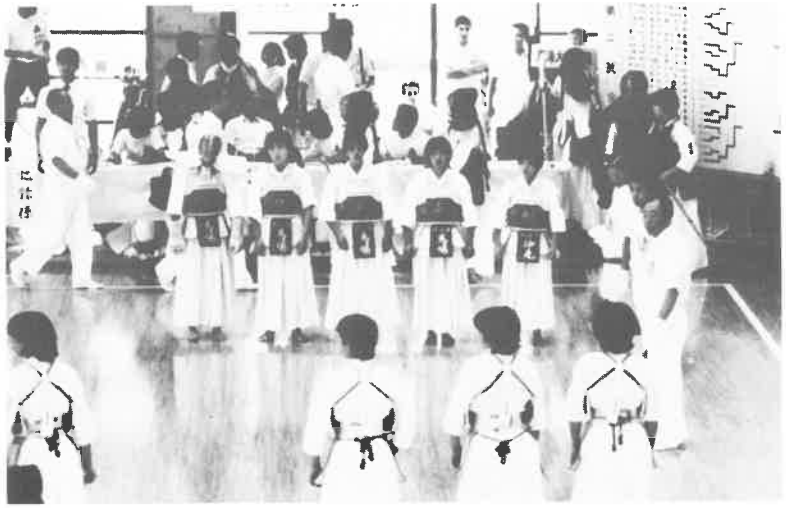
▲会議室

生徒会部活動
アラカルト

■運動部



◀野球部



◀剣道部

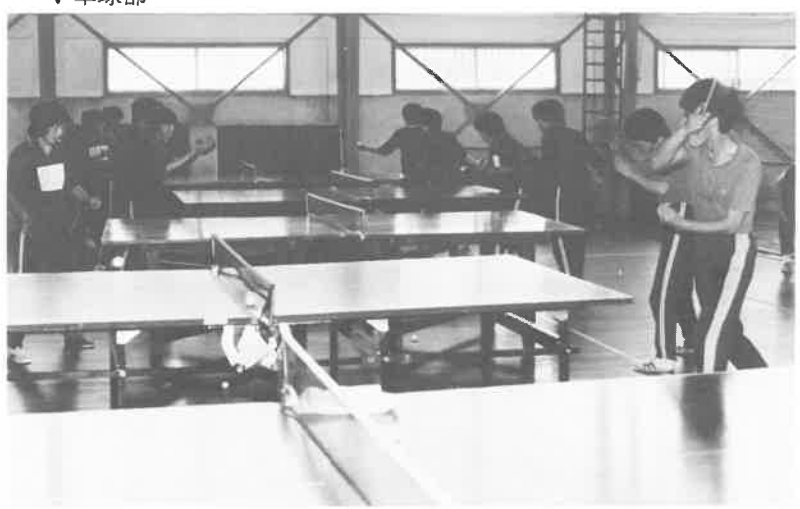
◀バレーボール部

▲柔道部

▼ハンドボール部

▲ソフトボール部

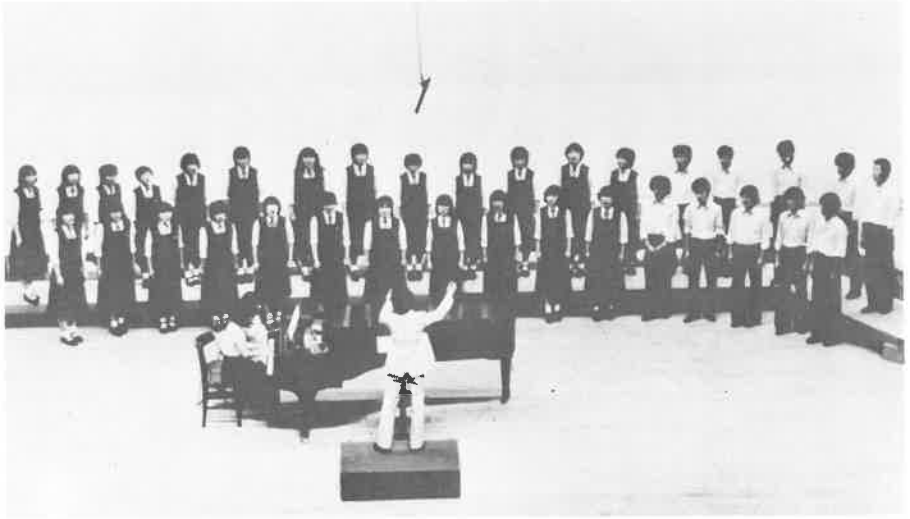
▼卓球部



※他に陸上競技部があります。

■文化部

▲家庭部



▲音楽部

▼自然科学部

▲出版委員会

▲美術同好会

※他に次の部があります。 英語部，珠算部，社会部，写真同好会，ギター同好会，つり同好会，購買委員会，応援団

年次別卒業者数

卒業年＼科別	普通科			農業科家庭科		短期産業教育家庭科		合計
	回	人数		回	人数	回	人数	
昭和27年				1	54			54
28				2	41			41
29	1	43		3	60	1	28	131
30	2	42		4	82	2	26	150
31	3	66	(20)	5	45	3	60	171
32	4	62	(19)	6	45	4	19	126
33	5	65	(18)	7	32	5	20	117
34	6	84	(32)	8	39	6	18	141
35	7	109	(33)	9	42	7	7	158
36	8	98	(28)	10	28			126
37	9	150	(83)	11	29			179
38	10	143	(87)	12	15			158
39	11	108	(49)	13	14			122
40	12	87						87
41	13	123						123
42	14	120						120
43	15	136						136
44	16	118						118
45	17	115						115
46	18	126						126
47	19	114						114
48	20	97						97
49	21	110						110
50	22	114						114
51	23	118						118
52	24	120						120
53	25	119						119
54	26	118						118
55	27	119						119
計		2,824	(369)		526		178	3,528

※普通科のうち（　）内の数は、只見分校の卒業者数であり、内数である。

現職員一覧表

○印は主任

職名	氏名	教科	担当ＨＲ	部顧問	出身地	着任年月日
校長	星野俊一				会津若松市	55．4．1
教頭	玉川真須美	数学			下郷町	53．4．1
教諭	太田英成	○国語	1の2	野球・応援団	双葉郡大熊町	54．4．1
〃	馬場博文	〃	2の2	剣道	田島町	53．4．1
〃	武田吉之助	〃	3の3副	ギター・出版委	郡山市	55．4．1
〃	斎藤輝夫	○社会	3の2副	社会	会津若松市	51．4．1
〃	渡部喜代司	○商業　社会	1の3	珠算・購買委	田島町	55．4．1
〃	草野芳明	社会	2の1副	ハンドボール	郡山市	54．4．1
〃	青津直	数学	1の1副	釣り	西会津町	53．4．1
〃	増子博英	○〃	3の1	美術	須賀川市	52．4．1
〃	畠恵治	○理科	2の3	写真・放送委	福島市	50．4．1
〃	菅野諭	理科　数学	3の2	自然科学	〃	52．4．1
〃	渡辺光男	理科	3の1副	陸上	いわき市	55．4．1
講師	五十直直	保体	2の2副	ソフトボール	三島町	55．5．22
教諭	箱崎二三彦	○〃	2の1	バレーボール	いわき市	53．4．1
〃	佐藤譲敬	〃	1の1	野球	郡山市	54．4．1
〃	渡辺泉	○音楽	1の3副	音楽	〃	54．4．1
〃	弓田篤	○英語	3の3	柔道	下郷町	53．4．1
〃	遠藤光	〃	1の2副	卓球	田島町	55．4．1
養護教諭	平野道子				伊村村	55．4．1
兼務教諭	渋谷美恵子	○家庭			会津若松市	55．4．1
講師	吉田則子	英語	2の3副	英語・家庭	いわき市	55．4．1
時間講師	田中瀬津子	家庭			伊南村	54．4．1
技能員	目黒チヨ子				南郷村	48．10．1
事務長	辺見修一				〃	53．4．1
主事	小沼恵美子				〃	55．4．1
主ボ技兼用務員	菅家利徳				〃	27．6．1
雇教師	土田清江				〃	54．4．1
校医	渡部次郎				〃	
歯科医	新藤章				〃	
薬剤師	大竹良幸				〃	

旧職員一覧表

氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数
	昭和	年		昭和	年		昭和	年
玉川春雄	23. 7～28. 3	5	酒井隆雄	23. 10～25. 7	2	矢沢はな江	23. 12～24. 3	1
鈴木孝二	23. 7～26. 3	3	佐野一輝	23. 10～33. 3	10	飯塚豊	24. 1～24. 8	1
渡部みつゑ	23. 7～30. 3	7	星英男	23. 10～24. 8	1	壺井静弥	24. 1～24. 3	1
玉川カヨ	23. 8～28. 3	5	馬場惇	23. 11～25. 4	2	鈴木繁夫	24. 2～25. 3	1
渡部亘	23. 8～25. 3	2	酒井信子	23. 10～27. 3	4	河原田保久	24. 1～24. 8	1
河原田惣一	23. 7～24. 3	1	渡部ハツエ	23. 11～24. 3	1	森六郎	24. 1～24. 8	1
伊藤智	23. 7～24. 3	1	菅家サク	23. 11～24. 12	1	中沼拓治	24. 2～24. 9	1
河原田三四	23. 7～24. 6	1	赤塚尹輔	23. 11～24. 8	1	田中実	24. 2～24. 5	1
長沢淳	23. 8～24. 3	1	本名タミノ	23. 11～25. 3	1	角田秀三	24. 4～26. 3	2
山口秋夫	23. 8～25. 9	2	目黒茂	23. 11～24. 3	1	星大昭	24. 4～32. 3	8
菅家真	23. 8～27. 12	4	新国新佐	23. 11～24. 4	1	横山伍郎	24. 4～27. 4	3
新国義勝	23. 7～26. 4	3	渡部孝一	23. 11～24. 3	1	竹内庸	24. 5～25. 4	2
星政喜	23. 7～24. 8	1	菅家八重子	(23. 12～24. 3 24. 11～32. 3	8	新田赳	24. 5～26. 6	2
遠藤源三	23. 7～24. 8	1	佐藤豊子	23. 12～24. 3	1	大須賀寅次郎	24. 5～25. 3	1
横山豊	23. 8～36. 3	13	伊藤スエ子	23. 12～25. 4	1	桑原寛	24. 5～26. 3	2
柏木ハツ子	23. 8～24. 3	1	五十嵐シマヨ	23. 12～24. 3	1	斎藤慧	24. 5～26. 3	2
須摩功	23. 8～29. 3	6	近藤舜	23. 11～24. 2	1	新保尚子	24. 5～26. 3	2
目黒フミエ	23. 9～30. 3	7	五十嵐三代子	23. 12～24. 6	1	林辺礼一	24. 6～26. 3	2
堀金ユキ	23. 9～24. 4	1	本名勝三郎	23. 12～24. 3	1	五十嵐栄太郎	24. 3～24. 7	1
横山孝一	23. 9～24. 8	1	新国新吾	23. 12～24. 3	1	寺木善一	24. 7～25. 2	1
長谷部三郎	23. 9～26. 3	3	三瓶金次郎	23. 12～24. 3	1	西村ハル	24. 8～26. 3	2
山紫田一雄	23. 9～24. 3	1	酒井益子	23. 12～24. 3	1	森キミ	24. 9～25. 5	1

氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数
	昭和	年		昭和	年		昭和	年
河原田 ハヤ	24. 9～25. 3	1	河原田 和子	25. 9～26. 3	1	新国 信子	27. 4～28. 3	1
寺木 智恵子	24. 12～25. 2	1	羽染 健一	25. 9～26. 3	1	渡部 幸雄	27. 5～33. 3	6
川上 ハツ	25. 1～28. 3	4	五十嵐 良介	25. 11～28. 3	2	目黒 光子	27. 5～28. 3	1
加賀谷 勇雄	25. 4～26. 9	2	岩崎 和子	25. 11～27. 3	1	目黒 久美	27. 5～28. 3	1
酒井 喜芳	25. 4～37. 3	12	河原田 トミ	25. 11～26. 3	2	馬場 五郎	27. 5～29. 3	2
菅家 昭男	25. 4～26. 3	1	酒井 芳子	25. 11～28. 3	3	富沢 和	27. 5～28. 3	1
小沼 堯	25. 4～26. 3	1	河野 徳子	25. 11～28. 4	3	和田 勇夫	27. 6～31. 3	4
酒井 英光	25. 4～26. 3	1	太田原 芳治	25. 12～32. 3	6	西村 登	27. 6～28. 3	1
山次 政男	25. 4～33. 3	8	渡部 政吉	26. 4～32. 3	6	佐々木 千代	27. 9～29. 3	2
酒井 健一	25. 4～25. 5	1	五十嵐 文泰	(26. 5～32. 3 37. 4～53. 3)	22	片野 チヱ	27. 12～28. 3	1
藤朶 義暹	25. 4～26. 7	2	星 欣一	26. 5～26. 10	1	遠藤 トミ	27. 12～28. 3	1
高橋 仁子	25. 4～25. 8	2	小山 誓信	26. 5～27. 3	1	渡部 郁子	27. 12～28. 3	1
本 ソノ	25. 4～34. 3	9	佐藤 幸太郎	26. 5～28. 3	2	目黒 徳松	27. 12～28. 3	1
菅家 富子	25. 4～26. 3	1	舟木 富保	(26. 8～30. 3 31. 4～39. 3)	12	梅宮 房子	27. 12～28. 3	1
佐藤 豊子	25. 4～26. 3	1	大久保 善市	26. 9～36. 3	10	西間木 正己	28. 4～31. 3	3
赤塚 フミ子	25. 4～34. 3	9	坂内 民雄	26. 9～30. 3	4	成田 光義	28. 4～32. 3	4
渡部 渡	25. 6～25. 8	1	宮内 輝喜	26. 11～30. 3	3	柴田 正孝	28. 4～31. 3	3
篠崎 和己	25. 7～29. 3	4	五十嵐 聡子	26. 12～31. 3	4	小林 栄三	28. 5～33. 3	5
目黒 荒三	25. 7～28. 3	3	新国 本子	26. 12～27. 3	1	村上 一雄	(29. 5～31. 3 32. 4～34. 3)	4
馬場 与一	25. 7～26. 3	1	高石 ヒロシ	27. 1～34. 3	7	長嶺 温	29. 5～32. 3	3
伊崎 修	25. 8～29. 3	4	鈴木 敏一	27. 4～31. 3	4	中野 和子	28. 9～33. 3	5
星 永二	25. 9～28. 3	3	関根 省三	27. 4～29. 3	2	斎藤 繁尚	26. 5～34. 3	8

氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数
	昭和	年		昭和	年		昭和	年
山口　実	28. 9～30. 3	2	佐藤太平	30. 12～34. 3	3	丸山重雄	33. 4～38. 3	5
大島八郎	28. 4～30. 3	2	園部国夫	32. 4～35. 3	3	大竹寅八郎	33. 4～38. 3	5
五十嵐和徳	28. 9～33. 3	5	五十嵐彰	32. 4～35. 3	3	遠藤善章	33. 7～35. 3	2
鎌田チイ	29. 4～30. 3	1	菅野栄子	32. 4～34. 3	2	万年キヨ子	34. 4～39. 3	5
三瓶タカキ	29. 4～30. 3	1	吉家弘子	32. 4～38. 3	6	白石進	34. 4～38. 3	4
斎藤脩	29. 5～34. 3	5	酒井軍次	32. 6～37. 3	5	今野雅益	34. 4～38. 3	4
馬場サク子	28. 11～37. 3	8	海津光位	31. 9～34. 3	3	真田富美子	34. 4～36. 3	2
野尻武男	29. 9～32. 3	3	石井義次	31. 9～33. 3	2	渡部正	34. 4～38. 3	4
小松忠夫	30. 5～33. 3	3	高橋薫	32. 4～35. 3	3	長谷川晃	34. 4～36. 3	2
佐藤恒子	29. 9～32. 3	3	渡部保夫	32. 4～34. 3	2	村田幹夫	34. 5～36. 3	2
堀金絹子	30. 4～33. 3	3	渡部清見	32. 5～35. 3	3	内藤庸三	34. 4～37. 3	3
石井充	30. 6～33. 3	3	小貫博麿	32. 6～33. 3	1	安藤敬男	34. 4～37. 3	3
皆川ミサオ	29. 6～34. 3	5	近藤金弥	33. 4～36. 3	3	斎藤孔男	34. 4～39. 3	5
川上定	29. 10～35. 3	6	竹島喜久夫	33. 4～40. 3	7	皆川茂子	34. 4～37. 3	3
小林勇三	28. 9～31. 3	3	矢内勝儀	33. 4～37. 3	4	関保雄	34. 4～35. 3	1
武藤金子	30. 5～32. 3	2	須佐善信	33. 4～34. 3	1	本名タミノ	34. 4～36. 3	2
後藤次郎	31. 4～33. 3	2	佐藤衛	33. 4～35. 3	2	小松宏子	34. 4～35. 3	1
蓬田道郎	30. 12～34. 3	3	森川節子	32. 10～35. 3	3	吉津キイ	34. 4～36. 3	2
江畑敏道	31. 1～35. 3	4	加藤善哉	33. 4～35. 3	2	佐藤栄子	34. 4～36. 3	2
谷津寛城	31. 4～35. 3	4	鵜川義	33. 4～36. 3	3	川原田シノブ	35. 4～39. 3	4
山内力雄	31. 4～34. 3	3	平出真理子	33. 4～36. 3	3	大沼昭三	35. 4～37. 3	2
斎藤喬介	29. 5～32. 3	3	清野清知子	33. 1～35. 3	3	塩谷重昭	35. 4～37. 3	2

氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数
	昭和	年		昭和	年		昭和	年
蛭田和夫	35. 4～38. 3	3	折笠千津子	36. 4～37. 3	1	広岡レイ子	38. 4～42. 3	4
小関英司	35. 4～38. 3	3	芳賀孝行	37. 4～39. 3	2	加藤岳男	38. 4～41. 3	3
高橋章子	35. 4～37. 3	2	菅野久男	37. 4～39. 3	2	斎藤昌己	38. 4～40. 3	2
渡辺邦夫	35. 4～37. 3	2	瓜生道子	37. 4～40. 3	3	渡部玲子	38. 4～40. 3	2
今泉清司	35. 4～36. 3	1	菊地宏	37. 4～39. 3	2	橋本邦夫	38. 4～39. 3	1
尾平捷	35. 5～38. 3	3	佐藤恒雄	37. 4～39. 3	2	岩越孝人	38. 4～39. 3	1
渡部貞夫	34. 9～37. 3	3	伊東裕一	37. 4～39. 3	2	佐川六郎	39. 4～41. 3	2
佐藤家治	35. 4～36. 3	1	鈴木守信	37. 4～39. 3	2	小河靖男	38. 4～39. 3	1
金沢美千代	35. 4～36. 3	1	藤田新一	37. 4～39. 3	2	工藤馨三	38. 4～39. 3	1
五十嵐俊久	35. 4～37. 3	2	鈴木英弥	36. 7～39. 3	3	大竹重満	38. 4～39. 3	1
目黒嘉祐	36. 4～38. 3	2	結城朝誠	37. 4～39. 3	2	猪狩竹子	38. 4～39. 3	1
菊地憲	36. 4～40. 3	4	薄敏	37. 4～39. 3	2	佐久間祥雄	39. 4～41. 3	2
室田定昭	35. 9～38. 3	3	長谷川京子	37. 4～39. 3	2	馬場周作	39. 4～42. 3	3
藤田仁	36. 4～38. 3	2	山内啓二	36. 11～39. 3	2	大竹久美	39. 4～41. 3	2
佐瀬渉	36. 4～39. 3	3	芳賀清光	37. 4～41. 3	4	伊藤洋	39. 4～42. 3	3
古河憲治	36. 5～38. 3	2	笠間喜美子	37. 4～39. 3	2	伊東覚	40. 4～42. 3	2
大久保善重	36. 4～37. 3	1	角田祥治	38. 4～42. 3	4	佐藤三男	40. 4～42. 3	2
海老田隆	36. 4～39. 3	3	須田明	38. 4～40. 3	2	布川澄夫	40. 4～41. 3	1
松岡徳五郎	36. 4～38. 3	2	星宏	38. 4～40. 3	2	鈴木隆一	40. 4～42. 3	2
中丸弘子	35. 7～37. 3	2	渡部忠	38. 4～42. 3	4	鈴木康弘	40. 4～44. 3	4
鈴木清子	36. 4～37. 3	1	大須賀俊一郎	38. 4～39. 3	1	津守四郎	40. 4～41. 3	1
室井卯三	36. 5～39. 3	3	山内博允	38. 4～47. 3	9	大竹良幸	(40. 4～44. 3 48. 4～50. 3	6

氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数
	昭和	年		昭和	年		昭和	年
野中恒男	41. 4～43. 3	2	浅野嘉尚	43. 4～46. 3	3	佐々木慶司	47. 4～50. 3	3
三瓶昌久	41. 4～44. 3	3	橋本年雄	44. 4～47. 3	3	根本あや子	47. 4～50. 3	3
田中武彦	41. 4～43. 3	2	井上正道	44. 4～46. 3	2	松本貞男	47. 4～49. 3	2
山口竹郎	41. 4～44. 3	3	上野三良	44. 4～47. 3	3	渡部幸一	47. 4～49. 3	2
塚原勲	41. 4～42. 3	1	薄貴	44. 4～50. 3	6	渡部佐吉	47. 4～49. 3	2
秋葉龍子	41. 4～43. 3	2	坂内孝敏	44. 4～46. 3	2	薄久男	47. 4～52. 3	5
酒井良平	41. 4～50. 3	9	山野皓正	44. 4～46. 3	2	松枝友好	48. 4～50. 3	2
渡部利助	41. 4～45. 3	4	高橋雅夫	44. 4～48. 3	4	福井均	48. 4～51. 3	3
目黒計江	41. 4～47. 3	6	紺野信子	44. 4～46. 3	2	樽川広喜	48. 4～50. 3	2
橋本秀夫	42. 4～44. 3	2	押田稔	45. 4～47. 3	2	寺脇正博	48. 4～51. 3	3
金川孝	41. 11～44. 3	2	渡部剛	45. 4～47. 3	2	鈴木正臣	48. 4～52. 3	4
金沢厚四	41. 11～45. 3	3	北郷正憲	45. 4～47. 3	2	戸嶋真紀子	48. 4～50. 3	2
阿部武彦	42. 4～43. 3	1	星名正	45. 4～49. 3	4	岩越銀三	49. 4～52. 3	3
後藤言行	42. 4～49. 3	7	本名テル子	45. 4～47. 3	2	独鈷悟	49. 4～52. 3	3
栗城信雄	42. 4～46. 3	4	山口利助	46. 4～49. 3	3	本田洋子	49. 4～51. 3	2
長谷川久仁子	42. 4～45. 3	3	工藤憲治	46. 4～48. 3	2	神野藤洋子	49. 4～52. 3	3
小熊千代一	42. 4～44. 3	2	斎藤真策	46. 4～49. 3	3	平野聡	49. 4～52. 3	3
渡部仁男	42. 4～44. 3	2	本田恭子	46. 4～48. 3	2	佐藤英紀	49. 4～53. 3	4
菊地昌美	43. 4～49. 3	6	富山貞治	46. 4～49. 3	3	田代光一	49. 4～50. 3	1
富田良夫	43. 4～54. 3	11	西舘道範	46. 4～48. 3	2	先崎清	49. 4～55. 3	6
山口啓輔	43. 4～45. 3	2	佐々木芳雄	46. 4～48. 3	2	鈴木美枝子	49. 4～49. 9	1
斎藤和夫	43. 4～46. 3	3	船田元喜	47. 4～50. 3	3	太田宏	50. 4～52. 3	2

氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数	氏名	在職期間	年数
	昭和	年		昭和	年		昭和	年
藤田光明	50. 4～53. 3	3	柳沼陽一	51. 4～55. 3	4			
渡辺賢典	49. 9～53. 3	4	佐川昇	52. 4～55. 3	3			
荒井研次	50. 4～54. 3	4	後藤恵子	52. 4～55. 3	3			
佐藤善久	50. 4～55. 5	5	関根利三	52. 4～55. 3	3			
菅野正行	50. 4～54. 3	4	清水清治	52. 4～53. 3	1			
千葉信夫	50. 4～53. 3	3	江川由利子	52. 4～53. 3	1			
渡部克彦	50. 4～52. 3	2	中山成子	52. 4～53. 3	1			
鈴木敏子	50. 4～51. 3	1	佐藤弘一	52. 6～55. 3	3			
山寺代泰	51. 4～52. 3	1	岡貴美子	53. 4～55. 3	2			
小林珠枝	51. 4～52. 3	1	秋元恵美	53. 4～55. 3	2			
荒井一成	51. 4～54. 3	3						

※氏名は当校在職時の氏名による。

※在職期間は当校在職（本校・分校）の全期間であり、年数について在職期間１年未満は１年に、１年以上の場合で月端数がある場合は、５捨６入とし、年の整数とした。

編集後記

●ゾロ目と母校

33、44、55、単に二つの数が並んでいるにすぎないこのゾロ目の数が、実は、母校と非常に深いかかわりをもった数である。

33……母校が創立10周年を迎えた昭和33年。連続台風21号、22号による伊南川の大氾濫に見舞われ、校舎の一部、体育館、寄宿舎が流失するなど、開校以来初のきびしい自然の洗礼を受けた年である。自分が3年生の時であり、あの荒涼とした母校の姿は忘れることができない。

44……昭和33、34、41年の度重なる台風の被害を受けた母校も、その後伊南川の堤防の補強嵩上げなどにより、これで安心と思った矢先の昭和44年。今度は、まったく誰も予想だにしなかった、鹿水川や深沢川などの中小沢川が、有史以来初めてといわれる集中豪雨で土石流となり、校舎や校庭が泥砂で埋った年である。

55……昭和55年。創立33周年を迎えるとともに、校舎改築落成、新体育館落成など、母校が大地にしっかり根をおろし未来に躍進する、喜びの年である。

先の二つのゾロ目は、母校の存廃や移転問題を提起するなど、正にサンザンクロウの苦難にみちた、母校の青春時代であった。最後のゾロ目は、ゴーゴー、正に栄光と躍進のゾロ目である。

母校の沿革史に見たゾロ目のお話。

●記念誌のこと

創立30周年記念行事が話題にのぼったのは、母校の校舎改築工事が着工された昭和52年の夏頃であった。創立30周年、人生なら而立、学校にとっても一つの節目であるその年が話題になったのは当然である。校舎の改築工事が進んでいる中で、工事完成の年に合わせて、創立33周年と校舎落成の記念行事を実施するという方針が、佐川校長、渡部P.T.A会長から示された。昨年7月20日、第1回の創立33周年・校舎改築落成記念行事実行委員会が開催され、その記念行事の一環として記念誌の発行が決定された。同日付で我々30名が記念誌委員に委嘱され、記念式典に発行するということで、約1年間の時間が与えられた。初めは、色んなアイデアを出し合い会合を重ね、熱心に作業を進めていたが、1年という時間の長さに眩惑され、怠け癖が出てしまった。年頭から初夏にかけてのブランクが8月にしわ寄せになってしまい、印刷所に原稿を持ち込んだのが式典の40日前である。

このような状況で当初予定した内容が必ずしも充足されず、特に母校の沿革史を深く掘りおこし次代に残すことが出来なかったことが残念である。しかし、原稿をお願いした、歴代校長先生はじめ諸先生方、次郎先生、斎藤賢農協組合長さん、五十嵐文泰前事務長さん、菅家利徳さんそして多くの同窓生諸兄の情感あふるる詩情に充ちたご寄稿によって、母校のドラマを生々しく再現できたことを心から感謝申し上げたい。

三分の一世紀を生きた母校があまりにも人間的でドラマティックであるとともに、地域の人々との深いかかわりを持ち、その情熱によって育まれて来たことを知り、ただ敬服するばかりである。

本書は、我々若輩の委員が仕事の合間に編集したもので、関係諸氏のご満足をいただけるものではないが、新校舎落成と創立33周年の記念の誌としてお納めいただければ幸いである。

最後に、本書編纂にあたり、貴重な資料を提供下さった安藤紫香氏、高校の辺見事務長、同窓生諸兄、そして高校の前にそびえ立つ明神岳に登り、度々写真撮影を願った会津写真館、短期間にすばらしい印刷製本をして下さった北日本印刷、また、8月からの集中的な編集作業に協力下さった畠恵治先生、太田英成先生、岩渕国男君、五十嵐文紀君、角田厚君、馬場宗一君の労に感謝し、母校の一層の充実と躍進を祈念し、後記の筆をおきます。

記念誌委員長　五十嵐広

（南会津高校、昭和34年卒）

記念誌委員会

委員長	五十嵐　広	（同窓会　昭34卒）
副委員長	岩渕　国男	（同窓会　昭37卒）
委　員	畠　　恵治	（南会津高校）
委　員	太田　英成	（南会津高校）
委　員	武田吉之助	（南会津高校）
委　員	菅野　　諭	（南会津高校）
委　員	後藤　恵子	（東白川農商高校）
委　員	目黒　良夫	（同窓会　昭29卒）
委　員	斎藤　新二	（同窓会　昭30卒）
委　員	酒井　健一	（同窓会　昭31卒）
委　員	菊地　利男	（同窓会　昭32卒）
委　員	小沼　照芳	（同窓会　昭33卒）
委　員	斎藤　　直	（同窓会　昭35卒）
委　員	渡部　忠雄	（同窓会　昭38卒）
委　員	渡部　常衛	（同窓会　昭39卒）
委　員	近藤　　努	（同窓会　昭40卒）
委　員	星　　長吉	（同窓会　昭41卒）
委　員	五十嵐文紀	（同窓会　昭42卒）
委　員	菅家　　伸	（同窓会　昭43卒）
委　員	馬場　政光	（同窓会　昭44卒）
委　員	五十嵐竹則	（同窓会　昭45卒）
委　員	星　　光恵	（同窓会　昭46卒）
委　員	近藤　甚悦	（同窓会　昭47卒）
委　員	馬場　信義	（同窓会　昭48卒）
委　員	五十嵐正雄	（同窓会　昭49卒）
委　員	角田　　厚	（同窓会　昭50卒）
委　員	辺見　　久	（同窓会　昭51卒）
委　員	馬場　宗一	（同窓会　昭52卒）
委　員	土橋　二郎	（同窓会　昭53卒）
委　員	馬場　純也	（同窓会　昭54卒）

南会津高等学校校舎落成・創立33周年記念誌

〔非売品〕

昭和55年10月16日発行

発行者　記念行事実行委員会
発行所　福島県立南会津高等学校
福島県南会津郡南郷村大字界字向川原2000番地
ＴＥＬ（02417）3－2221
編　集　記念誌委員会
製　作　歴史春秋社
福島県会津若松市門田町中野
ＴＥＬ（0242）26－6567
印　刷　北日本印刷
製　本　羽賀製本

©1980

校舎改築落成
創立33周年
記念誌